

目 次

1. 平成 26 年度東北大学男女共同参画委員会活動報告	
・ 委員長報告	1
2. 各ワーキンググループの活動報告	
・ 広報・シンポジウム WG	6
・ 奨励制度 WG	6
・ 次世代・女性研究者支援 WG	8
・ 両立支援 WG	9
・ 中期目標・報告書作成 WG	10
3. 各部局の取組	
・ 文学研究科	12
・ 教育学研究科	12
・ 法学研究科	13
・ 経済学研究科	13
・ 理学研究科	14
・ 医学系研究科	15
・ 歯学研究科	15
・ 薬学研究科	16
・ 工学研究科	17
・ 農学研究科	22
・ 国際文化研究科	25
・ 情報科学研究科	26
・ 生命科学研究科	26
・ 環境科学研究科	27
・ 医工学研究科	27
・ 教育情報学研究部・教育部	28
・ 金属材料研究所	28
・ 加齢医学研究所	29
・ 流体科学研究所	29
・ 電気通信研究所	30
・ 多元物質科学研究所	31
・ 災害科学国際研究所	31
・ 東北アジア研究センター	32
・ 病院	33
・ 本部事務機構	34
4. 中期目標・中期計画達成のための各部局の取組	
・ 文学研究科	35
・ 教育学研究科	36
・ 法学研究科	37
・ 経済学研究科	38

・ 理学研究科	39
・ 医学系研究科	40
・ 歯学研究科	41
・ 薬学研究科	42
・ 工学研究科	43
・ 農学研究科	44
・ 国際文化研究科	46
・ 情報科学研究科	47
・ 生命科学研究科	48
・ 環境科学研究科	50
・ 医工学研究科	51
・ 教育情報学研究部・教育部	52
・ 金属材料研究所	53
・ 加齢医学研究所	54
・ 流体科学研究所	55
・ 電気通信研究所	56
・ 多元物質科学研究所	57
・ 災害科学国際研究所	58
・ 東北アジア研究センター	59
・ 病院	60
・ 本部事務機構	61
 5. 男女共同参画推進センターの取組	
・ 男女共同参画推進センターについて	62
・ 平成 26 年度活動実績一覧	64
・ 平成 26 年度活動報告書	67
・ 平成 26 年度男女共同参画・女性研究者支援事業について	76
 6. 平成 26 年度東北大学男女共同参画委員会委員名簿	81
資料 1 平成 26 年度東北大学男女共同参画委員会 委員会開催等記録	82
資料 2 東北大学男女共同参画委員会報告（H14.4.16 評議会報告）に対する対応状況	84
資料 3 東北大学における男女共同参画推進のための行動指針（H25.8.8 策定）に対する対応状況	88
資料 4 第 11 回男女共同参画シンポジウムパンフレット	89
資料 5 第 11 回男女共同参画シンポジウムでのアンケート集計結果	103
資料 6 第 3 回仙台 I ゾンタクラブ 東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業公募要項	109
資料 7 第 1 回澤柳記念賞公募要領	113
資料 8 杜の都ジャンプアップ事業 for 2013 事後評価	116
資料 9 男女共同参画推進センターニュースレター	118
資料 1 0 平成 26 年度サイエンス・エンジェル活動報告書	123
資料 1 1 男女共同参画推進センターリーフレット	126
資料 1 2 東北大学における在籍教員・学生の女性比率	128

1. 平成 26 年度東北大学男女共同参画委員会活動報告

委員長報告

男女共同参画委員会委員長 植木 俊哉

1 これまでの活動状況と成果

(男女共同参画委員会の設置)

東北大学男女共同参画委員会は平成 13 年 4 月に設置されて以来、本学における男女共同参画状況の調査・広報活動、ジェンダー教育の振興、相談窓口の設置などを任務として積極的な活動を続けてきた。活動の基盤となっているのは、平成 13 年度にアンケート調査を基にまとめられた報告書「東北大学における男女共同参画推進の方針に関する提案」であり、とりわけそこに掲げられた 13 項目の提言である。

(平成 14 年度)

平成 14 年度には、その第 1 項目で提言されたシンポジウムを「第 1 回男女共同参画シンポジウム：学問・教育と男女共同参画」と題して開催するとともに、阿部博之総長（当時）のもとで「男女共同参画推進のための東北大学宣言」を発表した。この宣言は、男女共同参画奨励賞（沢柳賞）の創設、研究・労働環境の改善、不服申立・救済制度の確立などの方針を打ち出し、わが国の帝国大学の中で初めて女子学生に門戸を開放した歴史をもつ「東北大学が全国の大学の前駆となるべく、率先して推進する」ことを明らかにしたものである。

(平成 15 年度)

平成 15 年度には、「男女共同参画推進のための東北大学宣言」を受けて沢柳賞の公募と審査を行い、「第 2 回男女共同参画シンポジウム：性差とは何か？ヒトと人のあいだ」と併せて第 1 回授賞式を開催した。委員会内では、従来の「実態調査」「広報」「相談窓口」という 3 つの WG に加えて、「両立支援」「奨励制度」「報告書」をそれぞれ担当する WG を新たに設置し、取組の強化に努めた。また、各部局に「男女共同参画ワーキンググループ」を設け、部局ごとの状況調査や改善策の検討を開始した。

(平成 16 年度)

平成 16 年度には、「第 3 回男女共同参画シンポジウム：現代日本社会とジェンダー」と併せて沢柳賞の第 2 回授賞式を開催した。実態調査 WG では、前年度に実施した意識調査の結果をリーフレットにまとめ、全学生及び全教職員に配布した。また両立支援 WG では、教職員アンケート等で要望の強かった学内保育所の設置へ向けて本格的な準備を進め、前年度からの検討をもとに運営プランを策定するとともに、補助金の申請手続き等を進め、次年度の開所を目指して大きな一歩を踏み出した。

(平成 17 年度)

平成 17 年度には、待望の学内保育所「川内けやき保育園」が 9 月に開設され、運営には各キャンパス代表からなる「運営会議」が携わることとなった。利用者は順調に増加し、当時の定員（25 名）を超過している状態であった。11 月 26 日には第 4 回男女共同参画シンポジウムが「どこまで進んだ大学の男女共同参画」をテーマに開催し、併せて第 3 回沢柳賞の授賞式を行った。また「大学等における男女共同参画を推進し、ネットワークを構築するための呼びかけ」が採択され、大学のネットワーク構築を推進していくことが確認された。

(平成 18 年度)

平成 18 年度には、文部科学省科学技術振興調整費による「女性研究者支援モデル事業」

に応募し、「杜の都女性科学者ハードリング支援事業」が採択された。事業推進に当たっては、「女性研究者育成支援推進室」を設置し、委員会と密接に連携しながら各種事業を進めることとした。杜の都女性科学者ハードリング支援事業の一環として「育児のための短時間勤務制度の施行に関する協定書」をまとめ、平成 19 年度より実施されることとなり、併せて短時間勤務制度を利用する教員の研究業務評価において必要な配慮を行うこととした。10 月 15 日には第 5 回男女共同参画シンポジウムを「大学における女性研究者の育成と支援、その施策」をテーマに開催し、併せて第 4 回沢柳賞の授賞式を行った。また、男女共同参画に関する「部局長アンケート調査」及び「川内けやき保育園の利用に関するアンケート調査」を実施し、現状の把握に努めた。

(平成 19 年度)

平成 19 年度には「育児のための短時間勤務制度」の試行実施、「育児休業等の取得による任期の延長」の検討を行い、いずれも平成 20 年度から実施されることとなった。また、「仙台 I ゾンタクラブ」からの支援金による「大学院女子学生海外渡航支援事業（ローズ支援事業）」を立ち上げ、大学院女子学生を対象に主として海外渡航費用を援助することとした。11 月 17 日には第 6 回男女共同参画シンポジウムを「イノベーションを生み出す男女共同参画」をテーマに開催し、併せて第 5 回沢柳賞の授賞式を行った。実態調査 WG では教職員を対象にインタビューを実施し、きめ細やかな調査を行った。

(平成 20 年度)

平成 20 年度には「育児のための短時間勤務制度」及び「育児休業等の取得による任期の延長」について制度化を実現したほか、平成 19 年度から実施している「大学院女子学生海外渡航支援事業（ローズ支援事業）」では 2 件が採択（うち 1 件は辞退）となった。11 月 22 日には第 7 回男女共同参画シンポジウムを「大学の男女共同参画－見えない壁を打ち破るには－」をテーマに開催し、その基調講演では、オーゲ・B・グルットレ駐日ノルウェー王国大使より「ノルウェーの男女共同参画は今」を演題に講演いただいた。併せて第 6 回沢柳賞の授賞式を行った。また、実態調査 WG 及び両立支援 WG を中心として全教職員及び大学院生、研究者等を対象に学内保育所についてのアンケート調査を実施した。なお、本委員会について、本学の男女共同参画をさらに推進する観点から、構成メンバーを拡充することとし、平成 21 年度から新たに各附置研究所（東北アジア研究センター含む）から各 1 名、病院からも 1 名の委員を選出することとした。

(平成 21 年度)

平成 21 年度には、第 8 回東北大学男女共同参画シンポジウムを 11 月 28 日に片平さくらホールで開催した。「東北大学男女共同参画の現状～本音で語る課題と展望～」をテーマに、本学の男女共同参画の現状について、報告講演を踏まえつつ、薬学研究科長及び農学研究科長の参加も得てパネルディスカッションを行った。併せて第 7 回沢柳賞の授賞式を行った。また、平成 13 年度に部局長の意識調査のためのアンケートが実施されたが、その後の進展などを調査するために部局長アンケートを実施した。さらに、星陵地区に「星の子保育園」を設置、平成 22 年 3 月にオープンした。このことは、本委員会の平成 20 年度両立支援 WG・実態調査 WG が担当した「第二保育所設置に関するアンケートまとめ」において、「川内けやき保育園に続き、星陵地区と青葉山地区に順次新たな保育施設を設置」とされた内容に沿うものであった。

また、文部科学省科学技術振興調整費による新規事業「女性研究者養成システム改革加速」に「杜の都ジャンプアップ事業 for 2013」が採択され、初年度は 3 名の新規養成女性研究者を採用した。

(平成 22 年度)

平成 22 年度には、第 9 回東北大学男女共同参画シンポジウムを 12 月 19 日に片平キャン

パスエクステンション教育研究棟で開催した。「男女共同参画政策と大学の使命」をテーマに、内閣府男女共同参画局長をお招きし、活発なパネルディスカッション等が行われた。

沢柳賞については、例年通り募集を行い、研究部門及びプロジェクト部門特別賞の各1件を採択し、ローズ支援事業においては、8件の応募の中から2件を採択した。また、「東北大学における研究者支援に関するアンケート」を実施し、学内で行われている男女共同参画の実現に向けた様々な取組について、どの程度浸透しているかの調査やどのような支援を必要としているのかの調査を実施した。

「杜の都ジャンプアップ事業 for2013」については、昨年度に引き続き、既在籍女性研究者の支援事業や新規女性研究者11名を採用した。

(平成23年度)

平成23年度は、東日本大震災の影響により、男女共同参画シンポジウムを開催することが出来なかったが、関係各位の尽力により、沢柳賞とローズ支援事業は、例年通り実施することが出来、沢柳賞は、研究部門1件を採択し、ローズ支援事業においては、2件を採択した。「杜の都ジャンプアップ事業 for2013」については、昨年度に引き続き、既在籍女性研究者の支援事業や新規女性研究者3名を採用した。

(平成24年度)

平成24年度は、平成19年度より「仙台I ゾンタクラブ」からの支援により5年間実施してきたローズ支援事業を、「仙台I ゾンタクラブ 東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業」へ名称変更し新たに5年間支援していただくことが確認されたため、平成24年7月から募集を行い、6件の応募があり2件を採択した。男女共同参画シンポジウムについては、11月18日(日)に片平さくらホールにおいて、「東北大学における男女共同参画の新たな展望」をテーマに開催された。第一部は、来賓の板東文部科学省高等教育局長の挨拶に続き、沢柳賞の受賞講演が行われた。第二部は、経済学研究科の吉田教授による「男女共同参画と研究者・社会・男性」をテーマに特別講演が行われ、引き続き「三度さきがけに向けて」をテーマに板東高等局長や辻村副委員長、吉田教授等によるパネルディスカッションが行われた。

また、第10回「男女共同参画奨励賞(沢柳賞)」について、奨励制度WG(田中真美座長)を中心に公募と審査が行われ、活動部門2件の受賞者が決定された。プロジェクト部門は廃止され、研究部門と活動部門の2部門で実施された。実態調査アンケートについては、平成22年度に引き続き「研究者支援事業に関する第2回実態調査」を12月から1月にかけて、今後の男女共同参画を計画・立案するために必要な情報や意見を得ることを目的として実施し、約900人からのアンケート回答を得た。

昨年度に引き続き、「杜の都ジャンプアップ事業 for 2013」を実施し、平成24年度は新規養成女性研究者を3名採用した。

(平成25年度)

平成25年度は、女子学生入学から100周年を迎え、女子学生入学100周年記念事業PT(大隅典子座長)を中心に、記念シンポジウムの開催、サイエンス・エンジェルによる女子高校生向けのイベント、東北大学附属図書館及び史料館と連携した企画展の開催、記念ロゴマークの作成など各種記念行事を実施した。

同時に男女共同参画委員会の設置(平成13年)及び男女共同参画推進のための東北大学宣言(平成14年)から10年程度が経つことを踏まえ、今後10年の本学における男女共同参画推進のための指針として「東北大学における男女共同参画推進のための行動指針」を策定し、8月に開催した記念シンポジウムにおいて里見進総長より発表した。

また、平成21年度に採択された「杜の都ジャンプアップ事業 for 2013」では、新規養成女性研究者を3名採用するとともに、災害科学国際研究所を新たに支援対象部局とし、未支援となっていた工学研究科の女性教員と合わせ3名の研究費を追加支援した。

2 平成 26 年度の活動

これまでの成果等を踏まえ、平成 26 年度は以下のような活動を行った（なお、詳細はそれぞれの報告等を参照していただきたい）。

(1) 男女共同参画推進センターの設置

平成 25 年度に策定した「東北大学における男女共同参画推進のための行動指針」に基づき、女性研究者育成支援推進室を発展的改組し、恒常的支援体制を整備するため、平成 26 年 4 月に男女共同参画推進センターを設置した。

(2) 「男女共同参画・女性研究者支援事業」の実施

平成 21 年度から平成 25 年度まで実施した「杜の都ジャンプアップ事業 for2013」の事業終了に伴い、後継事業として学内予算を用いて、「男女共同参画・女性研究者支援事業」を実施した。

(3) 第 3 回仙台 I ゾンタクラブ 東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業

例年どおり、奨励制度WG（田中真美座長）を中心に、平成 26 年 5 月から募集を行い、12 件の応募があり 2 件を採択した。

(4) 第 1 回澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（澤柳記念賞）の授与

奨励制度WG（田中真美座長）を中心に、男女共同参画社会をめざす活発な取組の一助となるよう、アカデミアにおける男女共同参画の先駆として各分野で活躍し多大な貢献をされた方々を選考し顕彰する「澤柳記念賞」を創設し公募した。後述の第 11 回男女共同参画シンポジウムにおいて、A 賞（本賞）1 名、B 賞（奨励賞）1 グループを表彰した。

(5) 第 11 回男女共同参画シンポジウム開催

11 月 29 日（土）に片平さくらホールにおいて、「未来の男女共同参画社会への新たな発信～女子学生入学 101 年目の節目を迎えた東北大学から」をテーマにシンポジウムを開催した。第一部は奥山恵美子仙台市長、河村潤子文部科学省生涯学習政策局長による来賓挨拶に続き、第 1 回澤柳記念賞の表彰及び受賞講演を行った。第二部は前女性活力・子育て支援担当大臣 森まさこ参議院議員による特別講演、第三部は大隅典子総長特別補佐（男女共同参画担当）を中心にパネルディスカッションを行った。

3 今後の課題と提言

平成 26 年度は、東北大学における男女共同参画推進のための行動指針に基づき、男女共同参画推進センターを設置し「男女共同参画・女性研究者支援事業」などの各種取組を行ってきた。平成 27 年度は、第 2 期中期目標・中期計画期間の最終年度にあたり、これまでの取組及び国全体、国立大学法人全体、本学、部局等の現状を踏まえ、今後一層の発展に繋がるような活動を行っていくこととしたい。

(1) 男女共同参画委員会及び男女共同参画推進センターの在り方

平成 26 年 4 月に男女共同参画委員会のもと、男女共同参画推進センターを設置したが、これが広く学内・学外の関係者の理解を得てうまく機能する必要がある。同時に男女共同参画委員会においても、学内における男女共同参画の推進及び女性研究者の支援をより効果的・効率的に展開するよう、一層の活性化を図る。

(2) 女性教員比率向上のための施策の具体化

本学の女性教員比率は少しずつ継続して上向きになっているものの、いまだ助教以上で 10.7%にとどまっており、国立大学協会が設定した数値目標には達していない。引き続き男女共同参画推進センターを中心に女性研究者支援、次世代育成などの各種支援施策を実施する。

(3) 学内保育施設の充実

学内保育施設として「川内けやき保育園」「星の子保育園」を設置・運営し、仕事と育児

の両立支援を図っているが、入所希望者は年々増え続け、待機者がでている状況にある。

新たな保育施設の設置について、学内外の諸事情等を勘案しつつ、引き続き検討を進める。

(4) その他

本学の理事や部局長、事務系職員幹部（部長・課長）への積極的な女性登用が望まれる。

平成 23、24 年度は、法学研究科とW P I で部局長に女性が選考されたものの、平成 25、26 年度は WPI のみとなっている。今後、部局長や総長特別補佐、また事務系職員では部課長への女性登用が期待される。

2. 各ワーキンググループからの活動報告

広報・シンポジウムWG

広報・シンポジウムワーキンググループは、男女共同参画の広報に関する業務を行っている。平成 26 年度には、永次史（多元・座長）、大隅典子（総長特別補佐）、植木俊哉（委員長）、寺田眞浩（理学）、山本照子（歯学）、寺山恭輔（東北アジア）、沼崎一郎（文学）、村木英治（教育情報）、齋藤仁（総務企画部）をメンバーとして活動を行った。

今年度は平成 26 年 11 月 29 日（土）、片平キャンパス 片平さくらホールにて、第 11 回東北大学男女共同参画シンポジウムを開催した。今年度のシンポジウムのテーマは未来の男女共同参画社会への新たな発信～女子学生入学 101 年目を迎えた東北大学から～と題し、未来を見据えた男女共同参画社会の実現に向けて、特に若い世代を対象として開催した。まず里見進総長の挨拶に引き続き、ご来賓としてお招きした仙台市長奥山恵美子氏、文部科学省生涯学習政策局長河村潤子氏よりご挨拶を頂いた。第一部では今年度から設立された第 1 回澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（澤柳記念賞）の授賞式が行われた。引き続き、A 賞（本賞）を受賞された明治大学法科大学院教授辻村みよ子氏、及び B 賞（奨励賞）を受賞された SA 輝友会の会長八木橋奈央氏の受賞講演が行われた。さらに、男女共同参画推進センターの愛称及びロゴマークが男女共同参画推進センター長植木俊哉氏より発表され、それぞれを作成された島田宏哉氏、小池友基氏への表彰式が行われた。その後、男女共同参画推進センター副センター長米永一郎氏より東北大学における男女共同参画の取組について紹介された。休憩時間には研究スキルアップ経費の支援を受けている女性研究者よりポスター発表が行われた。第二部では前国務大臣女性活力・子育て支援担当、参議院議員森まさこ氏の特別講演が行われた。本学の卒業生である森氏から、ご自身の経験に基づいた男女共同参画の取組について、熱気のこもったご講演をいただいた。休憩に引き続き第三部では未来の豊かな社会の実現に向けた男女共同参画社会の在り方をテーマに男女共同参画推進センター副センター長大隅典子氏のコーディネートのもと、4 人のパネリストの方（株式会社日本総合研究所劉磊氏、東京医科歯科大学メディカルフェロー塩飽由香利氏、東北大学大学院生命科学研究科博士課程後期 2 年阿部彰子氏、東北大学大学院法学研究科博士課程後期 3 年樋口恵佳氏）によるパネルディスカッションが行われた。1 時間という短い時間ではあったが、若い方々による非常に活発なパネルディスカッションであった。最後に男女共同参画委員会委員長植木俊哉氏より閉会挨拶が行われ、盛会のうちにシンポジウムを終了した。今回のシンポジウムには約 140 名の参加者があり、アンケート結果からも非常にポジティブな意見が多く寄せられた。今後、さらに男女共同参画を進めるべく、広報を進めていきたいと考えている。

広報・シンポジウムWG 座長
永次 史

奨励制度WG

奨励制度 WG は、石綿はる美（法学）、山口信次郎（生命科学）、佐藤透（国文）、斎藤浩海（工学）、井川俊太郎（加齢研）、田中真美（医工学）の 6 名から構成されている。今年度は、新たに設立された男女共同参画に関する顕彰制度、澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（澤柳記念

賞)と仙台Iゾントクラブ東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業(旧ローズ支援事業)に関わる活動を行っている。

活動状況

1. 第3回仙台Iゾントクラブ東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業について、6月14日まで公募を行ったところ、12件の応募があった。6月25日にWGで審査を行った。審査の観点には、申請書の内容(申請理由、学会規模、指導教員の推薦理由等)、当該国際学会への参加の意義、過去の海外での国際学会における発表回数、等を申請書から精査した。以下の2名に対し援助を行うこととした。なお、辞退が発生した場合に備え3名の補欠支援者も決定しておいた。7月22日の本委員会へ報告を行い了承された。

- ・医工学研究科 塩谷 真帆
- ・医学系研究科 久保 有美子

2. 澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞(澤柳記念賞)

① 沢柳賞からの発展である、新たな顕彰制度についてWGでタイトルや公募要領、推薦書(案)などを検討し、5月19日開催の本委員会へ提出審議し承認された。賞の名前は「澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞(澤柳記念賞)」、とすること、また要項、申請書などは資料7であり、7月31日まで公募を実施した。

② 5月19日の本委員会にて選考委員について本委員会委員長一任となり、以下のとおり決定した。

- ・植木 俊哉 (選考委員会委員長、男女共同参画委員会委員長)
- ・田中 真美 (医工学研究科教授・奨励制度WG座長)
- ・山口 信次郎 (生命科学研究科教授・奨励制度WG)
- ・石綿 はる美 (法学研究科准教授・奨励制度WG)
- ・末松 和子 (高度教養教育・学生支援機構教授・外部構成員)
- ・山谷 知行 (国際高等研究教育院長・農学研究科教授・外部構成員)
- ・宗片 恵美子 (特定非営利活動法人イコールネット仙台・学外構成員)
- ・齋藤 仁 (総務企画部長・男女共同参画委員会)

③ 9月4日(木)に選考委員会を開いた。応募はA賞(本賞):澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞4件、B賞(奨励賞):澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画奨励賞1件であった。審査表、応募書類等を事前に送付し検討していただき、当日は応募のあったものについて慎重に選考をした。A賞については、本審査委員会で1件選出できたが、B賞については種々意見交換をした結果、応募1件のみでは審査が困難であることから、B賞のみ再公募をしたうえで、改めて選考することとした。B賞再公募は、9月12日(金)正午締切とすることとした。

④ 9月17日(水)に再公募の東北大学男女共同参画賞(澤柳記念賞)に関連して選考委員会を行った。再公募により、B賞の応募件数は3件となり、この中から慎重に選考を行い、1件を選出した。A賞とB賞について、9月22日(月)にHP等で結果を公表することとし、プレスリリース文は事務局が担当することとなった。また、奨励賞の概要や位置付け等について、選考会議で議論になった点を基に、WGで今後検討を重ねることとした。

⑤ 選考結果

A賞：澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞

受賞課題名 日本の男女共同参画社会の推進を牽引する先導的活動について

受賞者 明治大学法科大学院 教授 辻村みよ子氏

B賞：澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画奨励賞

受賞課題名 サイエンス・エンジェル修了生を中心とした有志団体による男女共同参画への取組

受賞者 SA輝友会（エスエーきゆうかい）

⑥ 10月16日に行なわれた本委員会にて②選考委員、③④選考の経緯、及び⑤選考結果について報告し、承認された。また、B賞の奨励賞については、年齢制限があり対象者が少ない等の課題があるため、応募資格等を含め次年度に向けて検討することとした。

⑦ 東北大学男女共同参画賞（澤柳記念賞）のA賞B賞の位置づけについて、WGで検討し、委員会に諮った。

奨励制度WG座長

田中 真美

次世代・女性研究者支援WG

次世代・女性研究者支援ワーキンググループは、米永一郎（金研）、田中真美（医工学）、大隅典子（医学）、有本昌弘（教育）、寺田眞浩（理学）、高橋信行（薬学）の計6名から構成されている。昨年度までの「杜の都女性研究者ハードリング支援事業」と「杜の都ジャンプアップ事業 for 2013」を統合し、今年度より、男女共同参画・女性研究者支援事業として下記の各種支援プログラムとサイエンス・エンジェル活動の実施を行った。各種制度の概略を下表に示す。その中で、新規試みとして事務補佐員1名が週1、2日程度の単位で軽微な事務補佐を2、3名の利用者に対して行うシェア型の研究者支援要員制度を開始した。

<平成26年募集実施プログラム>

	プログラム名	内容	対象部局	対象者	募集締切
1	研究支援要員	研究支援要員雇用のために必要な人件費の補助(上限200万円)	自然科学系部局	自然科学系の女性教員	平成26年 2月20日
2	(新)研究支援要員(シェア型)	採択者同士で事務補佐員1名(総務企画部総務課より派遣)をシェア			
3	ベビーシッター利用料等補助	研究、講義、出張時のベビーシッター利用料等の補助(上限10万円)	全部局	教員、技術職員、PD、博士学生	

4	スタートアップ研究費	一年目 100 万円、二年目 50 万円の研究費を支援	全部局	新規採用の女性教員(助教以上)	平成 26 年 7 月 10 日
5	研究スキルアップ経費	会議・シンポジウム等の旅費支援 開催地が海外: 上限 40 万円、国内: 上限 15 万円	全部局	女性教員(准教授、講師、助教)	平成 26 年 (第一回) 4 月 15 日 (第二回) 10 月中旬
6	サイエンス・エンジェル	高校出張セミナー、オープンキャンパス、科学イベント企画・実施	自然科学系研究科	自然科学系の大学院女子学生	平成 26 年 (一次締切) 3 月 20 日 (二次締切) 5 月 9 日
7	女子学生海外渡航支援	海外で開催される会議・シンポジウム等の旅費支援(上限 15 万円)	全研究科	大学院女子学生	平成 26 年 5 ~6 月頃

本年度の利用者数は、研究支援要員制度 8 名、同（シェア型）2 名、ベビーシッター利用料等補助制度 28 名、スタートアップ研究費支援制度（1 年目）3 名、同（2 年目）3 名、研究スキルアップ経費補助制度（国外）20 名、同（国内）11 名、サイエンス・エンジェル制度 71 名であった。また、女子学生海外渡航支援事業では 2 名が採択された。

なお、これら支援制度の実施・運用を通じて、研究者の任用形態の多様化、支援対象分野など各種制度の利用資格に関する検討が必要であることが判明した。今後、それらを考慮した制度変更を進める予定である。

次世代・女性研究者支援WG座長
米永 一郎

両立支援WG

両立支援 WG は、有本昌弘（教育）、田中真美（医工学）、磯貝恵美子（農学）、有働恵子（災害）、小宮敦樹（流体）、全眞嬉（情報）、壹岐伸彦（環境）、佐藤静香（学相）の 8 名から構成されている。今年度は、第三保育施設の設置について WG を開き検討した。

開催状況

平成 26 年

10 月 1 日（水） 片平キャンパス第二会議室において、青葉山第三保育園設置に関し、種々意見交換を行った。定員は 50～100 名を予定し、可能な範囲で多く設定したいという旨の発言があった。また設置場所に関しては、地下鉄東西線駅近くに設置することとし、既存の建

物を利用するか新規で建設するか等の検討を行った。

両立支援WG座長

有本 昌弘

中期目標・報告書作成WG

1 活動報告

中期目標・報告書作成WGは、米永一郎（副委員長、金研）・坂本修一（通研）・宮崎真理子（病院）・千木良弘明（経済）・朝倉京子（医学）・齋藤仁（総務企画部）の計6名で構成されており、年次報告書の作成、中期目標・中期計画達成のための取組と課題の検討などを任務とする。本男女共同参画委員会報告書は、平成27年2月末までに提出された各WG・各部局の原稿をとりまとめ、3月において決定した。平成26年度は前年8月の女子学生百周年記念シンポジウムで策定された男女共同参画の推進に係る行動計画に基づいて、4月に男女共同参画推進センターが設置され、さらに男女共同参画・女性研究者のための各種支援制度が展開された。

2 東北大学男女共同参画の現状と対策

- 1) 東北大学男女共同参画委員会は平成13年に発足し、翌14年の第1回男女共同参画シンポジウムにおける「男女共同参画推進のための東北大学宣言」にしたがって、学内外における男女共同参画の推進にかかる取組に優れた成果を挙げてきた。また、文部科学省・科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル事業」での「杜の都女性科学者ハードリング支援事業」（平成18～20年度）、文部科学省・科学技術振興調整費「女性研究者養成システム改革加速」事業（現：文部科学省科学技術人材育成補助事業）での「杜の都ジャンプアップ事業for2013」（平成21～25年度）が実施され、高い評価結果を得た。また、本学独自に「女性研究者ハードリング支援事業」（平成21～25年度）を実施した。また21世紀COE「男女共同参画社会の法と政策」（平成15～19年度）、GCOE「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」（平成20～24年度）により男女共同参画推進政策や社会制度に関する学術研究が展開された。平成25年8月の女子学生入学百周年記念シンポジウムで総長より本学における男女共同参画推進のために、(1)両立支援・環境整備、(2)女性リーダー育成、(3)次世代育成、(4)顕彰制度、(5)地域連携、(6)国際化対応、(7)支援推進体制の行動指針が発表された。その指針に基づいて、これまでの女性研究者育成支援推進室が本年度男女共同参画推進センターに発展改組され、恒常的支援体制の中核として各種支援制度を実施された。しかしながら、平成26年度においても女性教員（助教・助手を含む）比率は依然として12.2%※（助教、助手を除く場合7.6%）にすぎず、その改善は緩慢であると云わざるを得ない。

- 2) 本学では、これまでの男女共同参画に係る歴史やその啓発・醸成活動、制度改革などを背景に、教職員のジェンダー・バランスの改善について、ポジティブ・アクションによる女性教員の採用や一律の数値目標の設定ではなく、総合大学としての分野毎の特徴を活かした各部局の自主的取組として進めている。ただ、そのより速やかな改善に向けて、部局評価等へ女性比率や女性支援制度の有無を評価項目とするなど基盤的な制度の改革が進められてきた。本学の「杜の都ジャンプアップ事業 for2013」も基本的に女性採用枠を設定せずに成果を挙

※ H26.5 学校基本調査より

げることができたことはその成果であろう。しかしながら、そのような状況においてジェンダー・バランスの改善をより加速するためには、策定された行動指針に沿った (a) 出産・育児、介護等における業務と家庭との両立に対するサポートの充実、(b) 研究・教育に専念できる環境整備、(c) 若手研究者の育成、(d) 女性リーダーの育成等が必要であり、男女共同参画委員会での制度の議論と策定にしたがった男女共同参画推進センターでの迅速な実施が有効になると期待する。

3) 本学構成員のワークライフバランスの確保とその両立のための支援策について、ハード的には学内保育園が平成 17 年に川内地区にけやき保育園、さらに平成 22 年に星陵地区に星の子保育園が開設された。ただ、現状において、それら保育園へは待機者が常態的に存在するなど、定員増、保育時間延長、さらに海外からの研究者・留学生の家族や障害児の受入などの要望が増大しており、行動指針においても国際化に対応できる施設や未設置地区での施設開設が明示されている。それを背景に、新しい保育施設の設置が学内諸事情を考慮しつつ検討が進められている。また、男性の育児参加の促進に向けて、ソフト的にも育児休業取得率を高めるための措置（例えば、現行の育児のための特別休暇日数の増加や、さらにパパ・クォータ制やその実施のための個人・部局業績評価を含む環境整備）、現行の短時間勤務制の拡充とカフェテリア型の支援制度など、制度上の多様化が望まれる。

4) 本学は構成員の男女共同参画意識改革を進めることを目的として研究教育支援システムとしてジェンダー・人権等に関する教育・研修を継続的に実施している。特に、アカデミック、パワー、セクシュアル等のハラスメントを根絶し、個性と人権を尊重し保障する研究教育環境を整備することが肝要である。

5) 東北大学の男女共同参画活動は平成 23 年度に震災とその復興のために停滞したが、24 年度に通常の活動に復し沢柳賞の授与を含め、第 10 回男女共同参画シンポジウムを開催した。そして、本年度は 11 月 29 日に第 11 回男女共同参画シンポジウムが開催された。（委員長報告及び広報・シンポジウム WG 報告を参照）。

男女共同参画奨励賞（沢柳賞）は平成 15 年度に創設以来、本学における男女共同参画に係る研究の奨励と活動の支援を通じて男女共同参画意識の啓発・醸成に貢献するなど、優れた成果を挙げてきた。この制度を発展させ、本年度よりアカデミアにおける男女共同参画の先駆として各分野で活躍し多大な貢献をなした方々に対する澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（澤柳記念賞）が創設され、2 名（グループ）が顕彰された。

これまで本学の男女共同参画と女性研究者支援事業は、従来それぞれを男女共同参画委員会と女性研究者育成支援推進室により有機的に連携して実施されてきた。今年度より、男女共同参画委員会が方針策定を行い、男女共同参画センターがそれにしたがって実施する体制となった。より包括的かつ効果的な実施により、より多くの学内構成員がシームレスにその支援を享受できるようになることが期待される。

中期目標・報告書作成WG座長
米永 一郎

3. 各部署の取組

文学研究科

文学研究科男女共同参画推進ワーキング・グループは、沼崎一郎教授（座長）・村山達也准教授・甲田直美准教授の3名の委員（女性1人、男性2人）によって構成されており、全学の男女共同参画委員である沼崎一郎教授がWGの座長を兼任し、活動している。

開催状況

会議については、男女共同参画推進ワーキング・グループの委員間で必要に応じて、メール等で行う形をとっている。

1 教職員や学生に対する男女共同参画活動への呼びかけ

男女共同参画シンポジウムへの参加、各種男女共同推進事業への応募等については、チラシ等を各専攻分野研究室に配布するとともに、主任教授へメール等で適宜呼びかけを行い、教員及び大学院生・学生への周知を図っている。

2 大学院専攻分野・学部専修における学生の男女構成比の均等化へ向けて

文学研究科・文学部には25の専攻分野・専修があるが、所属学生の男女構成比に違いが見られ、一部の専攻分野・専修では男性あるいは女性に大きく偏る傾向が続いている。今後どのように対応すべきか、引き続き検討を進めている。

3 東北大学における男女共同参画推進のための行動指針に関する検討

文学研究科として、どのような具体策を採ることができるか、引き続き検討を進めている。

教育学研究科

今年度は、委員会としては、100周年という節目でもあった昨年度の文部科学省生涯学習政策課男女共同参画学習課課長による講演会に類似した取組を構想した。その結果、スウェーデンのストックホルム大学から学術交流協定も含めて「スウェーデンでの男女共同参画」というテーマで、3名の育児もしながら女性研究者としてスウェーデンに永住された日本人による講演会をスケジュールに盛り込んだが、先方の都合で来年度に延期となった。今後、先進的な試みを聞きながら、学内での活発な議論を行う機会がもたれることも期待される。その他としては、シンポジウムへの積極的な参加を促す呼びかけをおこなった。

なお、専ら委員の長は、両立支援ワーキンググループ長という立場で責務を果たした。

法学研究科

法学研究科における東北大学における男女共同参画推進のためのワーキンググループは、渡辺研究科長、坂本評議員、佐々木副研究科長、藤王事務長、石綿の男性4名、女性1名の計5名からなり、研究科における男女共同参画の状況、及び男女共同参画推進の方策について検討することを任務とする。平成20年6月から平成25年3月まで、法学研究科を中心にグローバルCOEプログラム「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」が実施され、ジェンダー平等問題に取り組んできた。同プログラムは終了したものの、そこで培った知見を、研究・教育活動に活かすこと、また、教職員及び学生が、学内外で男女共同参画活動へ参加することを積極的に推奨することを目的として活動をしている。

また、法科大学院等で「ジェンダーと法」などの講義を開講しており、今後も引き続き男女共同参画の推進に向けて積極的に取り組むことを目指している。

開催状況

ワーキンググループの会合自体は開催されていないが、男女共同参画推進のための目標の作成の際など、必要に応じてメール等で審議・意見交換を行っている。

1 ジェンダー学関連科目の開講

法科大学院・公共政策大学院「ジェンダーと法」(演習)：糠塚康江教授(前期)

経済学研究科

経済学研究科男女共同参画ワーキンググループは、平成16年度より継続的に活動しており、女性研究者育成を含めた男女共同参画に関する問題を検討している。平成26年度は3名の教員(うち女性教員1名)から構成され、随時メール等で審議を行うとともに、必要に応じてミーティングを開催するという機動的な体制で動いている。また、学内及び研究科内各種委員会や、研究科内外のイベント等とも連携し、高い成果をあげられるよう工夫している。

活動記録

男女共同参画活動参画の推進のために経済学研究科では以下の活動をおこなってきた。

1 各種の機関で専門委員を務めている。主なものは以下の通り。

- ① 石垣政裕講師：子育てサポーター養成講座講師(宮城県)
- ② 若林緑准教授：「少子高齢化における家庭及び家庭を取り巻く社会に関する経済分析」研究会アドバイザー(独立行政法人経済産業研究所)
- ③ 吉田浩教授：宮城県男女共同参画審議会委員(宮城県)

また、吉田教授は読売新聞宮城版(平成26年5月21日)に「吉田教授：育児と両立 環境整備を」という記事を載せる等、メディアを通じた活動も行っている。

2 研究科内において、育児と仕事の両立支援策を継続的かつ積極的に進めてきた。現在、事務室職員(1名)が平成26年5月より短時間勤務制度を利用している。また、子の看護の

ための休暇（特別休暇）の制度（小学生未満の子の看護・病院受診や予防接種、健康診断等受けさせる際に取得できる）も、平成 26 年度に 4 名（事務室 2 名、助手 1 名、准教授 1 名）に利用されている。

理学研究科

理学研究科男女共同参画推進委員会は、平成 14 年 9 月に設置された「男女共同参画推進 WG」を前身とし、平成 17 年 4 月から理学研究科の正式な委員会として発足し、組織的な取組を行っている。委員長は全学の「男女共同参画委員会」委員を兼ね、各委員は専攻教員各 2 名と事務・技術職員から成る 15 名（男 10 名、女 5 名：教員 10 名、事務職員 3 名、技術職員 2 名）のメンバーと、委員会内に設置した WG（セミナー企画、広報、女性院生支援、環境改善検討）の実務をサポートするオブザーバー 2 名（女 2 名：教員 1 名、技術職員 1 名）から構成されている。

開催状況

平成 26 年

- 7 月 25 日 第一回理学研究科・男女共同参画推進委員会を開催し、今年度の活動方針を決めるとともに、それに基づき、役割分担（副委員長、セミナー企画 WG、広報 WG、女性院生支援 WG、環境改善検討 WG）と各責任者を決めた。第 11 回男女共同参画シンポジウム 11 月 29 日(土)の案内と参加の依頼を併せて行った。

活動報告

- 1 東北大学男女共同参画推進センターによりオープンキャンパスの企画の一つとして主催された下記の催しの広報ならびに運営を支援した。
 - ・ 平成 26 年 7 月 30 日（水）12:00～13:30 31 日（木）12:00～13:30
オープンキャンパス for 女子高校生 2014
参加者：女子高校生 約 100 名（30 日）、約 50 名（31 日）、若手女性研究者 7 名、サイエンス・エンジェル参加者 44 名、センター室員 3 名
理学研究科・合同 A 棟 2 階 第 3 共通講義室（204 号室、205 号室）にて、前半は女子高校生向けに本学の教員ならびに大学院生（サイエンス・エンジェル）が研究を紹介。第二部では昼食を取りながら女子高校生とサイエンス・エンジェルとのグループトークによる進路相談会と若手女性研究者によるキャリア・研究紹介を実施した。
- 2 平成 26 年 10 月に竣工した理学研究科・合同 C 棟(H-04 棟)の 4 階に新たに女性休憩室を設置し、理学研究科内に設置した他の女性休憩室（3 室）と同様にセキュリティー管理のもと運用を開始した。
- 3 女性休憩室利用ガイダンス開催
理学合同 A 棟 3 階 303 号室において女性休憩室利用説明会及び利用者登録を実施した。
 - ・ 第 1 回：平成 26 年 4 月 15 日（火）12:20-13:00 参加者 38 名。
 - ・ 第 2 回：平成 26 年 4 月 18 日（金）12:20-13:00 参加者 35 名。
 - ・ 第 3 回：平成 26 年 10 月 27 日（月）12:20-13:00 参加者 6 名。
 - ・ 第 4 回：平成 26 年 10 月 29 日（水）12:20-13:00 参加者 17 名。※現登録者数 109 名（留学生・外国人研究員 13 名を含む）

医学系研究科

医学系研究科男女共同参画推進委員会は、平成 26 年 4 月に医学系研究科の正式な委員会として発足した。委員長は全学の男女共同参画委員会を兼ね、委員は、専任教員 6 名（男女共同参画担当総長特別補佐の大隅典子教授を含む）と総務室事務職 1 名で構成される。平成 26 年 8 月には、医学系研究科の呼びかけで星陵地区男女共同参画ネットワーク（SEIGN: SEIryo Gender equality Network）が正式に発足し、医学系研究科の男女共同参画推進委員会からは委員長、委員 1 名（総長特別補佐）、総務室事務職 1 名が参加している。

開催状況

平成 26 年

- | | |
|---------|---|
| 6 月 4 日 | 第一回医学系研究科男女共同参画推進委員会を開催し、医学系研究科の男女共同参画の現状/取組の経緯について、意見交換を行った。そのうえで、星陵地区で男女共同参画ネットワークを構築した場合に他部局と連携して実施できる取組と、医学系研究科独自で取り組むべき課題とを整理した。 |
| 8 月～ | 医学系研究科内での取組事項について、適宜、メール会議にて協議を行った。また、星陵地区男女共同参画ネットワークでの協議内容・活動内容をメールにて共有した。 |

活動記録

平成 26 年度、医学系研究科では以下の活動を行った。

1 男女共同参画セミナーの主催

平成 27 年 1 月 13 日 17:00～18:30、「女子大学院生ネットワーク形成と次世代支援：東北大学サイエンス・エンジェル活動の紹介」と題したセミナーを主催した（歯学研究科男女共同参画 WG 委員会との共同開催）。プレゼンターは、男女共同参画推進センターの橋爪圭助手、医学系研究科のサイエンス・エンジェル 2 名、歯学研究科のサイエンス・エンジェル 1 名であった。参加者は 20 名と少なめではあったが、サイエンス・エンジェルの魅力を存分にアピールするセミナーとなった。

2 サイエンス・カフェの共催

平成 27 年 3 月 7 日に遺伝人類学会が主催するサイエンス・カフェ「遺伝医療がもたらす未来」（仮）を医学系研究科男女共同参画推進委員会が共催する方向で準備を進めている。

歯学研究科

平成 26 年度の歯学部男女共同参画 WG 委員会は、菅原俊二委員長のもと歯学研究科及び病院所属の教職員 6 名で構成され、下記の活動を行った。本年も、全学の男女共同参画委員会（山本照子委員）や男女共同参画推進センターからの講演会など様々な情報の伝達や、委員間の意見交換などにメールを活用した。

開催状況

平成 26 年度の事業計画について審議し、以下を行うこととした。

1 星陵地区におけるサイエンス・エンジェル活動紹介セミナーの実施

平成26年12月 今年度事業計画等について星陵地区男女共同参画ネットワーク クミーティングならびに委員間で、種々意見交換した。その結果、サイエンス・エンジェル活動紹介セミナーを医学系研究科と歯学部で共催し、星陵地区のセミナーとして実施することに向けて検討した。主催：医学系研究科男女共同参画推進委員会・歯学部男女共同参画WG委員会、共催：星陵地区男女共同参画ネットワークにて行った。

活動報告

1 星陵地区におけるサイエンス・エンジェル活動紹介セミナーの開催

平成27年1月13日に東北大学医学部保健学科A棟大講義室にて男女共同参画推進センター助手橋爪圭、医学系研究科M1松本郁美、歯学研究科D3龍剣蘭、医学系研究科D3（Aiセンター助手）高根侑美が講演者として、SA活動の魅力や体験談を発表した。

SAセミナーでの参加者は20名（アンケート回収16名）であった。参加者は多くなかったが、熱心に聴講され、議論も活発に行われ極めて好評であった。

薬学研究科

薬学研究科では、5名の教員により薬学研究科男女共同参画推進委員会を運営し、このうち1名が全学の男女共同参画委員を兼任している。本研究科における男女共同参画に関する活動は、本委員会が中心となり事務職員の協力のもと実施している。なお、薬学研究科の教授1名は、男女共同参画推進センターの協力教員も兼任している。

開催状況

会議は定期教員会議の場合あるいはメールを用いて、不定期に意見交換・情報提供を行う形をとっている。

活動内容

以下の取組を行うよう努めている。

- 1 次世代の女性研究者・女性リーダー育成のため、日本薬学会や薬学部同窓会と連携しながら、薬学分野で活躍している女性研究者を招聘し、学生向けの講演会を行う。
- 2 学生を対象としたサイエンス・エンジェル制度の説明会を開催し、学部生・大学院生の男女共同参画活動に対する意識の向上を図る。また、研究科内で現役サイエンス・エンジェルの講演会等を開催し、学生・教職員との交流を推進する。

上記活動以外では、全学の男女共同参画委員会や男女共同参画推進センターの活動について教員会議で報告するとともに、メールで教職員へ周知した。

工学研究科

工学研究科等男女共同参画委員会では、平成26年度は以下のように会議を開催し、また男女共同参画委員会と工学部入試検討委員会の共同によるミニフォーラム「工学にかける私の夢」(東北大学工学部オープンキャンパス)を実施した。

開催状況

平成26年

5月28日 工学系研究科等女性研究者育成支援推進室 (Association of Leading Woman Researchers in Engineering (以下 ALicE)) の平成25年度決算と平成26年度予算(案)について審議し承認した。また全学の男女共同参画・女性研究者事業研究スキルアップ経費を補う方策として「工学系分野における女性研究者の世界的プレゼンス向上・国際共同研究推進プログラム (Supporting Travel Expenses Program to Activate Lady's International Collaboration in Engineering(以下、STEP-ALICE))という女性研究者の出張旅費支援制度を審議・承認し、今年度から実施することにした。例年オープンキャンパスで開催している女子学生のためのミニフォーラム「工学にかける私の夢」を今年度も開催することにし、講師の選定及び広報等について審議した。

7月23日 全学スキルアップ経費を補う STEP-ALICE への第1回目の申請について申請内容を審査し、支援額を決定した。また、工学系研究者(男女問わず)の研究と育児の両立支援を目的としたベビーシッターや託児室の利用料等を補助するための「工学系ベビーシッター利用料等補助 (Support program of Child Care Expenses for Researchers in Engineering (以下、SoCCER)) の制度の提案とその要項(案)を審議し、承認した。

9月22日 SoCCER への申請状況と全学からの補助の状況から支援額を決定した。また STEP-ALICE 採択者による実施内容報告書を審議した。7月に開催した女子学生のためのミニフォーラムの開催状況を報告した。参加者数が昨年度より減少したことについて意見交換を行い、来年度に向けての改善案を整理した。

11月20日 STEP-ALICE への2回目の申請について申請内容を審議し、支援額を決定した。SoCCER への申請について申請内容を審議し、支援額を決定した。10月に開催された東北工学教育協会第62回年次大会に参加した委員から、他大学における女子学生・女性研究者の支援状況が報告された。

平成27年

2月19日 平成26年度の予算執行報告について審議し、承認した。また平成26年度 ALicE 活動報告、平成27年度 ALicE プログラム等の実施要領とオープンキャンパス時のミニフォーラム開催方針等の審議を行った。さらに STEP-ALICE と SoCCER の採択者からの報告内容を確認した。

1 女子学生のためのミニフォーラム「工学にかける私の夢」の開催

東北大学工学研究科等男女共同参画委員会の主催により、例年、オープンキャンパス特別企画として女子学生のためのミニフォーラム「工学にかける私の夢」を開催している。この

企画は多くの女子学生に工学の魅力を伝え、進路選択の参考にしてもらうことを目的としている。本年も7月30、31の両日に東北大学工学部で開催し、参加者は初日が32名、二日目が70名と初日の参加者が昨年より大幅に減少してしまった。原因は初日の開催時刻をオープンキャンパス見学者の帰宅間際に設定したためであった。ただし二日目は初日より開催時刻が早かったため、昨年よりも参加者は増加した。参加者に実施したアンケートからは「イメージとは違って、工学部には多様な研究分野や進路先があることがわかった」「背中を押してくれるような講演で元気づけられた。素敵な女性の先輩たちのように、自分も夢に向けて頑張りたい」という感想が寄せられた。来年度は、より多くの女子学生や保護者の方々に参加してもらえるように開催時刻の見直し等を行う予定である。

今年度のフォーラムでは、趣向を凝らして、例年の在学女子学生による講演にかえ、工学部の5学科に所属する女子学生5名に日頃の研究活動や日常生活などのクロストークを行ってもらった。また例年通り、本学出身の女性社会人と本学所属の女性教員からの講演も実施し、それぞれの立場から工学部を選んだ理由や研究・業務内容などの紹介と工学の魅力や女子学生へのメッセージが伝えられた。なおフォーラムのプログラムは以下の通りである。

プログラム

日 時： 7月30日(水) 14:45～16:00

場 所： 東北大学工学研究科・工学部 中央棟2階大会議室

講 演：

(1) 松八重一代「工学部で働く経済学者の視点」(マテリアル・開発系 准教授)

(2) 佐藤由子「しなやかな技術者を目指して」(原子力規制庁 技術基盤課)

(3) 各学科の女子学生とのクロストーク(門田友希、石川玲美、中野日佳梨、武弓侑樹、横手加奈)

参加人数： 32名

日 時： 7月31日(木) 13:15～14:30

場 所： 東北大学工学研究科・工学部 中央棟2階大会議室

講 演：

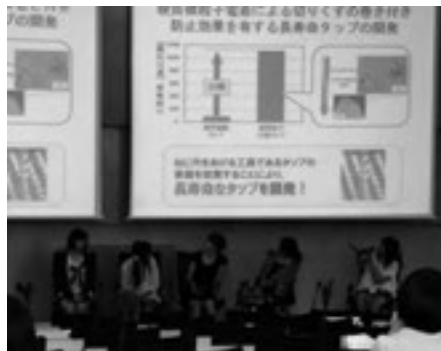
(1) 栗原和枝「世界からみた女性研究者の活躍」(化学バイオ系 教授)

(2) 五十嵐さやか「安全・安心な建築を究める-建築系研究者のキャリアパスの一例」
(大成建設株式会社 技術センター 建築技術研究所)

(3) 各学科の女子学生とのクロストーク

(門田友希、長谷川奈保、馬場史織、武弓侑樹、横手加奈)

参加人数： 70名



2014年 女子学生ミニフォーラム「工学にかける私の夢」

2 工学系女性研究者育成支援推進室（ALicE）の活動

工学系男女共同参画委員会のもとに、平成 25 年度より情報科学研究科、環境科学研究科、医工学研究科、災害科学国際研究所、未来科学技術共同研究センター及び環境保全センターと連携して東北大学工学系研究科等女性研究者育成支援推進室（ALicE）を設置しており、①女子学生・女性研究者の育成・支援、②工学分野における男女共同参画意識の醸成、③女子学生が将来継続的に働く意識を高めるためのグランドデザインの策定の 3 項目を主目的として、各種活動を継続的に行っている。

具体的にはⅠ. 研究活動の支援、Ⅱ. 女性研究者の見える化・工学魅力の発信、Ⅲ. 情報共有による問題解決、Ⅳ. ALicEの活動紹介について取り組んでいる。それぞれの項目について、平成 26 年度の活動内容を以下に示す。

I. 研究活動の支援

- 女性研究者の研究に係る出張経費の助成『STEP-ALICE プログラム』を、H26 年度前期は 4 名・5 テーマへ、後期は 3 名・4 テーマへの支援を実施した。
- 昨年度から開始した育児期の女性教員へ事務補佐員の派遣による、研究と育児の両立支援を本年度も行っている。本年度は 5 名の女性教員への支援を実施した。
- 工学系研究者（男女問わず）を対象とした、育児と研究の両立支援のための『工学系ベビーシッター利用料等補助』SoCCER の支援を開始した。本年度は 2 名の女性研究者への補助を行った。



ポスター:STEP-ALICE プログラム(左)と工学系ベビーシッター利用料等補助(右)

II. 女性研究者の見える化・工学魅力の発信

- サイエンス・エンジェル、カタールサイエンスキャンパスと共同で、女子小中学生向け科学体験プログラム「サイエンス・デイ for ガールズ ちくちく縫って LED が光るかわいい小物作り」を開催した。女子小中学生や保護者を中心に、約 100 名が参加した。



科学体験プログラムの様子(左・中央)とイベント周知ポスター(右)

- 工学系における女子学生・女性研究者を紹介する「宮城の新聞」紙媒体を 70,000 部発行し、全仙台市立中学校の生徒と仙台市内の高校 16 校の生徒全員に配布した。また、オープンキャンパス時には来場者全員へ配布した。



『宮城の新聞』紙媒体 第 1 面及び第 4 面(広告)

- 工学系女性教員や女子学生を対象とした交流やスキルアップ・キャリア育成のためのセミナー・交流会を開催した。本年度開催(予定含む)のセミナー・交流会は下記の通りである。
 - ① 女子学生のためのミニフォーラム「工学にかける私の夢」(平成 26 年 7 月 30, 31 日)
 - ② 女子学生・女性研究者茶話会(平成 26 年 11 月 21 日)
 - ③ 女子学生向けキャリア継続セミナー(電気系と共催, 平成 27 年 3 月 7 日)



女子学生・女性研究者茶話会の様子(左・中央)及び周知ポスター(右)

- Web「宮城の新聞」とのコラボレーション連載として、本年度は下記 4 件の記事を掲載した(H27 年 1 月末現在)。本年度は女子学生・女性研究者のみならず、男女共同参画や男性の育児参加に関する活動を広報することで、工学系全体としての男女共同参画意識の醸成を図った。
 - ① 【東北大学 ALicE×宮城の新聞 #007】工学の魅力伝え、女子高校生の進路選択を後押し／東北大学工学部でフォーラム
 - ② 【東北大学 ALicE×宮城の新聞 #008】三浦英生さん(東北大学機械系長)に聞く 多様性と共存の社会に必要なこと
 - ③ 【東北大学 ALicE×宮城の新聞 #009】工学女子の現実と本音、ざっくばらんに語り合う／東北大で茶話会
 - ④ 【東北大学 ALicE×宮城の新聞 #010】東北大で工学系イクメン座談会、男性目線で育児を語り合う(前・後編)



東北大学 ALicE×宮城の新聞コラボレーション記事(#007-#010)トップ画像

III. 情報共有による問題解決

- 女性研究者・女子学生や育児期の研究者への情報提供・共有のため、ALicE Web (<http://alice.eng.tohoku.ac.jp/>) において全学やALicEによる各種支援制度の案内や、病後児保育室『星の子ルーム』の利用案内の掲載等を行っている。
- 女性研究者・女子学生 ML を運営し、各種支援制度の募集やセミナー等の案内、女性向け各種公募等の情報を提供している。また、女性同士の情報交換の場としても利用されている。
- 仙台市内のベビーシッターや一時預かり保育の情報一覧を調査作成し、希望者へ配布した。
- ALicE Web や病後児保育利用案内、各種支援プログラムの申請書類記入例の英語版を作成・公開し、国際化対応を行った。
- 女子学生・女性研究者に関する問題対応への助言を行う『おはなし窓口』を開設しており、工学研究科セーフティネットの一つとして、各種相談・問い合わせをメールや電話、対面にて受け付けている。
- 必要な支援についての調査及び検討を独自に行うことで工学系特有の問題を把握し、きめ細やかな対応をするとともに、工学系男女共同参画委員会や部局内各専攻及び全学へと施策提案等を行う。

※ STEP-ALICE プログラム、育児期の女性研究者への事務補佐員派遣及び工学系

ベビーシッター利用料等補助については全学による支援事業と連携して実施。

※ 病後児保育室利用案内(日・英)は、病後児保育室 Web において全学向けに公開。



ベビーシッター情報(左)、星の子ルーム利用案内日本語版(中央)及び英語版(右)

IV. ALicEの活動紹介

- ALicE の活動周知や次世代への工学の魅力発信のため、ALicE の Web において各種イベント報告や支援制度利用者の報告、女子学生・女性研究者の受賞等の活躍を紹介している。
- 工学部教授会(平成 26 年 4 月)において平成 25 年度の ALicE の活動報告を行い、工学系での男女共同参画への意識の醸成を図った。
- 工学部及び工学系大学院入学者ガイダンスにおいて新入生全員に ALicE の活動紹介リーフレット及び『宮城の新聞』紙媒体を配布した。
- 田中真美 ALicE 室長が、ALicE の活動及び工学系の男女共同参画について講演を行った。
 - ① 東北工学教育協会第62回年次大会(平成 26 年 10 月 22 日)
 - ② 日本工学アカデミー北海道・東北支部講演会(平成 26 年 12 月 12 日)



東北工学教育協会第62回年次大会(左)、日本工学アカデミー北海道・東北支部講演会(右)

農学研究科

農学研究科男女参画委員会は、平成 22 年度より委員を拡充し、男女共同参画委員会活動を行っている。会議は主にメールで行い、各委員を中心に幅広く意見を集約した。全学での取組に協力に加えて、部局として独自の取組を行いつつある。

開催状況

平成 26 年

- 4 月 23 日 平成 26 年度第 1 回会議 本年度の方針及び予算請求に関して
- 5 月 7 日 予算請求書提出
- 6 月 17 日 予算請求に対するヒアリング
- 6 月 19 日 第 1 回 FD (田中真美先生の講演)
- 7 月 11 日 平成 26 年度第 2 回会議 具体的な取組について I (本会議)
- 7 月 16 日 平成 26 年度第 3 回会議 具体的な取組について II (メール会議)
- 9 月 5 日 平成 26 年度 4 回会議 シンポジウムについて
- 10 月 22 日 平成 26 年度第 5 回会議 男女参画情報提供窓口及びポスター
- 11 月 14 日 農学研究科男女参画委員会主催シンポジウム「活躍する女性研究者たち」開催
間 先生、RIKEN (紹介と座長は磯貝)
三上先生、札幌医科大学 (紹介と座長は井上先生)
- 11 月 14 日 男女参画委員会主催お茶会

平成 27 年

- 1 月 7 日 平成 26 年度第 6 回会議
- 1 月 18 日 平成 26 年度第 7 回会議

1 行動指針について

全学のものを参考にして平成 25 年度に作成したものを行動指針とした。

1) 両立支援

研究科構成員が、年齢性別を問わず、仕事と生活の両立を図ることができるように、意識の醸成に努めるとともに、施設・制度面での整備を行う。青葉山キャンパスに建設が予定されている建物等の整備においても、男女共同参画に配慮する。

2) 女性リーダー育成

農学部・農学研究科の学生の男女構成をふまえ、女性研究者を積極的に採用・養成する。そのために構成員の意識改革及び制度の整備を進める。

3) 次世代育成

年齢性別等を問わず、農学部・農学研究科の学生を対象とした研究者使命の意識啓発とともに、男女共同参画意識の醸成のための施策を推進する。

4) 地域連携・社会貢献

本研究科の専門性を活かし、関わりのある行政、産業、地域社会などにおける男女共同参画に貢献する。

5) 支援推進体制

上記の男女共同参画活動を円滑に推進するため、現行の男女共同参画委員会の活動・体制を充実させるとともに、研究科全体で男女共同参画を推進するため、全構成委員を対象とした研修を定期的実施する。

2 本年度の取組

1) 行動指針の表明

全学の行動指針にそって、農学部としての姿勢や方向性(部局内指針)を表明した。東

北大学としての考え方や東北大学全体の試みなどの紹介し、組織としてのビジョンを共有するため、メール配信等を行った。それに基づいて現在の問題点や今後の課題を考える機会とし、学系等での話し合いが行われた。農学研究科の行動指針にそった、平成 25 年度に計画していた独自の取組を実行した。

2) 講演会の開催

男女共同参画に関するFDについて、FD委員会にて開催を要請していた田中真美先生の講演が行われた。また、本年度はじめて男女参画委員会での申請した予算が認められ、男女参画委員会主催のシンポジウム講演会を開催した。

3) 両立支援のための環境整備

農学部として必要な制度や施設について要望を調査した。青葉山保育所（仮称）の予定していた建物が白紙となったことを報告した。今後も継続して保育園設置にむけて要望を継続していくことを確認した。

4) 職員や学生への情報窓口の設置

全学のメンター制度を参考にした、情報窓口を事務部に設置した。男女参画取組に関する紹介ポスターを作成し、シンポジウム後の交流会で説明・配布した。

5) 女性職員ならびに女子学生交流会

シンポジウム後、交流会（紅茶とお菓子の会）を開催した。

3 その他特記事項

1) 平成 25 年度も女性教員の採用がなく、改善の必要がある。教員採用に際し積極的に女性を採用するよう、教授会の場で研究科長が繰り返し発言している。来年度はそうした意識啓発が実際に女性教員の採用に結びつくよう具体的な対策が必要である。東北大学では女性研究者の育成支援を積極的に推進していることを強調して公募要領に記載している。

2) 研究科独自の取組と意識改革が必要である。

3) 農学研究科では、日本学術振興会「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」による「持続可能な農林水産業構築のための海外派遣支援」事業に取組、若手研究者を積極的に海外に派遣しているが、このプログラムの実質的リーダーは女性教員が担っている。他にも、外部資金の獲得など、農学研究科では女性研究者が研究活動の中心になる事例が数多く現われている。

4) 夫婦がそろって研究者の場合、異なる分野へ同時配属などの方法も必要かもしれない。また、保育園の関係(女川、川渡では保育園の確保が難しい)ため転職せざるを得ないケースがあった。ある時期までは仙台という方式も選べるようにしていくことも考慮すべきことである。

国際文化研究科

国際文化研究科男女共同参画推進委員会は、委員長・副委員長を含めて4名（教授4名／女性2名・男性2名）で構成され、研究科の諸委員会・窓口と連携して男女共同参画に関連する教育・研究環境の整備に努めた。本委員会の開催状況ならびに本委員会の活動を含む国際文化研究科の活動内容は下記の通りである。

開催状況

平成26年

4月16日 平成25年度からの引き継ぎ事項について

平成26年度の活動計画について

以後は、随時メール会議を開催した。

活動内容

- 1 男女共同参画推進委員会専用のメールアドレスを研究科内に周知することで、より相談しやすい環境を整えている。メールアドレスの管理は委員長が行っている。
- 2 研究科主催のFD開催に協力した。
期日：平成27年2月4日
講師：池田忠義先生、長友周悟先生（本学、学生相談・特別支援センター）
演題：「大学におけるハラスメント問題の理解と対応」（池田先生）
「障害のある学生への合理的配慮の考え方と支援の実際について」（長友先生）
- 3 研究科主催の新入生オリエンテーションにおいて男女共同参画にかかわる大学内及び研究科内の状況を紹介し、男女共同参画に対する理解を呼びかけた。また、男女共同参画推進委員会が相談窓口の機能を併せ持っていることをも広報した。
- 4 平成23年度に設置した女性職員用休憩室（兼授乳室、必要な場合は学生の使用も可）に必要な備品等を購入し、ひきつづき整備に努めた。
- 5 国際交流・学生支援室にハラスメントならびに男女共同参画関係の書籍等を新たに追加購入し、従来備え付けられていたものと合わせて、学生に利用を呼びかけている。

今後の取組

- 1 国際文化研究科棟は、平成26年度中に耐震改修工事を終えたが、工事終了後も引き続き女性職員用休憩室の一層の整備を図り、女性職員や女子学生がより安心して研究科内での勤務や研究活動に従事できる環境の整備に取り組む。
- 2 引き続き関連するFDの開催を検討し、教職員・学生のさらなる意識向上を図る。
- 3 引き続き研究科の新入生オリエンテーション等において男女共同参画にかかわる研究科内の状況と活動を紹介し、男女共同参画に対する理解を呼びかける。
- 4 男女共同参画やハラスメントに関連する学生用書籍購入等の措置を続けるとともに、男

女共同参画に関する研究科内の環境改善や意識向上のためのさらなる施策を検討する。

- 5 男女共同参画シンポジウムを初めとする全学的な活動に積極的に参加する。

情報科学研究科

大学院情報科学研究科では、尾畑 伸明（情報科学研究科長補佐）を委員長とした研究科運営検討委員会において全学の中期目標である男女職員数の格差是正のための制度に対して検討を行っている。また、具体的な事案の検討のため、徳山豪研究科長の他に教員4名と事務長の計6名で構成されている男女共同参画ワーキンググループが設置されている。平成26年度はWGの会合の開催はせず、メール審議により意見交換を行い、協議及び立案を行った。

開催状況

平成26年度にはワーキンググループの開催は行わなかった（メール審議のみ）。運営検討委員会の開催は毎月1回行っている。

- 1 公募時の女性教員のサーベイの依頼の実施を行っており、公募時の女性応募者の有無やサーベイの実施について教員選考委員会での報告を義務付け、実施している。また、女性教員の比率向上に関する施策の検討を引き続き行っており、外部の識者を交えた運営協議会から意見を集め、対策を協議している。本年度は准教授1名・助教1名、合計2名の新規採用を行った。
- 2 運営検討委員会で男女共同参画に向けて研究科の環境整備の検討を行っている。
- 3 サイエンス・エンジェル、澤柳記念賞応募の呼びかけや男女共同参画関連の講演会やシンポジウムへの出席など、学生や教員への男女共同参画意識の啓蒙に努めている。
- 4 女子休憩室の見直しを行い、場所移動、設備整備、セキュリティ強化を行い、女子学生・教員がより快適に利用できるように改善を行った。

生命科学研究科

生命科学研究科男女共同参画委員会は、教員3名（うち1名は女性教員）で構成されている。常時メールで必要事項の連絡を行っている。今年度は以下の活動を行った。

活動内容

- 1 平成26年4月4日（金）：生命科学研究科新入生オリエンテーションにおいて、研究科の男女共同参画への取組などについて説明するとともに、男女共同参画ネットワーク構築メーリングリストへの参加、サイエンス・エンジェルへの参加を呼びかけた。
- 2 平成26年5月31日（土）：仙台市において開催された生命科学研究科の入試説明会・

オープンラボにおいて、研究科の男女共同参画への取組などについて説明を行った。

- 3 ベビーシッター利用料等補助制度及びサイエンス・エンジェル制度への積極的な応募を呼びかけた。

環境科学研究科

環境科学研究科では、4つの教育コース及び事務部から選出された委員で男女共同参画 WG を構成し、研究科内の男女共同参画意識の向上に取り組んでいる。

本年度は前年度に加入した工学研究科等男女共同参画委員会を通した活動を行った。

開催状況

工学研究科記載の通り。

医工学研究科

- 1 医工学研究科単独でなく、平成 25 年度より設立された工学研究科、情報科学研究科、環境科学研究科、災害科学国際研究所、環境保全センター、NICHe 等と共同で「東北大学 工学系研究科 女性研究者 育成支援推進室 ALicE」にて活動を行っている。今年度は女子学生の第 3 回仙台 I ゾンタクラブ東北大学大学院 女子学生海外渡航支援事業採用、Falling Walls Lab Sendai での受賞、及び MIT 学生派遣レポートが工学研究科 Web に掲載されたことが紹介された。また、女性教員についても、日経産業新聞『医・工学結ぶ人材育成/東北大大学院 革新的製品担う』にて担当の細胞遺伝子工学実習の様子とコメントが掲載されたことの紹介、本研究科所属の ALicE 室長の工学アカデミーでの本学の男女共同参画や ALicE に関する講演、研究に関する『市民のためのサイエンス講座 2015』、及び第 11 回日本学術振興会受賞について Web にて紹介された。その他詳細は工学研究科の欄を参照されたい。
- 2 ALicE に所属の部局と共同での工学系男女共同参画員会を開催し種々の問題について検討対応等をしている。こちらも詳細は工学研究科の欄を参照されたい。
- 3 高校教員を対象としたサイエンスリーダーズキャンプ (SLC) 「革新的な未来を拓く医工連携人材育成の現場」で、本学の全学男女共同参画委員会や ALicE の活動についての講演を行った。また女性教員の研究室見学会や「学習指導と人材育成」に関するグループディスカッションにも女性教員が参加し、高校教員に対して男女共同参画に関する意識啓発を行った。SLC ニュースレターへ受講した高校教諭から女子学生への進路指導への一助となったと報告が数件寄せられている。

教育情報学研究部・教育部

教育情報学研究部では、男女共同参画委員会は教授会構成員の内 1 名から構成されている。本研究部は平成 14 年 4 月創立の現在(平成 26 年)教授、准教授、講師、助教、助手合わせて 9 名の小規模な独立大学院であり、女性教員は創立当時から採用されていない。平成 25 年に准教授の新採用のための公募を行った。公募には女性教員の採用については積極的に考慮することを明記したが、女性教員の新規採用は残念ながら実現しなかった。次年度以降の教員の採用の機会があれば、女性教員の採用を念頭に人選に取り組んでいきたい。

研究部教授会において男女共同参画委員は以下のような活動を行った。

- 1 男女共同参画委員会の活動を報告した。
- 2 男女共同参画に関連するシンポジウムなどの活動への参加を促した。
- 3 女性教員の不在の事実を再認識させた。

教育情報学教育部は現在(平成 26 年)修士課程 24 名、博士課程 23 名が在籍しており、そのうち各々 63%、35%が女子学生である。情報科学と教育が融合した教育情報という新しい研究分野における女性研究者、女性専門家の育成にこれからも努めていく。

金属材料研究所

金属材料研究所男女共同参画ワーキンググループは、委員として教員が淡路智(委員長)、梅津理恵、佐藤豊人、稗田純子(6 月 30 日まで)、出浦桃子(7 月 1 日より)、技術職員が板垣俊子、伊藤俊、事務職員が百束広道、小谷美智、米永一郎(オブザーバー)の男性 5 名、女性 4 名の計 9 名(累計 10 名)で構成されている。本年度はメールを使用した相談とセミナー活動を行った。

- ① 前年度 3 月 8 日、今年度の金研男女共同参画 WG 委員会の活動計画を相談。特に、女性休憩室の清掃と管理について審議。
- ② 5 月 20 日、委員交代に関する審議。
- ③ 女性休憩室について、所の予算措置に基づく定期清掃と男女共同参画 WG の女性委員が中心となった利用と整頓状況の毎月の確認。
- ④ 男女共同参画シンポジウムへの参加等について、メールやチラシによる案内に努めた。
- ⑤ 3 月 8 日(月)、名古屋工業大学川島慶子教授をお迎えして、金研男女共同参画セミナー「ジェンダーと科学イメージの問題 - マリー・キュリーの 1911 年」を開催。所長をはじめとする本所首脳が参加し、従来の男女共同参画の枠を越えた議論が展開。
- ⑥ 同日、川島先生を囲み、本所女性教職員を中心としたランチミーティング交流会を実施。本所の男女共同参画の推進について、忌憚のない意見交換。
- ⑦ 分野の女子学生・研究者の増加に向けて、金属学会等を通じ、夏の学校、ランチョンセミナー等での積極的な活動を参画。
- ⑧ 本所の女性教職員・学生・研究者の増加に対応すべく、これまで女性用トイレのなかった階に新設された。

金属材料研究所における現状

金属材料研究所では1名の助教が転出し、その結果、女性教員比率は昨年度の4.5%から3.7%へと低下した。その比率は2年連続の低下であり、女性教員比率を見る限り停滞さらに後退の現状は否めない。とりわけ、転出が多く、現在の分野内での限られた人材からの採用は困難な状況になりつつある。本所の教員にかかる任期制も含め、新規教員、及び優れた教員の上級職への応募に関する勧誘のための抜本的な制度改革、環境整備が必要と思われる。

次年度計画

次年度に向けて、外部有識者による講演会・セミナー・所内交流会を継続的に実施する。さらに、学会等を通じてより効果的な女子学生増加活動を継続する。

加齢医学研究所

現状では、加齢医学研究所に男女共同参画のWGや委員会などはないが、総務・人事委員会が男女共同参画について所掌しており、男女共同参画委員会の委員が1名いる。また、この委員は星陵地区男女共同参画ネットワーク会議の委員もかねている。全体として、以下のような活動を行った。

- 1 男女共同参画委員会の活動の報告を主にメールで行った。
- 2 女子学生入学100周年記念シンポジウムへの参加を促す呼びかけを行った。
- 3 星陵地区男女共同参画ネットワーク会議に参加し、立場、境遇等に類似点の多い部局の取組を参考に改善を図った。

今後の取組

平成26年度の新規採用者の女性比率は0%と大幅に低下したが、昨年4月に加齢医学研究所始まって以来初めて誕生した女性教授に引続きさらに一人女性教授が誕生した。また、加齢医学研究所で受け入れている、平成25年度の博士後期課程の大学院生の女子大学院生の比率は24%、博士前期課程の大学院生の女性大学院生の比率は40%となっており、多くの女子大学院生に対して研究指導が行われている。星陵地区男女共同参画ネットワーク会議に出席することによって、各部局における現状と課題に対する対応策、すなわち最も身近な事例を参考にして、改善を図っていく。次年度以降の教員の採用の際に、男女比率の改善を目指して努力する。教職員及び学生の意識改革を進め、長期的な視野に立ち、現在受け入れている女子大学院生、女性研究者を育成していく。

流体科学研究所

流体科学研究所男女共同参画ワーキンググループは、3名の教授会構成員（男性2名、女性1名）で構成されている。流体科学研究所は構成分野が主として工学研究科機械系の協力講座となっており、女子学生、女性研究者の少ない研究分野ながらも、男女共同参画意識向上に向けて、以下の取組を行ってきた。

開催状況

平成 26 年度はワーキンググループの開催は行わなかった。情報等の展開・伝達は主としてメールで行ってきた。

活動内容

1 育児両立支援に関する活動

育児等の理由がある女性教員の研究活動をサポートするため、技術補佐員支援制度を設けている。本年度は 1 名の技術補佐員を採用し、育児中の女性教員の支援を行った。また、女性教職員の職場復帰を支援するため、女子休憩室内に搾乳スペースを完備した。

2 男女共同参画に関する活動

流体科学研究所の新規教員公募時には、「なお、東北大学は、男女共同参画を積極的に推進している。子育て支援の詳細等、男女共同参画の取組については下記 URL を参照のこと。」の文言を公募要領入れ、男女共同参画を強く推進していることを広く案内してきた。また、流体科学研究所は任期制を取り入れているが、男女を問わず、育児休業等を取得した場合はそれを考慮して任期を通常より延長できるようにしている。合わせて、研究所のホームページ内に「女子学生の方へ 女性科学者として生きる」というページを設け、実際に研究者として活動している教職員の声を掲載し、当該分野における女子学生の育成活動を行ってきた。

電気通信研究所

電気通信研究所 男女共同参画検討 WG は、総務担当副所長、総務委員会幹事（准教授）、事務長、総務係員で構成され、男女共同参画にかかる諸活動を所内の関係する委員会と連携して行っている。

開催状況

平成 26 年

- | | |
|------|--|
| 4 月 | 東北大男女共同参画・女性研究者支援事業研究スキルアップ経費の応募の呼びかけを対象となる研究者に行った。最終的には 1 件の申請が行われて採択され、8/4～8 にオーストリアで行われた 16th International Conference on Geometry and Graphics への渡航旅費の補助が行われた。 |
| 11 月 | 第 11 回東北大学男女共同参画シンポジウムへの参加呼びかけを行った。最終的に所内から 1 名が参加した。 |

平成 27 年

- | | |
|-----|---|
| 2 月 | 平成 26 年度男女共同参画委員会報告書の報告のために、今年度の活動内容について総括した。 |
|-----|---|

電気通信研究所における現状

平成 22 年度から教授、助教と 1 名ずつ転出していき、電気通信研究所における女性教員は依然として低い状況である。このような状況を鑑み、平成 25 年度に策定した部局ビジョンに従い、自主財源による女性教員特別枠を新設し、平成 25 年度には助教 1 名が任用され、平成 26 年度も継続して任用された。また、女性研究者に向けた研究環境支援も行い、実際

に研究スキルアップ経費への申請が行われて採択されるなど、成果をあげつつある状況である。

とはいえ、現在女性教員はこの1名のみであり、女性構成員比率は1.52%（1月1日現在）と依然として低い状態にある。生体情報や医工学に関連した研究分野など、研究分野によっては、今後女性が活躍できる分野があり、女性教員特別枠を有効に活用すると共に、女子学生が研究者の道に積極的に進めるような働きかけを強めていく等、男女共同参画への取組を継続していく。

多元物質科学研究所

平成26年度の多元物質科学研究所男女共同参画委員会は、永次史教授（委員長）、柳原美廣教授、佐上博准教授、宇井美穂子助教、相馬出技術職員、南裕子研究協力係主任を構成員とし、下記のように活動した。全学の男女共同参画委員会の審議事項、シンポジウムなどについては、教授会において報告し、必要に応じメールなどで周知した。

本年度の取組

- 1 一昨年度開設した研究所の男女共同参画のWebサイト（URL：<http://www.tagen.tohoku.ac.jp/danjyo/>）を随時更新した。
- 2 2014年11月29日（土）に行われた第11回東北大学男女共同参画シンポジウム 未来の男女今日参画社会への新たなる発信～女子学生入学101年目を迎えた東北大学から～女子学生入学百周年記念シンポジウム～の企画を担当した。シンポジウムは学内外から約140名の参加者があり、大変盛会であった。
- 3 5月1日に女性教員5名、女子学生5名に集まっていただき、多元研図書館にてクローバーの会を開催した。多元研では建物が散らばっていることからそれぞれの建物の責任者をまず決定し、今後の連絡に生かすこととした。この責任者の方にお願ひし、女性研究者の連絡網の作成及び多元研における女子学生及女性研究者の人数調査を行った。
- 4 科研棟N棟の改修工事に伴う、科研棟の女性休憩室の使用について議論した。科研棟N棟の改修工事が終わる3月まで、科研棟S棟女性休憩室を更衣室として提供することとなった。反応研棟の女性休憩室は引き続き使用できる。

災害科学国際研究所

災害科学国際研究所では、以前より、工学研究科、医工学研究科、情報科学研究科、環境科学研究科、災害科学国際研究所、環境保全センター、NICH e と共同で設立した「東北大学 工学系研究科 女性研究者 育成支援推進室 ALicE」の枠組みで男女共同参画に関する活動を行ってきたが、より一層の男女共同参画推進のため、平成27年2月に男性教員1名、女性教員1名の計2名で構成された男女共同参画WGを設置した。

災害科学国際研究所において人事採用を行うのは今年度が 3 年目であるが、昨年度に引き続き積極的に女性教員の拡充を目指した採用方針をとっている。その結果、本年度は新規採用 4 名教員中 2 名、50%の比率で女性教員が採用されている。全体での比率も、准教授・助教・助手においては 14.5%と、昨年度の 13.9%を上回る女性比率となっている。

今後も引き続き教員の採用においては、男女比率のより一層の向上を目指して努力する。任期制に基づく人事公募においては、男女共同参画の趣旨に副う選考を行うことを引き続き明示する予定である。また、全学や ALicE における男女共同参画への取組を所員に一層浸透させ、男女ともに働きやすい職場環境を目指して、男女共同参画を推進していく。

東北アジア研究センター

東北アジア研究センターでは、センター長(岡洋樹教授)、副センター長 2 名、事務長(佐藤吉和)及び全学男女共同参画委員会委員(平成 25 年度からは寺山恭輔教授)によりセンター長直属の専門委員会として「男女共同参画ワーキンググループ」を設置し、全学男女共同参画委員会委員を座長として活動を行っている。

開催状況

今年度、会議は開催しておらず、男女共同参画ワーキンググループの間でメールを交換する形で行った。比較的少人数の部局であるため、当該委員がセンター専任教員のほか研究支援者等まで含めた研究者全員で構成するセンター全体会議で活動報告等を行い、質問・意見等を受け付けることによって問題意識の共有を図っている。

平成 26 年

5 月 26 日 センター全体会議で、東北大学大学院女子院生の海外シンポ、セミナー等における発表を支援する仙台 I ゾンタクラブ助成への応募を、女子大学院生を指導する教員に呼びかけた。

7 月 28 日 センター全体会議で、11 月 29 日開催の第 11 回男女共同参画シンポジウムへの参加を呼びかけた。

10 月 27 日 センター全体会議で、第 11 回男女共同参画シンポジウムへの参加を呼びかけるとともに、2015 年 1 月のセンター試験に従事する男性を含む教職員には、けやき保育園を活用するように呼びかけた。

11 月 29 日 第 11 回男女共同参画シンポジウムに男女共同参画委員が参加した。

1 月 東北大学女子学生入学百周年記念事業報告書をセンター内での閲覧に供した。

その他特記事項

人事政策として、女性教員の比率向上に関する施策の検討を引き続き行っており、教員公募書類には、男女共同参画を推進していることを明記している。本年度は残念ながら女性教員の新規採用はなかったが、研究支援部門の企画運営室に、研究管理担当の特任助教として、公募で女性 1 名を採用した。このほか、平成 26 年度はフルブライト米国招聘講師・研究員として女性 1 名、日本学術振興会外国人特別研究員として女性 1 名を招聘した。また、平成 26 年度受け入れ中の専門研究員 4 名のうち 2 名の女性研究員が従事している。また、平成 26 年度は 3 名の女性の外国人研究員(客員教授)を受け入れた。さらに、人文社会系所部局の連携促進のため当センターに設置されているコラボレーション・オフィスにおいて、平成 26 年度に女性事務補佐員 1 名が退職したのに伴い、新たに 1 名の増員を行った。震災後の耐震改修工事が終了して、移転完了後、平成 25 年度にセンター内のレイ

アウトを変更し、女性教職員用休憩室を確保したが、女性の教職員がより安心してセンター内での勤務や、研究活動に従事できるよう、今後ともその一層の充実につとめたい。

病院

病院における男女共同参画を推進するための取組

活動記録

1 星陵地区男女共同参画ネットワーク会議

星陵キャンパスの部局（医学系研究科、歯学系研究科、加齢医学研究所、病院、メディカル・メガバンク）からの東北大学男女共同参画委員会委員が各部局での現状と課題に関して情報交換を行なった。

平成 26 年

8 月 7 日 第一回会議 10:00~11:30

10 月 28 日 第二回会議 10:00~11:30

平成 27 年

2 月 6 日 第三回会議 13:00~14:00

2 開催記録：星陵地区男女共同参画ネットワークの一員として下記を共催した。

平成 27 年 1 月 13 日

女子大学院生ネットワーク形成と次世代支援 ～東北大学サイエンス・エンジェル活動の紹介～

3 女性医師支援推進室の活動

平成 26 年の 7 月、10 月と 2 回会合を開き、出産や育児からの復帰及び大学院復学の妨げになっている点を当事者視点で下記①から④にとりまとめ、改善をはかる要望書を病院長宛に提出した。その結果、4 に示す改善が得られた。

① 医学部、歯学部学生のとくにワークライフバランスについて考える機会がない。

② 保育園の定員に比して入所希望者が多い(特に 0 歳児)ため定員を増やす必要がある。

③ 学童期に養育環境への支援が大きく減る「小 1 の壁」がキャリア継続に支障となる。学童保育の設置を検討していただきたい。

④ 介護や持病などを抱えながらのキャリア継続を支援するための時短医員の対象を拡大していただきたい。

4 今年度の成果

短時間勤務医員の雇用の実績

平成 26 年 4 月 1 日現在 13 名

平成 27 年 1 月 19 日現在 15 名（平成 26 年度までは育児中の医師が対象）。

平成 27 年度から短時間勤務医員制度を見直し、取扱要項内規を改正し施行予定となる。

改正後は下記も短時間勤務医員の対象に加えられる。

小学校三年までの子を養育する者（未就学児までから拡大）

親の介護、自身の健康状態の理由により短時間勤務を希望する者

- 5 病院内の病後児保育室「星の子ルーム」への小児科のバックアップを継続した。

本部事務機構

研修の受講

1 参加状況

本学の求める人材像は、「高い倫理観に立脚し、国際水準の大学を支える職員の自覚と問題意識を持ち、変化に適応し、チャレンジブルに行動し、自ら成長しつつ本学の発展に寄与できる自立的な人材」である。事務職員等の研修については、求める人材像に基づき、各職員の組織における職務と責任の遂行に必要な知識・技術及び将来に向かって必要となる知識等の付与並びに自己啓発の機会を与えることによって、業務の遂行能力の向上を図ることを目的に実施している。

研修の実施にあたっては、性別に関係なく、各研修の目的や内容に応じ研修参加者を選考している他、幅広く研修への参加を周知し、公募を行っている。

2 平成26年度における主な研修の実施状況（東北大学主催）

項目	研修名	参加者数	女性参加者 (内数)	女性参加 比率 (%)
階層別研修	初任者研修（4月）	63名	28名	44.4
	初任者フォロー研修（9月）	62名	27名	43.5
	若手職員研修（10月）	11名	3名	27.3
	中堅職員研修（11月）	25名	12名	48.0
	係長研修（11月・12月）	25名	3名	12.0
	新任管理者等研修（8月）	34名	10名	29.4
その他の研修	自己啓発研修（放送大学（通年））	58名	21名	36.2
	自己啓発研修（通信教育（通年））	196名	111名	56.6
	女性職員のキャリア形成支援研修（10月）	19名	19名	100.0
	ハラスメント防止対策講習会（11月）	33名	18名	54.5
	再雇用準備セミナー（12月）	18名	9名	50.0

4. 中期目標・中期計画達成のための各部署の取組

文学研究科

1. 女性構成員比率の推移（過去3年間）

職 名 等	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
教 授	3 名／40 名中（8%）	4 名／43 名中（9%）	4 名／45 名中（9%）
准 教 授	5 名／37 名中（14%）	6 名／35 名中（17%）	6 名／33 名中（19%）
講 師	0 名／0 名中（0%）	0 名／0 名中（0%）	0 名／0 名中（0%）
助教・助手	7 名／19 名中（37%）	5 名／18 名中（28%）	5 名／18 名中（28%）
計（助手・助教含む。）	15 名／96 名中（16%）	15 名／96 名中（16%）	15 名／96 名中（15%）
計（助手・助教除く。）	8 名／77 名中（10%）	10 名／78 名中（13%）	10 名／78 名中（13%）
大学院学生（博士後期課程）	73 名／182 名中（40%）	74 名／169 名中（44%）	72 名／169 名中（43%）
大学院学生（博士前期課程）	84 名／177 名中（47%）	78 名／169 名中（46%）	77 名／173 名中（45%）

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の数、平成 26 年度は 1 月 1 日の数

2. 新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去3年間）

平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
4 名／14 名中（29%）	3 名／12 名中（25%）	1 名／4 名中（25%）

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の比率、平成 26 年度は 1 月 1 日の比率

文学研究科では、新規採用者の公募に際し、男女共同参画を推進していることを明記している。

3. 前年度より改善された点

文学研究科では、平成 16 年度策定の基本方針に基づいて、女性教員の採用を行っており、毎年必ず 1 名以上は女性が採用されている。平成 26 年度は、新規採用が少なかったため、構成に大きな変化はないが、新規採用者 4 名の内 1 名が女性であった。

4. 改善の上で、障害となっていると思われる点

文学研究科では、特段の障害は存在しないが、募集分野によっては女性の応募が得られない場合もある。今後一層積極的採用に努める必要がある。

5. 次年度の具体的対応策

引き続き、公募書類に男女共同参画の推進をうたい、この方針を学内外に周知することで女性研究者の応募の増加を図る。

1. 女性構成員比率の推移（過去3年間）

職名等	平成24年度	平成25年度	平成26年度
教授	2名／18名中（11％）	2名／18名中（11％）	1名／18名中（6％）
准教授	2名／17名中（17％）	2名／13名中（15％）	2名／13名中（15％）
講師	0名／0名中（0％）	0名／0名中（0％）	0名／0名中（0％）
助教・助手	1名／4名中（25％）	2名／5名中（40％）	1名／6名中（17％）
計（助手・助教含む。）	5名／34名中（15％）	6名／36名中（17％）	4名／37名中（11％）
計（助手・助教除く。）	4名／30名中（13％）	4名／31名中（13％）	3名／31名中（10％）
大学院学生（博士後期課程）	42名／87名中（48％）	41名／81名中（51％）	41名／78名中（53％）
大学院学生（博士前期課程）	41名／69名中（59％）	45名／72名中（63％）	50名／75名中（67％）

※平成24年度、平成25年度は3月末の数、平成26年度は1月1日の数

2. 新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去3年間）

平成24年度	平成25年度	平成26年度
0名／2名中（0％）	1名／3名中（33％）	0名／2名中（0％）

※平成24年度、平成25年度は3月末の比率、平成26年度は1月1日の比率

教育学研究科では、女性構成員比率の推移（過去3年間）は、上記のとおりである。

3. 前年度より改善された点

教育学研究科では、前々年度女性1名の助教が加わったものの、前年度女性教授1名、助教1名が転出となった点がある。

4. 改善の上で、障害となっていると思われる点

教育学研究科では、全国的に公募を出す段階でも女性教員を採用する努力を行っているところである。育児と仕事の両立支援策も大きいと思われる。

5. 次年度の具体的対応策

平成27年度からも引き続き専門を身につけた女性教員を積極的に探していく方向で検討中である。

1. 女性構成員比率の推移（過去3年間）

職 名 等	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
教 授	5 名／31 名中（16%）	6 名／32 名中（19%）	5 名／33 名中（15%）
准 教 授	7 名／22 名中（32%）	7 名／20 名中（35%）	6 名／19 名中（32%）
講 師	0 名／0 名中（0%）	1 名／1 名中（100%）	1 名／1 名中（100%）
助教・助手	4 名／13 名中（31%）	4 名／11 名中（36%）	4 名／10 名中（40%）
計（助手・助教含む。）	16 名／66 名中（24%）	18 名／64 名中（28%）	16 名／63 名中（25%）
計（助手・助教除く。）	12 名／53 名中（23%）	14 名／53 名中（26%）	12 名／53 名中（23%）
大学院学生（博士後期課程）	21 名／58 名中（36%）	17 名／49 名中（35%）	12 名／40 名中（30%）
大学院学生（博士前期課程）	7 名／15 名中（47%）	6 名／15 名中（40%）	3 名／15 名中（20%）

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の数、平成 26 年度は 1 月 1 日の数

2. 新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去3年間）

平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
2 名／10 名中（20%）	3 名／10 名中（30%）	1 名／6 名中（17%）

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の比率、平成 26 年度は 1 月 1 日の比率

3. 前年度より改善された点

数値としての改善点は少ないが、全体として高い女性比率を維持しており、また、各教員区分において 1 名以上の女性が在籍している状況は、平成 25 年度から継続している。

4. 改善の上で、障害となっていると思われる点

法学研究科では、女性構成員の比率が高い状態が続いており、大きな障害はないと考える。ただし、単身赴任者や家族との別居者も多いことから、今後も高い女性比率を維持・より改善するためには、育児・介護環境等の改善にも留意が必要である。

5. 次年度の具体的対応策

平成 27 年度以降も、高い女性構成員比率を維持することができるよう努力をする。特に、新規採用者における女性比率の向上や大学院学生の女性比率の向上に、引き続き務める予定である。

1. 女性構成員比率の推移（過去3年間）

職 名 等	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
教 授	2 名／40 名中（5%）	2 名／35 名中（6%）	2 名／33 名中（6%）
准 教 授	2 名／17 名中（12%）	5 名／21 名中（24%）	6 名／25 名中（24%）
講 師	0 名／4 名中（0%）	0 名／4 名中（0%）	0 名／2 名中（0%）
助教・助手	4 名／4 名中（100%）	5 名／5 名中（100%）	5 名／5 名中（100%）
計（助手・助教含む。）	8 名／65 名中（12%）	12 名／65 名中（18%）	13 名／65 名中（20%）
計（助手・助教除く。）	4 名／61 名中（7%）	7 名／60 名中（12%）	8 名／60 名中（13%）
大学院学生（博士後期課程）	36 名／89 名中（40%）	41 名／101 名中（41%）	47 名／111 名中（42%）
大学院学生（博士前期課程）	22 名／65 名中（34%）	22 名／63 名中（35%）	21 名／64 名中（33%）

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の数、平成 26 年度は 1 月 1 日の数

2. 新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去3年間）

平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
0 名／2 名中（0%）	4 名／9 名中（44%）	1 名／3 名中（33%）

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の比率、平成 26 年度は 1 月 1 日の比率

3. 前年度より改善された点

経済学研究科では、女性教員数及び女子大学院生数ともに、前年度の水準を若干上回っている。また公募要領には、「本研究科では、男女共同参画を積極的に推進している」旨を明記している。

4. 改善の上で、障害となっていると思われる点

経済学研究科の取組は年を追うごとに着実に成果を上げており、現在のところ大きな障害はないと思われる。

5. 次年度の具体的対応策

次年度も引き続き、具体的な推進策を講じる。人事については、上記 3. に記した方策を継続する。また、女子学生比率の高さ及び女性職員が多いという本研究科の現状を鑑みて、安全で安心できるキャンパスづくりのための方策を検討する。さらに、女性研究者比率の向上を目指し、女子大学院生に対する支援策を引き続き開催し、男女共同参画の普及啓発に努める。澤柳記念賞や女子学生海外渡航支援事業、保育園事業、育児休業制度等、男女共同参画に関する本大学の施策や支援事業についての理解や利用も広げていく。

1. 女性構成員比率の推移（過去3年間）

職 名 等	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
教 授	1 名／ 76 名中（ 1%）	1 名／ 74 名中（ 1%）	1 名／ 77 名中（ 1%）
准 教 授	3 名／ 80 名中（ 4%）	2 名／ 80 名中（ 3%）	2 名／ 77 名中（ 3%）
講 師	1 名／ 9 名中（ 11%）	0 名／ 5 名中（ 0%）	0 名／ 5 名中（ 0%）
助教・助手	11 名／ 113 名中（ 10%）	9 名／ 103 名中（ 9%）	7 名／ 99 名中（ 7%）
計（助手・助教含む。）	16 名／ 278 名中（ 6%）	12 名／ 262 名中（ 5%）	10 名／ 258 名中（ 4%）
計（助手・助教除く。）	5 名／ 165 名中（ 3%）	3 名／ 159 名中（ 2%）	3 名／ 159 名中（ 2%）
大学院学生（博士後期課程）	34 名／ 284 名中（ 12%）	34 名／ 279 名中（ 12%）	46 名／ 291 名中（ 16%）
大学院学生（博士前期課程）	81 名／ 578 名中（ 14%）	86 名／ 580 名中（ 15%）	86 名／ 583 名中（ 15%）

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の数、平成 26 年度は 1 月 1 日の数

2. 新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去3年間）

平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
4 名／ 35 名中（ 11%）	1 名／ 38 名中（ 3%）	0 名／ 17 名中（ 0%）

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の比率、平成 26 年度は 1 月 1 日の比率

理学研究科では、平成 27 年 1 月 1 日での女性教員の採用者数は 0 名と、採択が無く、伸び悩みの状況が続いている。女性教員の総数は平成 24 年度の 16 名と比較し、10 名と大きく減少し、これは GCOE などでは採用されていた配置定員枠外の女性教員がプロジェクトの終了とともに転出または退職したためと考えられ、このことは助手・助教が特異的に減少していることから明らかである。人事異動による女性教員の転出は依然として大きな問題となっており、配置定員枠外の女性教員を如何に枠内に定着させるかが今後の課題である。

3. 前年度より改善された点

理学研究科では、平成 26 年度に博士後期課程の女子大学院生が 16% となり、これまでの 12% から大幅に増えた。在籍している女子大学院生が、今後、女性教員として職を得ることを期待したい。

4. 改善の上で、障害となっていると思われる点

理学研究科では、平成 24 年度に採用された女性教員が 4 名となっているが、全て配置定員枠外であり、平成 26 年度に 2 名の助手・助教が減った理由として、この配置定員枠外での採用の問題が挙げられる。また、大学院における女子学生の割合（12－16%）と比較して、女性教員の比率と依然として大きな開きがあり、大学でのキャリアを考える女子学生がそもそも少ないことに問題がある。

5. 次年度の具体的対応策

引き続き、男女共同参画の精神のもとで人事選考を行うよう努める。大学院進学者を増すために、女子学生に対する進路指導を行う。また、女性教員の配置定員枠内への定着に向けた方

策を見出していく必要がある。

医学系研究科

1. 女性構成員比率の推移（過去3年間）

職 名 等	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
教 授	13 名／ 93 名中（14%）	12 名／92 名中（13%）	13 名／90 名中（14%）
准 教 授	7 名／ 71 名中（10%）	7 名／68 名中（10%）	9 名／71 名中（13%）
講 師	7 名／ 28 名中（25%）	9 名／36 名中（25%）	6 名／33 名中（18%）
助教・助手	47 名／152 名中（31%）	47 名／147 名中（32%）	40 名／138 名中（29%）
計（助手・助教含む。）	74 名／344 名中（22%）	75 名／343 名中（22%）	68 名／332 名中（20%）
計（助手・助教除く。）	27 名／192 名中（14%）	28 名／196 名中（14%）	28 名／194 名中（14%）
大学院学生（博士後期課程）	186 名／658 名中（28%）	193 名／678 名中（28%）	195 名／676 名中（29%）
大学院学生（博士前期課程）	92 名／176 名中（52%）	85 名／172 名中（49%）	88 名／168 名中（52%）

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の数、平成 26 年度は 1 月 1 日の数

2. 新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去3年間）

平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
14 名／47 名中（30%）	14 名／60 名中（23%）	8 名／52 名中（15%）

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の比率、平成 26 年度は 1 月 1 日の比率

医学系研究科では、女性研究者の比率が高い保健学専攻看護学コースを含むため、教員の女性比率は比較的高めである。しかし、この 3 年間で女性比率が高まることはなく、伸び悩みの状況が続いている。特に、平成 26 年度は新規採用者数における女性比率が下がっていることが懸念材料である。一方で、平成 26 年度は准教授ポストにおける女性比率が高まるなど、女性教員の活躍が垣間見られるデータもある。加えて、この数年の間には、医学系研究科から加齢医学研究所などに昇格を伴って異動する女性教員がいたことから、数量的データからは見えにくい質的な側面を注視する必要がある。

3. 前年度より改善された点

データ上、顕著な改善はない。ただし、研究科内での女性教員の昇格人事、及び昇格を伴う他部局への異動により、部分的には女性教員の活躍の場は広がったといえる。

4. 改善の上で、障害となっていると思われる点

大学院生に占める女子学生比率が高めであるのに対し、上位職に占める女性教員の割合が低い。この背景には、医学・医療分野に根強く存在する家父長制的な組織風土の影響があると推測される。大学院を修了した女性研究者/医療者がその力を存分に発揮できるような職場風土の構築と教職員個々の意識改革が必要である。

5. 次年度の具体的対応策

引き続き、男女共同参画の理念に基づいた人事選考に取り組むことについて、教授会等で継続的に働きかける。さらに、男女双方の教職員・大学院生の意識改革を促すことを目的としたセミナーやワークショップを企画する。

歯学研究科

1. 女性構成員比率の推移（過去3年間）

職 名 等	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
教 授	1 名／ 19 名中（ 5%）	1 名／ 20 名中（ 5%）	1 名／ 22 名中（ 5%）
准 教 授	1 名／ 12 名中（ 8%）	1 名／ 11 名中（ 9%）	1 名／ 14 名中（ 7%）
講 師	1 名／ 6 名中（16%）	1 名／ 10 名中（10%）	1 名／ 7 名中（14%）
助教・助手	15 名／ 62 名中（24%）	16 名／ 56 名中（29%）	16 名／ 55 名中（29%）
計（助手・助教含む。）	18 名／ 99 名中（18%）	19 名／ 97 名中（20%）	19 名／ 98 名中（19%）
計（助手・助教除く。）	3 名／ 37 名中（ 8%）	3 名／ 41 名中（ 7%）	3 名／ 43 名中（ 7%）
大学院学生（博士後期課程）	53 名／162 名中（32%）	59 名／170 名中（35%）	50 名／167 名中（30%）
大学院学生（博士前期課程）	6 名／ 13 名中（46%）	6 名／ 12 名中（50%）	11 名／ 16 名中（69%）

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の数、平成 26 年度は 1 月 1 日の数

2. 新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去3年間）

平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
4 名／19 名中（21%）	3 名／14 名中（21%）	4 名／9 名中（44%）

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の比率、平成 26 年度は 1 月 1 日の比率

歯学研究科における女性比率は、大学院学生（博士後期課程）は約 30%、大学院学生（博士前期課程）は約 69%、助教は約 29%、講師は約 14%、准教授は約 7%、教授は約 5%となっている。

3. 前年度より改善された点

歯学研究科では、女性教員の増員に向け、人事委員会にて女性教員の任用、昇任について検討を行っている。

平成 26 年度は、助教、講師、新規採用者 及び 大学院学生（博士前期課程）における女性比率が向上した。

4. 改善の上で、障害となっていると思われる点

歯学研究科では、特別に障害となっている点はないと思われるが、研究分野によっては教員選考における女性の応募者が少ない場合があり、そのことが、教授、准教授における女性教員比率に影響しているかもしれない。

5. 次年度の具体的対応策

引き続き、女性教員の採用をシステマティックに図ることを考える。

薬学研究科

1. 女性構成員比率の推移（過去3年間）

職 名 等	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
教 授	0 名／19 名中 (0%)	0 名／18 名中 (0%)	0 名／20 名中 (0%)
准 教 授	2 名／15 名中 (13%)	3 名／14 名中 (21%)	3 名／14 名中 (21%)
講 師	2 名／5 名中 (40%)	1 名／4 名中 (25%)	1 名／4 名中 (25%)
助教・助手	9 名／37 名中 (24%)	9 名／36 名中 (25%)	9 名／35 名中 (26%)
計 (助手・助教含む。)	13 名／76 名中 (17%)	13 名／72 名中 (18%)	13 名／73 名中 (18%)
計 (助手・助教除く。)	4 名／39 名中 (10%)	4 名／36 名中 (11%)	4 名／38 名中 (11%)
大学院学生 (博士後期課程)	10 名／78 名中 (13%)	14 名／79 名中 (18%)	16 名／80 名中 (20%)
大学院学生 (博士前期課程)	29 名／137 名中 (21%)	27 名／121 名中 (22%)	33 名／120 名中 (28%)

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の数、平成 26 年度は 1 月 1 日の数

2. 新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去3年間）

平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
2 名／6 名中 (33%)	1 名／7 名中 (14%)	2 名／9 名中 (22%)

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の比率、平成 26 年度は 1 月 1 日の比率

薬学研究科では、2 名の女性の助手を新規に採用した。

3. 前年度より改善された点

今年度の薬学研究科の女性教員数及び割合は昨年と同じである。

今年度は大学院博士後期課程の女子学生数が前年度より2名増えて16名に、割合も18%から20%となった。このうち、一昨年度から開設された4年制の博士後期課程（薬学履修課程）には6名が進学し、うち女性は1名（17%）であった。大学院博士前期課程の女子学生数は、前年度より6名増えて33名に、割合も22%から28%となった。

4. 改善の上で、障害となっていると思われる点

保育園等の空きがなく、子供を預けられない。

教員のポストに空きがない。

5. 次年度の具体的対応策

博士前期課程大学院生や学部学生（含6年制コース）に対して、サイエンス・エンジェル制度等の本学における女性研究者育成事業の周知を行なうとともに、薬学研究科または本学主催の関連セミナーへの参加を呼びかける。

女性研究者を対象とした助成金等に積極的に応募するよう促す。

1. 女性構成員比率の推移（過去3年間）

職 名 等	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
教 授	1 名／112 名中（1%）	1 名／115 名中（1%）	1 名／118 名中（1%）
准 教 授	2 名／96 名中（2%）	3 名／102 名中（3%）	4 名／108 名中（4%）
講 師	0 名／1 名中（0%）	0 名／2 名中（0%）	0 名／2 名中（0%）
助教・助手	19 名／147 名中（13%）	14 名／135 名中（13%）	14 名／139 名中（10%）
計（助手・助教含む。）	22 名／358 名中（6%）	18 名／354 名中（5%）	19 名／367 名中（5%）
計（助手・助教除く。）	3 名／211 名中（1%）	4 名／219 名中（2%）	5 名／228 名中（2%）
大学院学生（博士後期課程）	52 名／532 名中（10%）	58 名／532 名中（11%）	47 名／517 名中（9%）
大学院学生（博士前期課程）	155 名／1494 名中（10%）	147 名／1488 名中（10%）	147 名／1483 名中（10%）

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の数、平成 26 年度は 1 月 1 日の数

2. 新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去3年間）

平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
7 名／50 名中（14%）	2 名／37 名中（5%）	3 名／31 名中（9%）

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の比率、平成 26 年度は 1 月 1 日の比率

工学研究科では、平成 26 年度は前年度に比べて新規採用者における女性比率が増加したが、教員における比率は横ばいであるので、今後も女性比率の増加に向けて更なる努力が望まれる。女子大学院生の前期課程の比率は前年度とほぼ同じであるが、後期課程の比率が低下しており、増加に向けての努力が望まれる。

3. 前年度より改善された点

工学研究科では、助教の女性比率は低下したものの絶対数は変わらず、また准教授の女性比率は増加しているので、今後の教員における女性比率の増加が期待される。また ALicE の活動が本格化してきており、工学系女性教員や女子学生における問題把握や問題解決にむけての対応が行われている。

4. 改善の上で、障害となっていると思われる点

工学研究科では、伝統的に女子学生・女子大学院学生の比率が小さい。このため、これに応じて女性教員比率も少なくなる傾向があると考えられる。また、工学研究科における教育と研究以外の大学運営のために、現教員は極めて長い時間を割く必要があり、現教員のオーバーワークの状態が日常化している。このことも、女性教員の比率を高める障害になっていると考えられる。また、工学研究科は多様な分野があるため、障害となる原因も多様であると考えられ、その問題把握などが重要であると言える。

5. 次年度の具体的対応策

オープンキャンパスにおいて例年実施している女子学生のためのミニフォーラム「工学にかけ私の夢」を平成 27 年度も行い、工学分野の魅力と将来性を継続的にアピールする。さらに女子学生の博士後期課程への進学を促す方策として、出産・育児による在学期間延長に関する制度を検討する。工学研究科では、植木担当理事より依頼されていた学内保育施設の増設候

補地の提案について、青葉山 3 号道路の直線化整備が困難になったことから、その提案を撤回した。ただし、工学系の女性教員の時間外業務時や、工学系での学会、シンポジウム、セミナー等で出席者などで、託児スペースを希望する者等がいる場合などに利用スペースとして青葉記念会館宿泊施設の一部を活用することを検討する。

農学研究科

1. 女性構成員比率の推移（過去 3 年間）

職 名 等	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
教 授	2 名／41 名中(5%)	2 名／41 名中(5%)	2 名／42 名中(4.8%)
准 教 授	4 名／39 名中(10%)	4 名／42 名中(10%)	4 名／42 名中(9.5%)
講 師	0 名／0 名中(%)	0 名／0 名中(%)	0 名／0 名中(%)
助教・助手	10 名／43 名中(23%)	10 名／38 名中(26%)	9 名／38 名中(23.7%)
計（助手・助教含む。）	16 名／123 名中(13%)	16 名／121 名中(13%)	15 名／122 名中(12.3%)
計（助手・助教除く。）	6 名／80 名中(8%)	6 名／83 名中(7%)	6 名／84 名中(7.1%)
大学院学生（博士後期課程）	34 名／116 名中(29%)	36 名／119 名中(30%)	32 名／107 名中(30%)
大学院学生（博士前期課程）	92 名／284 名中(32%)	109 名／300 名中(36%)	103 名／262 名中(39%)

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の数、平成 26 年度は 1 月 1 日の数

2. 新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去 3 年間）

平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
0 名／2 名中(0%)	1 名／4 名中(25%)	0 名／3 名中(0%)

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の比率、平成 26 年度は 1 月 1 日の比率

農学研究科では、平成 24 年度から平成 26 年度は平成 25 年度の 1 名を除いて女性の新規採用はなかった。これまで平成 21 年度以降平成 22 年度までは計 4 名の女性教員を採用しており、杜の都ジャンプアップ事業による人件費及び研究費の助成が行われた。平成 25 年度は外部資金による特定有期雇用の女性教員 1 名の新規採用となった。助教枠において平成 27 年度から 1 名の女性教員が赴任予定である。今後も継続して女性教員の採用に向けての努力が必要と考えられ、目標達成に向けた検討と具体的な対策をとる必要がある。

3. 前年度より改善された点

農学研究科では、助手・助教を除いた教員の女性構成比率は 7-8%と横ばい状態である。公募において東北大学の男女参画の取組をアピールし、女性の応募を呼びかけているが、女性教員の新規採用が少ない状況にある。博士課程（女性比率前期 39%、後期 30%）に進学する女性が少なくないことから、さらなる改善が必要といえる。

なお、農学研究科では、平成 26 年度より外部資金による時限的なプロジェクトにおける研究に従事する特任教員制度を導入した。これにより平成 26 年度は 8 名の特任助教が採用され、そのうち女性の特任助教は 2 名であった。

4. 改善の上で、障害となっていると思われる点

農学研究科には公募を課さない教員特別選考制度があり、年度によっては杜の都ジャンプアップ事業の活用と併せてその制度を適用し、女性教員の採用を進めてきたが、今後は制度に依存せずとも女性教員比率が高まっていくことが望ましい。そのためには何よりも研究科構成員の更なる意識の向上が必要である。本研究科の大学院博士後期課程進学者に占める女性の割合は平成 25 年度に引き続き、平成 26 年度も 30%に達している。この現実をよく認識することが、更なる改善を促すと思われる。

教員ポストの流動化が思う様に進まないことは農学研究科に限った問題ではなく、全学的な問題としてもとらえるべきかもしれないが、男女共同参画の取組で特に強く感じることは未だ教員の理解が薄いことである。女性教員の積極的な採用や育成について総論は賛成であっても各論はそうでない。意識改革が必要である。

5. 次年度の具体的対応策

次年度においても、農学研究科の人事委員会に対して、教員選考において女性候補者の採用に十分配慮するように要請するとともに、杜の都ジャンプアップ事業のような女性教員の採用を促進する環境整備の必要性を大学本部や関係部署に要請していく必要がある。また農学研究科では、平成 26 年度から東北復興農学センターを立ち上げ、教育、研究、社会貢献等の実績をあげている。平成 27 年度からは食と農免疫国際教育研究センターを発足させる予定である。それらセンターでの教員の新規採用等に当たっては特別選考制度を運用し、積極的に女性教員を登用する様に農学研究科の人事委員会に要請していく。さらに、組織運営においても、大学を支える女性教員の確保・活用を図れる人事システムを構築する様に、研究科長等に要請していく。これらの要求はこれまでも続けているものの予算の縛りによって特別枠による女性教員の採用は見送られてきたが、次年度も継続して行う。

男女共同参画の推進に向けて、目標の設定を本年度に行った。育児と仕事の両立支援策の導入など、総合的・計画的な取組を推進する。農学研究科は平成 28 年度に青葉山新キャンパスへ移転する予定であり、特に育児と仕事の両立支援のための施設として保育園の新規設置の要望を大学本部に強く推進するよう申し入れる。

本年度は本研究科の男女共同参画委員会主催のシンポジウムを初めて開催した。次年度についても継続的にこうしたシンポジウムを開催したい。

1. 女性構成員比率の推移（過去3年間）

職 名 等	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
教 授	5 名／26 名中（19%）	4 名／25 名中（16%）	4 名／25 名中（16%）
准 教 授	3 名／20 名中（15%）	3 名／16 名中（19%）	1 名／12 名中（8%）
講 師	0 名／0 名中（0%）	0 名／0 名中（0%）	0 名／0 名中（0%）
助教・助手	0 名／0 名中（0%）	0 名／0 名中（0%）	0 名／0 名中（0%）
計（助手・助教含む。）	8 名／46 名中（17%）	7 名／41 名中（17%）	5 名／37 名中（14%）
計（助手・助教除く。）	8 名／46 名中（17%）	7 名／41 名中（17%）	5 名／37 名中（14%）
大学院学生（博士後期課程）	50 名／75 名中（67%）	37 名／57 名中（65%）	42 名／64 名中（66%）
大学院学生（博士前期課程）	55 名／78 名中（71%）	54 名／77 名中（70%）	55 名／81 名中（68%）

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の数、平成 26 年度は 1 月 1 日の数

2. 新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去3年間）

平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
0 名／1 名中（0%）	0 名／0 名中（0 %）	0 名／0 名中（0 %）

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の数、平成 26 年度は 1 月 1 日の数

国際文化研究科では、過去 3 年間の新規採用者は 1 名のみであり、女性比率を上げる機会も少なかった。

3. 前年度より改善された点

平成 25 年度末には 2 名の女性教員が退職したが、女性構成員の比率は全体比で 14%と比較的高めの水準を維持している。今年度も FD を開催し、教職員の意識向上を図った。また科内の男女共同参画推進委員会専用メールアドレスを設置し、より相談しやすい環境を整備している。平成 23 年度に設けた女性職員休憩室は震災による破損が一部あったが、24 年度で修理が完了しており、引き続き設備充実等の環境改善を進めている。

4. 改善の上で、障害となっていると思われる点

国際文化研究科では、制度的には特に障害となっていると思われる点はないが、本学の中でも早期に女性教員の積極的採用を始めたことから、昨年度以降、今後も定年による女性教員の退職が続く見込みである。

5. 次年度の具体的対応策

女性の教員・学生ともにその比率は学内でも比較的高いレベルにあるが、女性教員はなお男女共同参画の理念に照らせば不十分であり、今後も採用人事において（単純な数確保だけではなく）配慮を払う必要がある。

1. 女性構成員比率の推移（過去3年間）

職名等	平成24年度	平成25年度	平成26年度
教授	0名／30名中（0%）	0名／30名中（0%）	0名／33名中（0%）
准教授	5名／32名中（16%）	5名／30名中（17%）	5名／30名中（17%）
講師	1名／2名中（50%）	1名／2名中（50%）	1名／1名中（100%）
助教・助手	1名／21名中（5%）	1名／20名中（5%）	1名／21名中（5%）
計（助手・助教含む。）	7名／85名中（8%）	7名／82名中（9%）	7名／85名中（8%）
計（助手・助教除く。）	6名／64名中（9%）	6名／62名中（10%）	6名／64名中（9%）
大学院学生（博士後期課程）	21名／111名中（19%）	21名／110名中（19%）	23名／111名中（21%）
大学院学生（博士前期課程）	28名／291名中（10%）	29名／281名中（10%）	30名／296名中（10%）

※平成24年度、平成25年度は3月末の数、平成26年度は1月1日の数

2. 新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去3年間）

平成24年度	平成25年度	平成26年度
1名／4名中（25%）	0名／6名中（0%）	2名／10名中（20%）

※平成24年度、平成25年度は3月末の比率、平成26年度は1月1日の比率

3. 前年度より改善された点

情報科学研究科では、平成26年度は平成27年1月1日の時点では女性教員2名を新規採用し、新規採用の女性割合は20%で改善した。全体の女性教員比率は若干減少した。

4. 改善の上で、障害となっていると思われる点

情報科学研究科では、多様な分野に分かれている構造から、研究科全体での女性採用枠の設定が容易ではない現状である。また、研究科の大きな部分である工学分野では女性研究者数が少なく、優秀な候補者をサーベイする努力を行っているにも関わらず、採用に成功するのが難しいのが現状である。

5. 次年度の具体的対応策

女性研究者のサーベイを続け、採用に努力すると共に、女性研究者育成に重点を置き、運営検討及び将来計画委員会に働きかけ、長期的な男女比率の是正に努力する。

1. 女性構成員比率の推移（過去3年間）

職 名 等	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
教 授	1 名／27 名中（4%）	1 名／26 名中（4%）	1 名／25 名中（4%）
准 教 授	0 名／16 名中（0%）	0 名／16 名中（0%）	0 名／16 名中（0%）
講 師	0 名／ 2 名中（0%）	0 名／ 2 名中（0%）	0 名／ 2 名中（0%）
助教・助手	5 名／34 名中（15%）	8 名／33 名中（24%）	5 名／28 名中（18%）
計（助手・助教含む。）	6 名／79 名中（8%）	9 名／77 名中（11%）	6 名／71 名中（8%）
計（助手・助教除く。）	1 名／45 名中（2%）	1 名／44 名中（2%）	1 名／43 名中（2%）
大学院学生（博士後期課程）	30 名／99 名中（30%）	27 名／83 名中（33%）	21 名／73 名中（29%）
大学院学生（博士前期課程）	43 名／179 名中（24%）	48 名／189 名中（25%）	57 名／196 名中（29%）

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の数、平成 26 年度は 1 月 1 日の数

2. 新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去3年間）

平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
4 名／13 名中（31%）	2 名／11 名中（18%）	1 名／8 名中（13%）

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の比率、平成 26 年度は 1 月 1 日の比率

生命科学研究科では、平成 24 年度から外部資金等で雇用できる助教（研究特任）の内規を定め、女性教員の採用に努力している。

3. 前年度より改善された点

外部資金等で雇用できる助教（研究特任）の内規を定めたことにより、女性教員も採用しやすくなったと思われるが、前年度よりも採用者、女性採用者も減少している。助教（研究特任）の採用については最低年俸を定めているので、獲得した経費の関係で非常勤の研究者として採用せざるを得ない場合がでてきている。

4. 改善の上で、障害となっていると思われる点

生命科学研究科では、教員の採用において多くが公募になっているが、応募のなかで女性研究者の割合が小さかったが、内規を定めたことにより、少しは改善されたようである。

なお、博士前期課程の大学院学生における女性比率が約 29%で、ここ数年より高くなっており、博士後期課程への進学者が増え、助教への採用数も多くなれば、今後期待できると思われる。

5. 次年度の具体的対応策

次年度においても教員選考委員会において男女共同参画の推進を図る。

生命科学研究科では、研究科における教員の女性比率が極端に低いという厳然たる事実を踏まえ、今後、女性教員を積極的に増やすことを基本方針にして、そのための環境整備を計ること、今後の教員人事において、これを改善するためにできるだけ努力をすることを基本方針

として、引き続き努力する。

具体的な対応策として、以前に決定した次の4つを行う。

- 1) これから行われる教員人事において、各公募分野について女性候補者の推薦を選考委員会が積極的に行うことにより、女性候補者の割合が増えるように努力する。
- 2) 公募する際に、この人事が男女共同参画を目指したものであることを明記する。
- 3) これからの教授人事のなかで、少なくとも1つは女性を教授として採用するように努力する。
- 4) 人事選考の最終段階に女性候補者が残りながら、採用にいたらなかった場合には、人事選考委員会はその理由を説明する責任を負う。

上記の基本方針、具体策に基づき、女性教員の比率の向上を図るため、生命科学研究科では助教及び准教授のポジションは任期制を導入しているため、任期付き女性教員の産前産後休業や育児休業等の取得によって教育・研究活動が中断された期間に対して任期延長を認めることなどの女性教員を受け入れるための環境整備を行い、また女性教員の更衣室・休憩室の設置などのハード面を整備している。また、研究科では教員公募に際しては、「なお、本人事は男女共同参画の理念に基づくものであることを申し添えます」との記載を続けている。

女性教員の採用実績に関しては、平成16～18年度の3年間における教員の採用において、女性教員の採用はまったくなく、比率は0であったが、平成19年度に女性助教が1名採用されたのを皮切りに、平成20年度は4名、平成21年度は1名、平成22年度は1名と年度にバラツキはあるものの、着実に女性教員の採用は行われていて、平成22年度には研究科初の女性教授が誕生した。平成24年度は4名、平成25年度は2名、平成26年度は1名と減少はしているが女性助教の採用があった。

以上のように、女性教員比率は未だ低いので、今後も不断の努力が必要と考えられる。女性教員採用において、もっとも問題となる点の1つとして、有力な女性研究者からの応募が少ない点があげられるので、該当する女性研究者のサーベイを日常より続け、採用に努力する必要があると考えられる。

1. 女性構成員比率の推移（過去3年間）

職 名 等	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
教 授	0 名／14 名中 (0%)	0 名／14 名中 (0%)	0 名／16 名中 (0%)
准 教 授	0 名／16 名中 (0%)	0 名／16 名中 (0%)	0 名／16 名中 (0%)
講 師	0 名／0 名中 (0%)	0 名／0 名中 (0%)	0 名／0 名中 (0%)
助教・助手	2 名／11 名中 (18%)	2 名／9 名中 (22%)	1 名／9 名中 (11%)
計 (助手・助教含む。)	2 名／41 名中 (5%)	2 名／39 名中 (5%)	1 名／41 名中 (2%)
計 (助手・助教除く。)	0 名／30 名中 (0%)	0 名／30 名中 (0%)	0 名／32 名中 (0%)
大学院学生 (博士後期課程)	26 名／109 名中 (24%)	23 名／94 名中 (24%)	26 名／95 名中 (27%)
大学院学生 (博士前期課程)	46 名／220 名中 (21%)	39 名／202 名中 (19%)	37 名／211 名中 (18%)

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の数、平成 26 年度は 1 月 1 日の数

2. 新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去3年間）

平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
1 名／1 名中 (100%)	0 名／2 名中 (0%)	0 名／6 名中 (0%)

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の比率、平成 26 年度は 1 月 1 日の比率

環境科学研究科では、過去 3 年間に 9 名が新規採用され、そのうち 1 名(11%)が女性教員であった。今後の女性教員採用の増加に向けて努力したい。

3. 前年度より改善された点

前年度からの改善点は見当たらないが、大学院博士後期課程の学生のうち、女子学生が占める割合は、研究科設立時の 14%(H15)から着実に増加し、現在は 27%である。

4. 改善の上で、障害となっていると思われる点

環境科学研究科の対象とする学問領域において研究者に占める女性の割合が少ない。このため、教員の公募の際に男女共同参画を推進している旨を謳っているにもかかわらず、女性の応募が少なく、採用に至らないケースが多い。これが最大の障害であり、即効性のある対策はない。

5. 次年度の具体的対応策

即効性のある対応策ではないが、項目 3 で記した様に、女子学生に対し博士課程後期課程への進学を促し、地道に研究者数を増やすことを継続して取り組みたい。

1. 女性構成員比率の推移（過去3年間）

職 名 等	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
教 授	1 名／18 名中（6%）	1 名／18 名中（6%）	1 名／19 名中（5%）
准 教 授	2 名／8 名中（25%）	2 名／7 名中（29%）	2 名／7 名中（29%）
講 師	0 名／0 名中（-%）	0 名／0 名中（-%）	0 名／0 名中（-%）
助教・助手	1 名／3 名中（33%）	1 名／4 名中（25%）	1 名／7 名中（14%）
計（助手・助教含む。）	4 名／29 名中（14%）	4 名／29 名中（14%）	4 名／35 名中（11%）
計（助手・助教除く。）	3 名／26 名中（12%）	3 名／25 名中（12%）	3 名／26 名中（12%）
大学院学生（博士後期課程）	7 名／42 名中（17%）	5 名／44 名中（11%）	7 名／53 名中（13%）
大学院学生（博士前期課程）	13 名／86 名中（15%）	17 名／82 名中（21%）	16 名／82 名中（20%）

※平成 24 年度は 3 月末の数、平成 25 年度は 3 月末の数、平成 26 年度は 1 月 1 日の数

2. 新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去3年間）

平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
0 名／3 名中（0%）	0 名／4 名中（0%）	1 名／4 名中（25%）

※平成 24 年度は 3 月末の比率、平成 25 年度は 3 月末の比率平成 26 年度は 1 月 1 日の比率

医工学研究科では小さい部局であるため採用数も少ないのが現状である。ここ 3 年間、女性教員の採用者はいなかったが、平成 26 年度は 1 名（助教）採用した。大学院生博士課程後期の比率は前年度より微小増加である。前期課程は微小減少ではあるが 20%である。

3. 前年度より改善された点

今年度は 1 名助教を採用した。女子学生の比率も博士課程後期に関して微小増加した。工学研究科、情報科学研究科、環境科学研究科、災害科学国際研究所、環境保全センター、NICHE と共同で東北大学 工学系研究科 女性研究者 育成支援推進室 ALicE (Association of Leading Woman Researchers in Engineering) が設置され、女子学生や女性教員を対象に支援活動が活発に行われている。また、合同の男女共同参画委員会も複数回行われ、他部局も交えての問題の認識、情報の共有化などが行われている。また、サイエンスリーダーズキャンプ (SLC)「革新的な未来を拓く医工連携人材育成の現場」にて高校教諭を対象として女性教員の研究室見学や講演等を行い男女共同参画の啓発を行った。

4. 改善の上で、障害となっていると思われる点

医工学研究は工学を基盤とするため、工学系女性研究者が少ないため、女性教員の上位職に関しては候補者が少ないと言える。また、若手教員の多い小さい部局であるため人事が大きく動かないことも挙げられる。また小さい部局であるため部局単体での女子学生のための支援などは困難である。

5. 次年度の具体的対応策

平成 24 年度から平成 26 年度までで、博士課程前期、後期ともに女子学生の人数はさほど変わっていない。今年度のサイエンス・エンジェルの人数は前年度から 1 名増加で 4 名である。

工学系女性研究者育成支援推進室 ALicE により、データの整理や解析などを行いながら、女子学生や女性教員の活躍をより見えるようにすることや、他部局と共同で課題に対応しながら、全学支援とも連携して支援が活発に行われた。これからも、引き続き有効な支援などを検討しながら支援活動等を行っていく。

教育情報学研究部・教育部

1. 女性構成員比率の推移（過去3年間）

職 名 等	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
教 授	0 名 / 4 名中 (0%)	0 名 / 4 名中 (0%)	0 名 / 4 名中 (0%)
准 教 授	0 名 / 1 名中 (0%)	0 名 / 2 名中 (0%)	0 名 / 2 名中 (0%)
講 師	0 名 / 1 名中 (0%)	0 名 / 0 名中 (0%)	0 名 / 0 名中 (0%)
助教・助手	0 名 / 3 名中 (0%)	0 名 / 3 名中 (0%)	0 名 / 3 名中 (0%)
計 (助手・助教含む。)	0 名 / 9 名中 (0%)	0 名 / 9 名中 (0%)	0 名 / 9 名中 (0%)
計 (助手・助教除く。)	0 名 / 6 名中 (0%)	0 名 / 6 名中 (0%)	0 名 / 6 名中 (0%)
大学院学生 (博士後期課程)	8 名 / 22 名中 (36%)	7 名 / 24 名中 (29%)	8 名 / 23 名中 (35%)
大学院学生 (博士前期課程)	14 名 / 32 名中 (47%)	15 名 / 26 名中 (58%)	15 名 / 24 名中 (63%)

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の数、平成 26 年度は 1 月 1 日の数

2. 新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去3年間）

平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
0 名 / 0 名中 (0%)	0 名 / 1 名中 (0%)	0 名 / 0 名中 (0%)

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の比率、平成 26 年度は 1 月 1 日の比率

3. 前年度より改善された点

教育情報学研究部では、女子学生の比率が博士前期後期とともに大学院創立の平成 14 年より毎年高く女性の教育情報の分野における女性研究者及び女性専門家の育成にこれからも努めていく。

4. 改善の上で、障害となっていると思われる点

教育情報学研究部において平成 14 年 4 月創立当時より教員数 10 名ほどの小規模な独立大学院であり、その当時より女性教員はいなかった。教員の新規採用の公募は平成 22 年度に初めて行い、公募には女性教員の採用については積極的に考慮することを明記したが、女性教員の新規採用は残念ながら実現しなかった。教員の新規採用の機会に恵まれないことと、教育情報学という分野における女性研究者の絶対数の少なさが本大学院の女性教員の不在の原因になっており、その点を改善する機会が本年度もなかった。

5. 次年度の具体的対応策

教員の新規採用の機会においては、今後とも女性教員の採用に積極的に取り組みたい。

1. 女性構成員比率の推移（過去3年間）

職 名 等	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
教 授	0 名／25 名中 (0%)	0 名／30 名中 (0%)	0 名 32／名中 (0%)
准 教 授	2 名／42 名中 (5%)	2 名／36 名中 (6%)	2 名／37 名中 (5%)
講 師	0 名／1 名中 (0%)	0 名／2 名中 (0%)	0 名／2 名中 (0%)
助教・助手	6 名／67 名中 (9%)	4 名／65 名中 (6%)	3 名／64 名中 (5%)
計 (助手・助教含む。)	8 名／135 名中 (6%)	6 名／133 名中 (5%)	5 名／135 名中 (4%)
計 (助手・助教除く。)	2 名／68 名中 (3%)	2 名／68 名中 (3%)	2 名／71 名中 (3%)
大学院学生 (博士後期課程)	名／名中 (%)	名／名中 (%)	名／名中 (%)
大学院学生 (博士前期課程)	名／名中 (%)	名／名中 (%)	名／名中 (%)

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の数、平成 26 年度は 1 月 1 日の数

2. 新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去3年間）

平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
2 名／25 名中 (8%)	1 名／18 名中 (6%)	0 名／13 名中 (0%)

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の比率、平成 26 年度は 1 月 1 日の比率

金属材料研究所では今年度女性教員の新規採用がなく、さらに助教 1 名が他大学准教授として転出し、その結果、女性教員比率は昨年度の 5 % から 4 % へと低下した。

3. 前年度より改善された点

金属材料研究所では、今年度新規採用はなく、さらに 1 名の助教が転出し、結果として教員数においては後退したと云わざるをえない。ただ、来年度助手 1 名の採用が予定されている。

4. 改善の上で、障害となっていると思われる点

金属材料研究所では、該当分野内での限られた人材からの採用は困難な状況になりつつある。とりわけ、本所の教員に対する任期制について、検討する必要がある。

5. 次年度の具体的対応策

女性教員の新規採用における粘り強い勧誘とともに、独自計画で研究できる上級職への応募勧誘のために、以下の対策を検討する。

- ① 教員公募要項への“男女共同参画を推進している”旨の記載の励行。
- ② 女性教員数の増加に向けた積極的施策の検討。
- ③ 女性教員の活躍促進のための各種所内委員会へ登用。
- ④ 女子学生・研究者の増加に向けて、学会等を通じた一層の活動。
- ⑤ トイレ、休憩室等の環境整備の一層の推進。

1. 女性構成員比率の推移(過去3 年間)

職名等	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
教授	0 名／20 名中(0%)	1 名／19 名中(5%)	2 名／21 名中(10%)
准教授	1 名／12 名中(8%)	1 名／11 名中(9%)	0 名／10 名中(0%)
講師	0 名／1 名中(0%)	0 名／4 名中(0%)	0 名／3 名中(0%)
助教・助手	4 名／25 名中(16%)	5 名／26 名中(19%)	2 名／22 名中(9%)
計(助手・助教含む。)	4 名／61 名中(7%)	7 名／60 名中(12%)	4 名／56 名中(7%)
計(助手・助教除く。)	1 名／36 名中(3%)	2 名／34 名中(6%)	2 名／34 名中(6%)
大学院学生(博士後期課程)	名／名中(%)	名／名中(%)	名／名中(%)
大学院学生(博士前期課程)	名／名中(%)	名／名中(%)	名／名中(%)

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の数、平成 26 年度は 1 月 1 日の数

2. 新規採用者(教授・准教授・講師・助教・助手)における女性比率(過去3 年間)

平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
2 名／6 名中(33%)	2 名／10 名中(20%)	0 名／4 名中(0%)

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の比率、平成 26 年度は 1 月 1 日の比率

3. 前年度より改善された点

女性教授(新規採用、昇任)が二年連続で誕生した点が、画期的であった。これは、男女共同参画の理念に基づいた人事選考によるものと考えられる。その反面助教が減ったのが残念ではある。しかし、これは教授の専権事項でもあり、解決には難しい側面がある。

4. 改善の上で、障害となっていると思われる点

加齢医学研究所では特別に障害となっている点は少ないと思われる。しかし、大学院生の所属が、医学系、生命科学系、歯学系、医工学系、薬学系と多岐にわたっている故に、それぞれの所属系に根ざした固有の問題がある(それぞれの目指す目標が異なっている)。従って、それぞれの最大公約数となるような研究所全体としての改善には困難がともなう。結果的に、それぞれの所属系による問題点解決に依存している度合いが大きい。

5. 次年度の具体的対応策

星陵地区男女共同参画ネットワーク会議に出席することによって、各部局における現状と課題に対する対応策、すなわち最も身近な事例を参考にして、改善を図っていく。次年度以降の教員の採用の際に、男女比率の改善を目指して努力する。教職員及び学生の意識改革を進め、長期的な視野に立ち、現在受け入れている女子大学院生、女性研究者を育成していく。

1. 女性構成員比率の推移（過去3年間）

職 名 等	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
教 授	0 名／15 名中 (0%)	0 名／15 名中 (0%)	0 名／15 名中 (0%)
准 教 授	1 名／10 名中 (10%)	1 名／10 名中 (10%)	1 名／11 名中 (9%)
講 師	1 名／2 名中 (50%)	1 名／2 名中 (50%)	1 名／2 名中 (50%)
助教・助手	0 名／11 名中 (0%)	0 名／13 名中 (0%)	0 名／13 名中 (0%)
計 (助手・助教含む。)	2 名／38 名中 (5%)	2 名／40 名中 (5%)	2 名／41 名中 (4%)
計 (助手・助教除く。)	2 名／27 名中 (7%)	2 名／27 名中 (7%)	2 名／28 名中 (7%)
大学院学生 (博士後期課程)	1 名／34 名中 (3%)	3 名／39 名中 (8%)	3 名／42 名中 (7%)
大学院学生 (博士前期課程)	3 名／99 名中 (3%)	3 名／104 名中 (3%)	1 名／98 名中 (1%)

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の数、平成 26 年度は 1 月 1 日の数

2. 新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去3年間）

平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
0 名／2 名中 (0%)	0 名／4 名中 (0%)	0 名／3 名中 (0%)

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の比率、平成 26 年度は 1 月 1 日の比率

流体科学研究所では、新規採用女性教員は 0 名であったが、准教授 1 名及び講師 1 名の 2 名が在籍しており、全教員数の 4～5%の割合となっている。研究所を構成する分野が主として工学部の機械系に属しており、研究分野からしても女性研究者の少ない状況で、ここ数年女性構成員の比率を維持している。

3. 前年度より改善された点

流体科学研究所では、在籍している女性教職員の快適な仕事環境を維持することを主目的として、流体科学研究所ベビーシッター利用料等補助プログラム制度を設け、募集をすることとなった。これは実質的には女性教職員に限らず子育てが忙しくなる若手の男女教職員に広く募集をするものであるが、子育てと研究の両立をはかる女性教職員にとっては大変有用な制度であると言える。

4. 改善の上で、障害となっていると思われる点

流体科学研究所では、在籍女性教職員の職場環境の改善と今後の新規採用者として女性教員の採用に努力をはらっているが、先述の通り研究分野における女性研究者の絶対数が少ないところが障害となっている。長期的な視野に立ち、当該分野における女子学生の育成が重要な課題となっている。

5. 次年度の具体的対応策

平成 27 年度から平成 28 年度にかけて、新規教員公募においては、公募要領に「東北大学は男女共同参画を推進している」及び「子育て支援の詳細等、男女共同参画の取組については下記の URL を参照のこと」を明記し、広く採用者への周知を図る。

1. 女性構成員比率の推移（過去3年間）

職 名 等	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
教 授	0 名／25 名中 (0%)	0 名／24 名中 (0%)	0 名／24 名中 (0%)
准 教 授	0 名／19 名中 (0%)	0 名／20 名中 (0%)	0 名／19 名中 (0%)
講 師	0 名／0 名中 (0%)	0 名／0 名中 (0%)	0 名／0 名中 (0%)
助教・助手	1 名／24 名中 (4%)	1 名／22 名中 (4%)	1 名／23 名中 (4%)
計 (助手・助教含む。)	1 名／68 名中 (1%)	1 名／66 名中 (1%)	1 名／66 名中 (1%)
計 (助手・助教除く。)	0 名／44 名中 (0%)	0 名／44 名中 (0%)	0 名／43 名中 (0%)
大学院学生 (博士後期課程)	2 名／43 名中 (5%)	1 名／38 名中 (3%)	2 名／37 名中 (5%)
大学院学生 (博士前期課程)	4 名／137 名中 (3%)	7 名／127 名中 (6%)	8 名／124 名中 (6%)

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の数、平成 26 年度は 1 月 1 日の数

2. 新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去3年間）

平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
0 名／5 名中 (0%)	1 名／4 名中 (25%)	0 名／0 名中 (0%)

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の比率、平成 26 年度は 1 月 1 日の比率

電気通信研究所では積極的な男女共同参画に努めているが、平成 23 年及び 24 年に助教 2 名が転出し、平成 25 年度に助教を 1 名採用したものの、女性比率の向上には結びついていない。研究分野の性格上女子学生や女性研究者が元々少ないということが原因していると考えられるが、男女共同参画への取組を強化し、女性比率の向上に努めたい。

3. 前年度より改善された点

女性研究者の研究環境支援を積極的に行い、研究スキルアップ経費への申請が採択されるなど、実際に研究環境の向上につながった。

4. 改善の上で、障害となっていると思われる点

研究分野の性格上、女性研究者及び女子学生が少ないことが大きな障害になっている。まずは、女子学生の数を増やし、若手女性研究者の母集団を増やすことが重要であると考えられる。そのため、女子学生の積極的な大学院への進学等の進路指導や、新しい学際領域の創成など様々な努力をしているところである。女子学生の割合は、平成 24 年度以降微増傾向にあることから、徐々にではあるが成果が出つつあると思われる。この取組を継続して行っていく。

5. 次年度の具体的対応策

引き続き、男女共同参画への取組に努力する。また、女子学生、特に博士後期課程の女子学生の数が増えるよう、積極的な大学院への進学等の進路指導を行う。また、研究所公開などで女性研究者・女子学生の活躍の様子を積極的に紹介する。

1. 女性構成員比率の推移（過去3年間）

職 名 等	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
教 授	1 名／ 41 名中 (2%)	1 名／ 44 名中 (2%)	1 名／ 44 名中 (2%)
准 教 授	0 名／ 32 名中 (0%)	0 名／ 33 名中 (0%)	0 名／ 33 名中 (0%)
講 師	0 名／ 5 名中 (0%)	0 名／ 2 名中 (0%)	0 名／ 3 名中 (0%)
助教・助手	2 名／ 59 名中 (3%)	3 名／ 59 名中 (5%)	3 名／ 59 名中 (5%)
計 (助手・助教含む。)	3 名／ 137 名中 (2%)	4 名／ 138 名中 (3%)	4 名／ 139 名中 (3%)
計 (助手・助教除く。)	1 名／ 78 名中 (1%)	1 名／ 79 名中 (1%)	1 名／ 80 名中 (1%)
大学院学生 (博士後期課程)	名／名中 (%)	名／名中 (%)	名／名中 (%)
大学院学生 (博士前期課程)	名／名中 (%)	名／名中 (%)	名／名中 (%)

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の数、平成 26 年度は 1 月 1 日の数

2. 新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去3年間）

平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
0 名／9 名中 (0%)	2 名／14 名中 (14%)	0 名／6 名中 (0%)

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の比率、平成 26 年度は 1 月 1 日の比率

3. 前年度より改善された点

1 昨年度「女性教員比率向上への対応に関する申合せ」を制定し、女性教員特別枠を設け平成 25 年 4 月 1 日付で 2 名を採用した。しかし、今年度は新規採用者は 0 であり、前年度から改善された点は特にない。

4. 改善の上で、障害となっていると思われる点

多元物質科学研究所の研究分野である理工系（特に工学系）には、女性研究者が少なく候補者が少ないことが障害となっていると思われる。女性教員のサポートだけではなく、女子学生のサポートにも力を入れていく必要がある。また教員数が多いため、女性教員の比率の改善はなかなか困難である。

5. 次年度の具体的対応策

来年度は、引き続き女性教員の採用を人事委員会の努力目標として喚起し、比率の回復を図るほか、女子学生へのサポートも行っていく。さらに女性教員数の向上をめざすために下記 2 点を行う。

- 1) 財政的優遇措置については、所内経費により女性教員特別枠を設けて、女性採用を促進する。
- 2) 新規採用の公募に関して女性教員の採用について努力する。

1. 女性構成員比率の推移（過去3年間）

職 名 等	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
教 授	0 名／18 名中 (0%)	0 名／24 名中 (0%)	0 名／24 名中 (0%)
准 教 授	1 名／9 名中 (11%)	2 名／11 名中 (18.2%)	3 名／14 名中 (21.4%)
講 師	0 名／1 名中 (0%)	0 名／1 名中 (0%)	0 名／1 名中 (0%)
助教・助手	5 名／24 名中 (20.8%)	7 名／31 名中 (22.6%)	7 名／30 名中 (23.3%)
計 (助手・助教含む。)	6 名／52 名中 (11.5%)	9 名／65 名中 (13.9%)	10 名／69 名中 (14.5%)
計 (助手・助教除く。)	1 名／28 名中 (3.6%)	2 名／36 名中 (5.6%)	3 名／39 名中 (7.8%)
大学院学生 (博士後期課程)	0 名／0 名中 (0%)	名／名中 (%)	名／名中 (%)
大学院学生 (博士前期課程)	0 名／0 名中 (0%)	名／名中 (%)	名／名中 (%)

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の数、平成 26 年度は 1 月 1 日の数

2. 新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去3年間）

平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
6 名／52 名中 (11.5%)	2 名／13 名中 (15.4%)	2 名 4／名中 (50%)

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の比率、平成 26 年度は 1 月 1 日の比率

災害科学国際研究所では、積極的に女性教員の拡充を目指した採用方針をとっており、新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率は上昇している。これを反映して、全体の女性構成員比率（助手・助教含む）も平成 24 年度 11.5%、平成 25 年度 13.9%、平成 26 年度 14.5%と上昇している。

3. 前年度より改善された点

災害科学国際研究所では、東北大学工学系研究科女性研究者育成支援推進室 ALicE での取組もあり、女性研究者の就業環境は改善されている。また、育児期の男性研究者の座談会を行うなど、男性研究者間の情報共有の取組も始めている。平成 27 年 2 月より、男女共同参画 WG を設置し、男女共同参画への取組をさらに推進していくこととなった。新棟完成に伴い女性休憩室が設置され、現在運用ルールについて検討中である。

4. 改善の上で、障害となっていると思われる点

現時点で大きな障害はない。

5. 次年度の具体的対応策

今後も引き続き、教員の採用においては、男女比率のより一層の向上を目指して努力する。任期制に基づく人事公募においては、男女共同参画の趣旨に副う選考を行うことを引き続き明示する予定である。また、全学や ALicE における男女共同参画への取組を所員に一層浸透させ、男女ともに働きやすい職場環境を目指して、男女共同参画を推進していく。

1. 女性構成員比率の推移（過去3年間）

職 名 等	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
教 授	0 名／8 名中 (0%)	0 名／11 名中 (0%)	0 名／10 名中 (0%)
准 教 授	0 名／7 名中 (0%)	0 名／6 名中 (0%)	0 名／6 名中 (0%)
講 師	名／名中 (%)	名／名中 (%)	名／名中 (%)
助教・助手	1 名／7 名中 (14%)	1 名／8 名中 (13%)	1 名／7 名中 (14%)
計 (助手・助教含む。)	1 名／22 名中 (5%)	1 名／25 名中 (4%)	1 名／23 名中 (4%)
計 (助手・助教除く。)	0 名／15 名中 (0%)	0 名／17 名中 (0%)	0 名／16 名中 (0%)
大学院学生 (博士後期課程)	名／名中 (%)	名／名中 (%)	名／名中 (%)
大学院学生 (博士前期課程)	名／名中 (%)	名／名中 (%)	名／名中 (%)

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の数、平成 26 年度は 1 月 1 日の数

2. 新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去3年間）

平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
1 名／3 名中 (33%)	0 名／4 名中 (0%)	0 名／0 名中 (0%)

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の比率、平成 26 年度は 1 月 1 日の比率

東北アジア研究センターでは、過去 3 年間教員人事選考を行う際、能力・実績等において、同等の場合には女性候補者を優先するよう選考担当者に申し入れを行っており、結果的に一名の女性の採用に至った。

3. 前年度より改善された点

東北アジア研究センターでは、平成 22 年度から男女共同参画ワーキンググループを設置し種々検討を重ねているところである。

少数部局ゆえに教員選考自体を頻繁に行えないが、今後とも、同ワーキンググループから教員選考委員会への申し入れを行うなど、より一層の配慮を行っていく。

4. 改善の上で、障害となっていると思われる点

東北アジア研究センターでは、平成 19 年度末に女性の助教 1 名が他の国立大学に准教授として転出、平成 25 年度には二人の女性の教育研究支援者が他の国公立大学に専任講師として転出、平成 26 年度には一人の女性技術補佐員が学内のロシア交流推進室の特任助教として採用されているので、女性の研究者育成という点では貢献しているといえる。本センターは所属教員が 23 名ほどの部局であり、研究分野が極めて限定されていることから新規公募の際に適切な人材が応募してくる可能性は高くないことを考慮する必要がある。

5. 次年度の具体的対応策

引き続き、教員公募要項に男女共同参画を積極的に推進している旨記載すると共に、女性研究者の着実な増加に向けて男女共同参画ワーキンググループを中心に検討を行う。

1. 女性構成員比率の推移（過去3年間）

職 名 等	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
教 授	0 名／7 名中 (0%)	0 名／6 名中 (0%)	0 名／4 名中 (0%)
准 教 授	3 名／19 名中 (16%)	4 名／15 名中 (27%)	3 名／18 名中 (17%)
講 師	6 名／67 名中 (9%)	7 名／58 名中 (12%)	6 名／60 名中 (10%)
助教・助手	45 名／257 名中 (18%)	59 名／278 名中 (21%)	62 名／281 名中 (22%)
計 (助手・助教含む。)	54 名／350 名中 (15%)	70 名／357 名中 (20%)	71 名／363 名中 (20%)
計 (助手・助教除く。)	9 名／93 名中 (10%)	11 名／79 名中 (14%)	9 名／82 名中 (11%)
大学院学生 (博士後期課程)	名／名中 (%)	名／名中 (%)	名／名中 (%)
大学院学生 (博士前期課程)	名／名中 (%)	名／名中 (%)	名／名中 (%)

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の数、平成 26 年度は 1 月 1 日の数

2. 新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去3年間）

平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
9 名／56 名中 (16%)	16 名／66 名中 (24%)	10 名／77 名中 (13%)

※平成 24 年度、平成 25 年度は 3 月末の比率、平成 26 年度は 1 月 1 日の比率

病院では、平成 25 年度と平成 26 年度を比較し、女性の新規採用者数が 16 名から 10 名へ減少、新規採用者全体における女性比率も、24%から 13%に低下した。

3. 前年度より改善された点

病院では、女性医師支援室が前年度発足後、今年度は具体的な要望を取りまとめ、病院長に提出した。部局執行部と当事者の相互理解が進み、改善策が具体化した。なお育児短時間勤務医員は平成 25 年度末現在 13 名から平成 27 年 1 月現在 15 名に増加した。

4. 改善の上で、障害となっていると思われる点

- ① 医師の資格を持つ女性研究者は他部局に比して教員任用時年齢が高くなりやすい。
学部 6 年、初期臨床研修 2 年が必須、更に専門領域の臨床研修 1~2 年を経て大学院 4 年、出産育児休業を経ると年齢は 30 歳台後半となり、この年代まで教員向け支援策を活用できないのみならず、競争的研究資金の応募年齢制限などがハンディとなる。
- ② 男女共同参画文化の熟成が必要である。女性医師の配偶者は医師が最多である現状を鑑み、時間外勤務などの面で不公平感を抱かずに、男女共同参画の理念を実現するには、上級職や男性の意識改革をさらに推進することが望ましい。
- ③ メンターとして助言をする、もしくはロールモデルとなる女性教員が少ない。

5. 次年度の具体的対応策

- ① 短時間勤務医員の雇用に関する取扱事項の改正を施行する。
- ② 女性教員ないし教員候補となる世代のニーズを集約し、各種の支援策を周知する。
- ③ 男性を含めて部局全体で男女共同参画の理念を浸透するべく教育や啓発活動を行う。

本部事務機構

事務職員（全学）の人事

1 採用状況

平成26年度の事務職員の新規採用数は44名である。そのうち、女性職員は20名であり、新規採用者全体に占める割合は45.5%となっている。

2 職種別女性職員在職状況

H27. 1. 1 現在

職 種	全体数	女性職員数 (内数)	比 率 (%)
部 長	15	0	0.0%
課 長 ・ 事 務 長	57	1	1.8%
課 長 補 佐 等	79	8	10.1%
係 長 等	301	65	21.6%
主 任	219	104	47.5%
一 般 職 員	378	197	52.1%
再 雇 用 職 員	29	6	20.7%
計	1,078	381	35.3%

技術職員（全学）の人事

1 採用状況

平成26年度の技術職員の新規採用数は19名である。そのうち、女性職員は8名であり、新規採用者全体に占める割合は42.1%となっている。

2 職種別女性職員在職状況

H27. 1. 1 現在

職 種	全体数	女性職員数 (内数)	比 率 (%)
統括技術専門員	11	1	9.1%
技 術 専 門 員	30	1	3.3%
技 術 専 門 職 員	151	26	17.2%
技 術 一 般 職 員	182	49	26.9%
再 雇 用 職 員	92	35	38.0%
計	466	112	24.0%

注) 医療技術職員（看護師、臨床検査技師等 1,519名）を除く。

3 今後の方針（人材の確保）

職員の採用は競争試験を原則とし、合格者への面接等の結果により最終的に採用者を決定するが、面接においては特に行動力、意思力、意欲面を評価している。試験は男女の区別はなく、能力主義、人物本位に行っており、公平性に留意し実施している。

大学の業務は、広範・多岐にわたっており、これまでの教育研究活動の支援業務にとどまらず、大学運営の企画立案に積極的に参画し、大学運営の専門職能集団としての機能を発揮することが求められており、これらの趣旨に添った資質・能力をもった職員の採用・人材育成を行っていく必要がある。

5. 平成 26 年度男女共同参画推進センターの取組

男女共同参画推進センターについて

1) 男女共同参画推進センター概要

平成 26 年 4 月、「男女共同参画推進のための行動指針」に基づき、これまでの女性研究者育成支援推進室を発展的改組し、本学全体の男女共同参画活動を円滑に推進することを目的として「男女共同参画推進センター」を設置した。

男女共同参画推進センターでは、「行動指針」に基づき、男女共同参画委員会を支援するとともに 1) 両立支援・環境整備、2) 女性リーダー育成、3) 次世代育成、4) 顕彰制度、5) 地域連携、6) 国際化対応、7) 支援推進体制、の 7 プログラムを実施する。

平成 27 年 1 月、男女共同参画推進センターの専任教員である助手が退職した。2 月、後任教員として助教を採用し、センターにおける調査研究や各種支援事業等の実施を強化する体制を作った。

また、センターの活動について広く知っていただくため、ニュースレターを作成し、平成 26 年度は 3 回配布した。さらにセンターのリーフレットを日本語版、英語版で作成し、学内外に周知する体制を整えている。

平成 26 年 7 月、平成 27 年 3 月には環太平洋大学協会 (APRU) の男女共同参画 Workshop にセンター専任教員が参加し、国際的な場にも活動を広げている。

2) 男女共同参画推進センター愛称・ロゴマーク

男女共同参画推進センター設置に伴い、当センターに愛着を持って頂き、男女共同参画へのより深い理解を促すため、センターについて分かりやすく表現した愛称とロゴマークの 2 点を公募した。全国各地から多数の応募があり、厳正なる審査の結果、愛称は静岡県在住の島田宏哉氏、ロゴマークは群馬県在住の小池友基氏の作品に決まった。

＜愛称＞「TUMUG(つむぐ)」

「TUMUG(つむぐ)」とは

Tohoku University(東北大学)

Movement(運動、活動)

United(団結、協力)

Gender(ジェンダー、男女)

からなる頭字語(アクリニム)。東北大学が「紡ぐ」男女共同参画の取組が、ムーブメントとして広がっていくことを目指している。

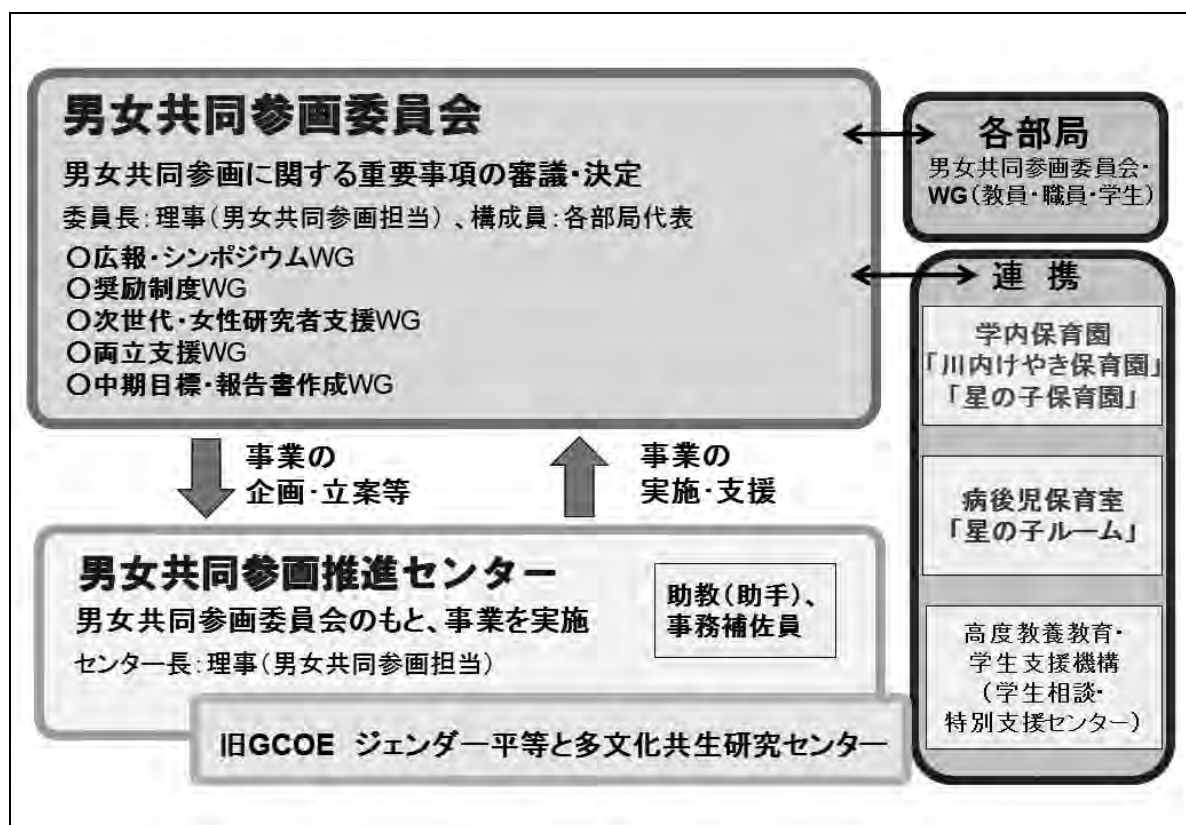
＜ロゴマーク＞



杜の都仙台を象徴するケヤキの木をモチーフに、人々が手を取り、支え合う様子をイメージしている。また、葉の形は四葉のクローバーにも見え、幸せな未来も想像される。

東北大学男女共同参画推進センターは、年齢・性別等を問わず、誰もが夢や希望を持って、あらゆる分野で活躍できる社会を目指して、男女共同参画の推進に取り組んでいく。

3) 男女共同参画推進センター組織図



平成 26 年度活動実績一覧

日付	事項	区分
4 月 1 日	男女共同参画推進センター設置	支援推進体制
4 月 11 日	平成 26 年度サイエンス・エンジェル第一次応募者採択	次世代支援
4 月 28 日	第一回研究スキルアップ経費応募者採択	女性リーダー育成
5 月 2 日	第 1 回沢柳フェローとのランチミーティング	女性リーダー育成
5 月 8 日	病後児保育室「星の子ルーム」見学	両立支援・環境整備
5 月 27 日	平成 26 年度サイエンス・エンジェル第二次応募者採択	次世代支援
5 月 27 日	第二回研究スキルアップ経費応募者採択	女性リーダー育成
6 月 7 日	H26 年度サイエンス・エンジェルオリエンテーション	次世代支援
6 月 16 日	仙台 I ゾンタクラブ 東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業募集	次世代支援
6 月 20 日	H26 女性加速事後評価成果報告書提出	支援推進体制
6 月 26 日	出張セミナー 秋田県立秋田南高等学校	次世代支援
6 月 30 日	仙台 I ゾンタクラブ 東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業採択者決定	次世代支援
7 月 8 日	男女共同参画推進センター、愛称・ロゴマーク募集	支援推進体制
7 月 20 日	学都「仙台・宮城」サイエンス・デイ 2014	次世代支援
7 月 28 日	日本が誇るマテリアルの世界「材料フェスタ in 仙台」	次世代支援
7 月 30 日 31 日	オープンキャンパス for 女子高校生 2014	SA 活動／女性リーダー育成
8 月 1 日	男女共同参画推進センター (TUMUG) ニュースレター 0 号発刊	支援推進体制
8 月 9 日 10 日	国立科学博物館「サイエンススクエア 2014」	次世代支援
8 月 21 日	「楽しい理科のはなし～不思議の箱をあけよう～」	次世代支援
9 月 3 日	「外部資料獲得セミナー」／第 2 回沢柳フェローとのランチミーティング	女性リーダー育成
9 月 5 日	「女性研究者養成システム改革加速」事後評価のヒアリング「事前確認事項」提出	支援推進体制
9 月 6 日	出張セミナー 茨城県立竜ヶ崎第一高等学校	次世代支援
9 月 11 日	出張セミナー 山形県村山市立楯岡中学校	次世代支援
9 月 22 日	第 1 回澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞(通称:澤柳記念賞)受賞課題決定	顕彰制度
10 月 7 日	H26 女性加速事後評価ヒアリング	支援推進体制
10 月 7 日	第 12 回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム	シンポジウム
10 月 16 日	出張セミナー 宮城県宮城第一高等学校	次世代支援

10月18日	出張セミナー 山形県立山形西高等学校	次世代支援
10月29日	高度教養教育・学生支援機構主催「教育関係共同利用拠点提供プログラム」開講の案内	女性リーダー育成
11月9日 10日	サイエンスアゴラ 2014	次世代支援
11月14日	国際高等研究教育機構・国際高等研究教育院主催「融合領域研究合同講義」開講の案内	女性リーダー育成
11月15日	出張セミナー 山形県立山形東高等学校	次世代支援
11月26日	女性研究者研究活動支援事業 合同公開シンポジウムへの参加	シンポジウム
11月29日	平成26年度第11回東北大学男女共同参画シンポジウム「未来の男女共同参画社会への新たな発信～女子学生入学101年目の節目を迎えた東北大学から」	シンポジウム
11月29日	研究スキルアップ経費利用者によるシンポジウムでのポスター発表	女性リーダー育成
11月29日	男女共同参画推進センター愛称・ロゴマーク決定	支援推進体制
12月1日	センターホームページ開設	支援推進体制
12月16日	女性研究者のためのメディア対応セミナー／第3回沢柳フェローとのランチミーティング	女性リーダー育成
12月23日	男女共同参画推進センター(TUMUG)ニュースレター1号発行	支援推進体制
1月	新規教員情報やML用の情報収集	支援推進体制
1月22日	出張セミナー 宮城県宮城第一高等学校	次世代支援
1月23日	女子学生入学百周年記念報告書発刊	支援推進体制
2月6日	男女共同参画推進センター(TUMUG)ニュースレター2号発行	支援推進体制
2月16日	出張セミナー 青森県立三本木高等学校	次世代支援
3月4日	出張セミナー 仙台白百合学園中学・高等学校	次世代支援
3月10日	男女共同参画推進センターリーフレット発行	支援推進体制
3月14日	SA活動報告会	次世代支援
3月17日	出張セミナー 仙台市立仙台高等学校	次世代支援
3月末予定	男女共同参画推進センターリーフレット(英語版)発行	支援推進体制
3月末予定	男女共同参画推進センター看板設置	支援推進体制

学外での活動（講演・調査・評価委員）

5月31日	国立情報学研究所「高校生のためのキャリアプランニング」基調講演	大隅 典子
8月19日	平成26年度サイエンス・リーダーズ・キャンプ	田中 真美
8月30日	小児内分泌女性医師を応援する会	大隅 典子
11月2日	日本女医会第8回キャリアシンポジウム「東北大学サイエンス・エンジェル活動紹介」	大隅 典子

12月12日	日本工学アカデミー北海道・東北支部講演会	田中 真美
12月25日	「バッファリングによる女性研究者養成の加速」外部評価委員会(熊本大学)	田中 真美
1月13日	「いわての復興に貢献する女性研究者支援」外部評価委員会(岩手大学)	田中 真美
1月26日	「バッファリングによる女性研究者の加速」総括シンポジウム 総合討論～女性研究者をとりまく現状と未来～(熊本大学)	米永 一郎
2月17日	千葉大学理系女性研究者キャリア支援プログラム総括シンポジウム～5年間の成果と千葉大学における女性研究支援の発展(つねに、より高きものをめざして)～(千葉大学)	田中 真美
3月8日	女性研究者研究活動支援事業キックオフシンポジウム「前へ！明治大学の男女共同参画」「学術における男女共同参画——東北大学の事例をもとに」(明治大学)	大隅 典子
3月23日	「伝統と改革が創る次世代女性研究者育成拠点」外部評価委員会(奈良女子大学)	田中 真美

学内での活動（講演・調査）

6月19日	平成26農学部・農学研究科教職員研修「東北大学男女共同参画の取り組みについて」	田中 真美
10月16日	大学院生が将来を切り開くために「次世代育成プログラム」	橋爪 圭
1月13日	女子大学院生ネットワーク形成と次世代支援 ～東北大学サイエンス・エンジェル活動の紹介	橋爪 圭

男女共同参画推進センターへの来訪

10月3日	フランシス・デ＝スーザ英国上院議長センター来訪
11月7日	駐日ノルウェー王国リーメスタ大使センター来訪
12月10日	ノースキャロライナ大学教授の前田信代先生(1977年東北大学 理学博士取得)、Oliver Smithies 先生(2007年ノーベル生理学医学賞受賞)ご夫妻来訪

取材/報道

6月21日	河北新報16面「男女共同参画推進『沢柳記念賞』東北大が創設」	新聞掲載
7月14日	読売新聞「学問の男女共同参画賞を創設」	新聞掲載
7月31日	オープンキャンパス for 女子高校生 2014 についてニコニコ動画取材	報道
8月9日	河北新報17面「愛称・ロゴマーク募集」	新聞掲載
9月7日	読売新聞18面「『学びたい』を応援/読売教育ネットワーク10月創設」	新聞掲載
11月11日	TBS 別冊アサ秘ジャーナル「東北大学紹介」	報道
11月23日	河北新報「共同参画あり方探る 東北大で29日シンポジウム」	新聞掲載

男女共同参画推進センターの活動について

(1) 第1回沢柳フェローとのランチミーティング

○ 日時・場所

2014年5月20日(火) 12:00-13:30

片平北門会館2Fセリシール

○ 活動概要

女性リーダー育成の一環とし、沢柳フェローである大隅典子教授、栗原和枝教授、永次史教授を囲んで女性研究者が集い昼食を取りながらミーティングが行われた。参加者は22名であった。

「男女共同参画推進センター」設立の報告、女性研究者の自己紹介が行われた。若手研究者からは支援への感謝の言葉や相談ごとが寄せられ、経験者からの体験談やアドバイスを参考にしていた。

(2) オープンキャンパス for 女子高校生 2014

○ 日時・場所

2014年7月30日(水)・31日(木) 12:00-13:30

理学研究科合同A棟 第3共通講義室(204号室・205号室)

○ 活動概要

本学オープンキャンパスにおいて、男女共同参画推進センター主催イベント「オープンキャンパスfor女子高校生2014」を若手女性研究者とサイエンス・エンジェルの合同で2日間開催した。1日目は、山田香織(薬学D1)による「世界最小のものづくり〜くすりの“種”をめざして〜」・出浦桃子助教による「結晶成長の科学〜多分野の融合〜」というタイトルで講演が行われ、2日目は三浦佳奈(生命D1)による「植物の不思議に魅せられて」・佃悠助教による「使う人から建築を考える」というタイトルで講演が行われた。両日ともその後、SAとの進路相談会、女性研究者によるポスター発表を行った。参加者は1日目約100名、2日目約50名となり大変盛況のもと終了することができた。女子高校生の内訳として、昨年同様、県外からの参加者が8割あり、全国から参加している様子がうかがえた。

(3) 外部資金獲得セミナー／第2回沢柳フェローとのランチミーティング

○ 日時・場所

2014年9月3日(水) 12:00-13:30

片平北門会館2Fセリシール

○ 活動概要

女性リーダー育成の一環とし、沢柳フェローである小谷元子教授、田中真美教授、杉本亜砂子教授、永次史教授を囲んで女性研究者が集いランチミーティングが行われた。参加者は17名であった。永次史教授の司会進行のもと女性研究者の方一人ずつ自己紹介が行われた。最初に、小谷元子教授より、書類審査の科研費では異分野融合の研究は採択が難しい。ディスカッションを大事にしたものとして、内閣府特別予算「科学技術イノベーション総合戦略2014」についての紹介があった。その後、参加者より科研費をはじめとする外部資金獲得について質問が挙がり、適宜、沢柳フェローから「申請書のチェックは分野の違う先生にも目を通していただく」、「出願分野の選択方法(基盤または萌芽どちらに出すのが良いか、他にどんな選択肢があるか)」など具体的な助言があった。会終了後も個人的にアドバイスを求める姿もあり、若手の女性研究者の方々は大変参考になっていたようである。

(4) 高度教養教育・学生支援機構主催「教育関係共同利用拠点プログラム」開講の案内

○ 日時・場所

2014年4月～2015年3月

川内キャンパス マルチメディア教育研究棟ほか

○ 活動概要

女性リーダー育成プログラムの一環で、大学教育支援センター主催「教育関係共同利用拠点提供プログラム(PDプログラム)」の開講を受け、本プログラムの主旨に一致するものとして、女性研究者への案内を行った。

(5) 国際高等研究教育機構国際高等研究教育院主催「融合領域研究合同講義」開講の案内

○ 日時・場所

2014年10月8日(水)～2015年1月28日(水)

青葉山キャンパス 学際科学国際高等研究センター 大セミナー室

○ 活動概要

女性リーダー育成プログラムの一環で、国際高等研究教育機構主催「融合領域研究合同講義」の開講を受け、本プログラムの主旨に一致するものとして、女性研究者への案内を行った。

(6) 女性研究者研究活動支援事業 合同公開シンポジウム「女性研究者支援とダイバシティ・マネジメント」(参加)

○ 日時・場所

2014年11月26日(水) 13:15～17:10(9:30～12:00分科会)

一橋講堂(東京)

○ 活動概要

文部科学省科学技術人材育成費補助事業の採択大学等83機関が集まり、合同公開シンポジウムが行われた。午前は、テーマ別(A両立支援、B意識改革、Cポジティブ・アクション、D研究力向上・リーダーシップ育成、E次世代育成、F連携・ネットワーク構築)の6グループに分かれ、機関の担当者によるディスカッションが行われた。田中真美教授は、D研究力向上・リーダーシップ育成の座長をつとめた。午後は、文部科学省より来年度の事業概要説明があり、続いて、橋本考之氏(日本IBM株式会社会長)による基調講演、前田芳實氏(鹿児島大学学長)による特別講演があった。講演後には分科会の報告が各座長より行われた。

(7) 女性研究者のためのメディア対応セミナー／第3回沢柳フェローとのランチミーティング

○ 日時・場所

2014年12月16日(火) 11:00～13:00

片平北門会館2Fセリシール

○ 活動概要

女性リーダー育成の一環として、「女性研究者のためのメディア対応セミナー」が行われた。初めに、当センター助手橋爪圭より、挨拶と会の趣旨説明があった。講師である小林由夏氏(株式会社博報堂、PR戦略局 PRディレクター／広報コンサルタント)より、主にテレビ取材の際の具体的なノウハウをお話いただいた。参加者からは「概要から小さなポイントまでの説明でとても参考になりました」、「わかりやすく「使える」テクニックを本当にしっかりと話されていて、とても面白かったです」などの感想をいただいた。参加者は来場者26名及びセンター4名の合計30名であった。最後に大隅典子教授より閉会の挨拶が行われた。セミナー後、講師と沢柳フェローである、大隅典子教授、杉本亜砂子教授、吉沢豊子教授を囲んで女性研究者が集

い軽食を取りながら茶話会が行われた。メディア対応や写真の有効利用について大隅典子教授より助言があった。参加者はセンター員含め14名であった。

(8) 男女共同参画推進センター(TUMUG)ニュースレター発刊

○ 日時・場所

2014年8月・12月・2015年2月

○ 活動概要

当センターで、実施しているさまざまな取組や支援制度の情報などを知らせるため、ニュースレターを年に数回発刊し、教職員に配布することとなった。0号ではセンターの愛称・ロゴマークの募集をした。1号ではセンター長、副センター長より挨拶文、シンポジウムの報告などを掲載した。2号では支援制度の募集、制度利用者の声を掲載した。

サイエンス・エンジェルによる活動について

(1) オリエンテーション

○ 日時・場所

2014年6月7日(土)13:00-16:00

エクステンション教育研究棟1階 部局長会議室

○ 活動概要

第一部

SA 自己紹介、スタッフの紹介、平成25年度活動紹介(オープンキャンパス、出張セミナー、体験型科学イベントへの参加)、SA 活動に関する注意事項、勤務に関する事務手続きの説明。

第二部

千田はるか氏(復興庁宮城復興局総括班主査・SAOG)講演、SA 交流会(SA 輝友会)

○ 参加者

米永一郎(金属材料研究所教授)、倉田祥一郎(薬学研究科教授)

参加人数はSA56名(うち3名ボランティア)、関係者8名他、合計64名であった。

(2) 「学都「仙台・宮城」サイエンス・デイ2014」

○ 日時・場所

2014年7月20日(日)9:00-16:00

カタールフレンド基金ホール

○ 活動概要

東北大学工学系女性研究者育成支援推進室(ALicE)と共催で、NPO 法人 natural science 主催による「学都「仙台・宮城」サイエンス・デイ2014」に出展した。企画名は「サイエンデイ for ガールズ ～ちくちく縫って LED が光るかわいい小物づくり～」とし、導電性(電気を通す素材)の糸をちくちく縫うことで LED がぴかぴか光るように配線し、布やいろいろなデコレーション素材を使って、小物を作る工作を行った。形式は事前申込制による、講座制(各回約40名、2回実施)とした。受講者数は80名、保護者・見学の方も含めると120名以上であった。

○ 参加者

SA:小池咲綾(医学系D1)、井上麻衣(医学系M2)、高橋遙茄(医学系M2)、森田亜由美(医学系M2)、藍川志津(薬学D1)、大槻紗恵(薬学M2)、倉田未紗稀(薬学M2)、駒場加奈枝(薬学M2)、石川玲美(工学M1)、滝沢翠里(工学M1)、多田明日翔(農学M1)、三浦佳奈(生命D1)、滝

浦舞(生命M2)、佐藤舞子(医工学M1)、五十嵐千裕(理学M1)、古樫加奈子(理学M1)、住岡沙羅(工学M2)、鈴木優里(農学M2)、福井友里子(生命M1)
瀬戸文美(ALicE)

(3) 日本が誇るマテリアルの世界「材料フェスタ in 仙台」

○ 日時・場所

2014年7月29日(火)10:00-14:00

仙台国際センター

○ 活動概要

産業技術総合研究所、東北大学、物質・材料研究機構主催による、日本が誇るマテリアルの世界「材料フェスタ in 仙台」に出展した。企画名は「科学で HAPPY な未来へ」とし、高校生を対象として「燃料電池自動車の未来」、「情報ネットワークの未来」、「クオリティ・オブ・ライフ の 未来」と題した3件の講演を行った後、「20年後の未来を考えよう…」をテーマとしてグループワークを実施した。グループワーク参加人数は25名で、イベント全体を通じての来場者は、2,640名であった。

○ 参加者

SA:堀亜紀(薬学M2)、龍剣蘭(歯学D2)、岡部恵美子(農学M2)、今野倫子(工学M2)、阿部彰子(生命D2)、佐藤舞子(医工学M1)、長谷川蒔(医工学M1)

(4) オープンキャンパス for 女子高校生 2014

○ 日時・場所

2014年7月30日(水)、31日(木)12:00-13:30

理学研究科合同A棟 第3 共通講義室(204 号室、205 号室)

○ 活動概要

今年で9回目の実施。従来、1日しか実施していなかったが今年度は若手女性研究者と合同で2日にわたって、理系進学を志す女子高校生の進路選択の一助として開催した。両日とも 15 分程度の講演を前半に2つ実施し、後半ではSAとの進路相談会と若手女性研究者によるキャリア・研究紹介を行った。1日目は、山田香織による「世界最小のものづくり～くすりの“種”をめざして～」と出浦桃子助教(金属材料研究所)による「結晶成長の科学～多分野の融合～」という講演が行われ、2日目は三浦佳奈による「植物の不思議に魅せられて」と佃悠助教(工学研究科)による「使う人から建築を考える」という講演が行われた。

来場者は、女子高校生及び保護者を合わせて、1日目およそ100名、2日目およそ50名であった。2日目はイベント開始時に激しい雷雨があったため、来場者が少なくなった。女子高校生の内訳として、昨年同様、県外からの参加者が8割あり、全国から参加している様子がうかがえた。

○ 参加者

SA:【コア】久保有美子(医学系D3)、津幡真理(医学系M2)、倉田未紗稀(薬学M2)、駒場加奈枝(薬学M2)、今野倫子(工学M2)、佐藤希(工学M2)、三浦佳奈(生命D1)、滝浦舞(生命M2)、馬場史織(環境M2)、沼賀菜々美(環境M1)、佐藤舞子(医工学M1)

【サポート】小澤友美(理学D1)、小池咲綾(医学系D1)、高橋遥茄(医学系M2)、森田亜由美(医学M2)、藍川志津(薬学D1)、山田香織(薬学D1)、堀亜紀(薬学M2)、末永美樹(工学M2)、石川玲美(工学M1)、滝沢翠里(工学M1)、安西沙織(農学M1)、多田明日翔(農学M1)、阿部彰子(生命D2)、山本明音(生命M2)、森岡真代(理学D1)、五十嵐千裕(理学M1)、古樫加奈子(理学M1)、所悠香(理学M1)、龍剣蘭(歯学D2)、石川桃子(工学M2)、住岡沙羅(工学M2)、板谷奈波(農学M2)、岡部恵美子(農学M2)、鈴木優里(農学M2)、坪野真由美(生命M2)、大

山結香(生命M1)、佐藤恵莉子(生命M1)、中村咲耶(生命M1)、宮林彩智子(生命M1)、朝木美帆(環境M1)、長谷川蒔(医工学M1)、藤林里瑛(医工学M1)、山田あずさ(医工学M1)

【講演】三浦佳奈(生命D1)、山田香織(薬学D1)

【ポスター】佐藤希(工学M2)

【司会】津幡真理(医学M2)、馬場史織(環境M2)、倉田未紗稀(薬学M2)、佐藤希(工学M2)

若手女性研究者:【講演】出浦桃子(金研助教)、佃悠(工学助教)

【ポスター発表】星野由美(農学助教)、李淵(工学助教)、永村直佳(多元研助教)、升谷敦子(環境助教)、井上奈穂(農学助教)、土岐文乃(工学助教)

(5) 2014 夏休みサイエンススクエアへの出展

○ 日時・場所

2014年8月9日(土)、10日(日)9:00-18:00

国立科学博物館(東京)

○ 活動概要

独立行政法人国立科学博物館主催による、小学生から一般を対象とした「2014 夏休みサイエンススクエア」(7月29日-8月17日)に出展した。SAらは、9日(土)、10日(日)の2日間出展し、「ぴかぴか光るグリーンカードをつくろうサイエンス・エンジェルと光の冒険」を企画・実施した。また、当日は、関東在住の SAOG9名(浅野晴香氏、八木橋奈央氏、浅野成美氏、加藤彩氏、松田詩穂氏、外石安佑子氏、那花美奈氏、須藤彰子氏、八巻淳子氏)がボランティアとして参加し、サポートした。2日間の来場者は保護者を含め約82名であった。

○ 参加者

SA:今野倫子(工学M2)、鈴木優里(農学M2)、馬場詩織(環境M2)

(6) 楽しい理科のはなし 2014～不思議の箱を開けよう～への出展

○ 日時・場所

2014年8月21日(木)9:00-18:00

東京エレクトロンホール宮城 6階(仙台)

○ 活動概要

広報課の依頼により、河北新報社、東京エレクトロン宮城の主催による「楽しい理科のはなし 2013～不思議の箱を開けよう～」へ出展を行った。平成21年より今年で5回目の出展となった。SAは、「サイエンス・エンジェルと学ぼう ～科学のふしぎ～」というタイトルで、4つの体験型の実験教室(「ひんやりサイエンス」、「標本を見てみよう! ームクゲ、ミジンコ、マウスの赤ちゃんー」、「最先端研究をのぞいてみよう ーヒトとショウジョウバエの共通性を利用した研究ー」、「オレンジパワーでスタンプを作ろう!」)を実施した。小学校低学年以下の参加者を中心に、親子連れのイベント全体で約2,000名が来場した。約500名が実験教室に参加した。

○ 参加者

SA:五十嵐千裕(理学M1)、古樫加奈子(理学M1)、高橋遥茄(医学M2)、津幡真理(医学系M2)、大槻紗恵(薬学M2)、倉田未紗稀(薬学M2)、駒場加奈枝(薬学M2)、堀亜紀(薬学M2)、岡部恵美子(農学M2)、鈴木優里(農学M2)、石川玲美(工学M1)、三浦佳奈(生命D1)、山本明音(生命M2)

(7) 第12回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムへのSAの参加

○ 日時・場所

2014年10月4日(土) 10:00～17:45

東京大学駒場キャンパス(東京)

○ 活動概要

男女共同参画学協会連絡会主催、東京大学共催、内閣府男女共同参画局、文部科学省、厚生労働省、経済産業省、日本学術会議、科学技術振興機構後援による、第12回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム「女性研究者・技術者を育む土壌 ～連携・融合による支援をめざして～」に、SA3名が参加した。ポスターセッションにおいて、東北大学の男女共同参画推進への取組の紹介を行った。

○ 参加者

SA:菊地まどか(医学系 M2)、森田亜由美(医学系 M2)、高根侑美(医学系 D4)

(8) サイエンスアゴラ 2014 への出展

○ 日時・場所

2014年11月8日(土)、11月9日(日)10:00～17:00(両日とも)

日本科学未来館(東京)

○ 活動概要

独立行政法人科学技術振興機構(JST)主催による「サイエンスアゴラ2014」へ出展し、SA 活動の紹介、SA 輝友会の活動紹介の展示を行い、理系進路選択の経験や自身の研究を通して最先端の科学技術を紹介し、また、女子学生が考える『あったらいいなの科学技術』のアンケート展示を通して、来場者へもアイデアを募ると共に、小学生から大人まで科学に親しむことができるよう、双方向のコミュニケーション活動として、サイエンスをイメージしたモビール工作を実施した。SAOG8名(阿部ちひろ氏、佐藤由佳氏、神山千穂氏、浅野晴香氏、須藤彰子氏、大橋裕美氏、加藤彩氏、松田詩穂氏)にもご協力頂いた。当日は、高校生、高校教員、科学イベント実施者、一般、そして、サイエンス・エンジェルOGらが見学に訪れ、担当SAらが自らの研究紹介、大学紹介、学生生活など資料を活用して説明を行った。ブース来場者は親子連れ含め約100名であった。

○ 参加者

SA:山田香織(薬学 D1)、岡部恵美子(農学 M2)

(9) 第11回東北大学男女共同参画シンポジウムへのSAの参加

○ 日時・場所

2014年11月29日(土) 13:00～17:10

片平さくらホール

○ 活動概要

東北大学・東北大学男女共同参画委員会が主催し、第11回東北大学男女共同参画シンポジウムが開催され、サイエンス・エンジェル(SA)32名(うち2名SAボランティア)が出席し、レポートを提出した。

(10) 出張セミナー

1) 秋田県立秋田南高等学校

○ 日時

2014年6月26日(木)13:00－16:00

○ 活動概要

秋田県立秋田南高等学校より、東北大学志願者のための学部学科ガイダンスの講師として出張セミナーの依頼を受け、高校2・3年生を対象にSAが講義を行った。各々が希望する学部学科を2つ選択し、8学部学科に分かれて講演を聴講する形式で行われた。松本郁美(医学系 M1)は「東北大学「学部学科ガイダンス」－医学部・保健学科－」というタイトルで、自分の現在までの進路選択の経歴を踏まえて講演を行った。参加者は5校時・6校時合わせて、高校生約106名、教員ら11名の合計117名であった。

2) 茨城県立竜ヶ崎第一高等学校

○ 日時

2014年9月5日(金)13:30－17:30

2014年9月6日(土)13:00－15:00

○ 活動概要

茨城県立竜ヶ崎第一高等学校では、平成 22 年度よりいばらき版サイエンスハイスクール事業モデル校として医学部(医学科)及び難関理工系大学への進学者数増加を推進している。そこで、理工系進路選択のロールモデルとして進路選択の一助として出張セミナーの依頼を受け、本センター助手の橋爪圭と2名のSAが講義を行った。本年度で5回目の依頼となる。2日間にわたって実施し、1日目は助手の橋爪圭による講演「理系女子の魅力」、2日目は三浦佳奈(生命 D1)が「植物の不思議に魅せられて」、住岡沙羅(工学 M2)が「化学と宇宙とモノづくり」というタイトルで、進路選択の過程や研究紹介の講演を行った。1日目は高校生24名、教職員10名の計34名、2日目は高校生24名、教職員6名の計30名が参加した。

3) 村山市立楯岡中学校

○ 日時

2014年9月11日(木)9:30－12:00

○ 活動概要

村山市立楯岡中学校より中学校 3 年生の進路学習の一環として施設見学や授業参観、模擬授業などの依頼を受け、カタールフレンド基金ホール(青葉山キャンパス)にて実施した。各SAの自己紹介の後、東北大学についての紹介と研究紹介(「よりよい「がん医療」とは?」)、科学分野についてのクイズ大会を行った。参加者は中学生84名、教員5名、SA5名を含め94名であった。

4) 宮城県宮城第一高等学校

○ 日時

2014年10月16日(木)13:00－15:00

○ 活動概要

昨年度に引き続き宮城第一高等学校にて主催している「ミヤイチ☆キャンパスⅡ」の講師としての依頼を受け6名のSA(所悠香(理学 M1)、堀亜紀(薬学 M2)、津幡真理(医学 M2)、岡部恵美子(農学 M2)、石井彩子(工学 D1)、藤林里瑛(医工学 M1))が講演した。2名ずつ3班に分かれて同時進行する形式で、研究紹介、大学紹介の講演を行った。参加者は理数科の高校1年生78名であった。

5) 山形県立山形西高等学校

○ 日時

2014年10月18日(土)9:00-14:00

カタールフレンド基金ホール

○ 活動概要

山形県立山形西高等学校は「山形の未来をリードする人材育成事業」を行っている。理系進路選択の一助として、同校より研究室見学、出張セミナー、座談会開催の依頼を受け、SAが研究室案内と講演を行った。午前に3班に分かれ3つの研究室を訪問し、午後は、森岡真代(理学 D1)が「天文女子にいたるまで」というタイトルで、つづいて石川玲美(工学 M1)が「工学がリハビリを変える！？～医工学に魅せられて～」というタイトルで講演した。その後、高校生と座談会を行った。参加者は高校生、教員、SA(小澤友美(理学 D1)、倉田未紗稀(薬学 M2)、駒場加奈枝(薬学 M2)、堀亜紀(薬学 M2)、ナスンムク(農学 D2)、成田佳寿美(農学 M1)、板谷奈波(農学 M2)、金ななせ(農学 M1)、住岡沙羅(工学 M2)、三浦佳奈(生命 D1)、山田あずさ(医工学 M1))ら含めおよそ33名であった。

6) 山形県立山形東高等学校

○ 日時

2014年11月15日(土)13:30-15:30

○ 活動概要

理系志望の高校2年生を主な対象とした多様な理系進路選択紹介としての講師としてSAが研究紹介及びパネルディスカッションを行った。パネルディスカッションでは、大学生活、卒業後の進路選択などについて紹介を行い、質問シートを活用して、質疑応答を行った。参加者はSA4名(植松未知(農学 M2)、佐藤悠子(医学系 D3)、住岡沙羅(工学 M2)、山本明音(生命 M2))、教員2名を含め、合計50名であった。

7) 宮城県宮城第一高等学校

○ 日時

2015年1月22日(木)13:00-15:00

○ 活動概要

宮城第一高等学校にて主催している「ミヤイチ☆キャンパスⅢ」の講師としての依頼を受け6名のSA(森田亜由美(医学系 M2)、堀亜紀(薬学 M2)、石川玲美(工学 M1)、森岡真代(理学 D1)、鈴木優里(農学 M2)、藤林里瑛(医工学 M1))が講演した。本セミナーは2年次課題研究発表会に向けて、研究の成果を発表する際に必要となるプレゼンテーション技術について学ぶことを目的として実施した。SAが2名ずつ3班に分かれて同時進行する形式で、研究発表を行った。参加者は理数科の高校2年生80名であった。

8) 青森県立三本木高等学校

○ 日時

2015年2月16日(月)15:00-17:30

○ 活動概要

昨年度に引き続き、スーパーサイエンスハイスクール(SSH)指定校である青森県立三本木高等学校より出張セミナーの依頼を受けSAが高校2年生(理系クラス)を対象に、研究紹介、大学紹介などの講演を行った。5つの部屋にSA(松本郁美(医学系 M1)、山田香織(薬学 M2)、沼賀奈々美(環境

M1)、福井友里子(生命 M1))が1人ずつ入り、高校生が希望する講義を選択し受講した。参加者は高校生、高校の先生方、SA、関係者を含め、合計約100名であった。

9) 仙台白百合学園中学・高等学校

○ 日時

2015年3月4日(水)13:30-15:20

○ 活動概要

昨年に引き続き、仙台白百合学園中学・高等学校で中学3年生及び理系志望の高校2年生を対象にした出張セミナーを行った。三浦加奈(生命科学 D1)は「植物の不思議に魅せられて」というタイトルで、菅井千奈美(医学系 D4)は「まわり道でも大丈夫」というタイトルで、大学での研究の内容や面白み、高校生活の過ごし方について講演した。参加者は中学3年生114名、高校2年生36名、他合計150名であった。

10) 仙台市立仙台高等学校

○ 日時

2015年3月17日(火)8:50-9:50

○ 活動概要

第2学年を対象とした「卒業生体験談&進路ガイダンス～卒業生、大学院生、学部生の話聞いて進路決定に役立てる～」にて理系学習進路希望者を対象に講演した。森岡真代(理学 D1)は「天文女子への道のり」というタイトルで、菊地まどか(医学系 M2)は「進路選択にあたって」というタイトルで、学部・学科を決めたきっかけや高校時代の思い出等について講演した。参加者は理系進路希望者約80名であった。

平成26年度男女共同参画・女性研究者支援事業について

女性研究者の育児と仕事の両立及び女性リーダーの育成を目的として、下記 7 つの支援制度を実施した。

1 研究支援要員

子供を持つ自然科学系女性研究者が出産、育児等を理由に研究を断念することがないように、研究と育児を両立させることを目的として、研究支援要員(時間雇用職員)を雇用する人件費の一部補助を行う。(上限 200 万円)

<平成 26 年度採択者>

No	部局	職名	氏名
1	医学系研究科	准教授	金子 美華
2	医学系研究科	助教	柴原 裕紀子
3	薬学研究科	助教	鈴木 登紀子
4	薬学研究科	助教	巻出 久美子
5	工学研究科	助教	ガヴァンスキ 江梨
6	病院	助教	館脇(佐藤) 康子
7	病院	助教	森 菜緒子
8	原子分子材料科学高等研究機構	准教授	林 育菁

2 研究支援要員(シェア型)

子供を持つ自然科学系女性研究者が出産、育児等を理由に研究を断念することがないように、研究と育児を両立させることを目的として、男女共同参画推進センターより事務補佐員を派遣する(採択者同士で事務補佐員 1 名をシェア)。

<平成 26 年度採択者>

No	部局	職名	氏名
1	工学研究科	助教	安孫子 聡子
2	情報科学研究科	講師	坂田 邦子

3 ベビーシッター利用料等補助

子供を持つ研究者が出産・育児等を理由に研究を断念することがないように、研究と育児を両立させることを目的として、ベビーシッターや託児室の利用料等を補助する。(上限 10 万円)

<平成 26 年度採択者>

No	部局	職名	氏名
1	文学研究科	准教授	甲田 直美
2	文学研究科	専門研究員	泉 啓
3	文学研究科	D1	アサノワ・グリザル
4	法学研究科	准教授	森田 果

5	理学研究科	助教	藤野 智子
6	医学系研究科	D3	菅井 千奈美
7	医学系研究科	D3	久保 有美子
8	医学系研究科	D2	佐藤 悠子
9	歯学研究科	D3	滝澤 愛子
10	工学研究科	助教	ガヴァンスキ 江梨
11	工学研究科	助教	安孫子 聡子
12	農学研究科	准教授	米澤 千夏
13	農学研究科	研究支援者	尾間 由佳子
14	農学研究科	助教	阿部(後藤)知子
15	情報科学研究科	准教授	福泉 麗佳
16	生命科学研究科	学振特別研究員	小林 知里
17	生命科学研究科	特別研究員	大野 ゆかり
18	流体科学研究所	准教授	伊賀 由佳
19	流体科学研究所	研究支援者	横山 茉代
20	加齢医学研究所	研究支援者	渡邊 怜子
21	東北大学病院	助手	橋本 純子
22	原子分子材料科学高等研究機構	准教授	林 育菁
23	東北メディカル・メガバンク機構	助教	小林 朋子
24	東北メディカル・メガバンク機構	助教	成相 直樹
25	多元物質科学研究所	准教授	桐島 陽
26	災害科学国際研究所	准教授	有働 恵子
27	工学研究科	助教	菊池 圭子
28	理学研究科	助教	板 由房

4 スタートアップ研究費

世界トップリーダーとなるような広い学問領域を見渡せる女性リーダーの育成を目的として、新規採用の女性研究者へスタートアップ研究費を支援する。(採用1年目:上限100万円、採用2年目:50万円)

<平成26年度採択者>

No	区分	部局	職名	氏名
1	1年目	経済学研究科	准教授	金 熙珍
2	1年目	生命科学研究科	助教	一刀 かおり
3	1年目	病院	助教	坂田 佳子
4	2年目	金属材料研究所	助教	出浦 桃子
5	2年目	工学研究科	助教	土岐 文乃
6	2年目	理学研究科	助教	高柳 栄子

5 研究スキルアップ経費

世界トップリーダーとなるような広い学問領域を見渡せる女性リーダーの育成を目的として、研究スキルアップ経費として平成26年5月1日～平成27年3月31日の期間に開催される会議、シンポジウム、研究会等へ参加する女性研究者に、旅費、登録料、論文校閲費等の一部を支給する。年2回。(海外の場合:上限40万円、国内の場合:上限15万円)

<平成26年度採択者(1回目)>

No	区分	部局	職名	氏名
1	国外	薬学研究科	講師	吉田 浩子
2	国外	工学研究科	助教	王 晶
3	国外	農学研究科	助教	井上 奈穂
4	国外	農学研究科	准教授	米澤 千夏
5	国外	農学研究科	助教	星野 由美
6	国外	流体科学研究所	准教授	伊賀 由佳
7	国外	流体科学研究所	講師	竹島 由里子
8	国外	電気通信研究所	助教	大谷 智子
9	国外	多元物質科学研究所	助教	宇井 美穂子
10	国外	病院	助教	坂田 佳子
11	国外	理学研究科	准教授	Izabela Rzeznicka Irena
12	国内	工学研究科	助教	林 久美子
13	国内	多元物質科学研究所	助教	西本 一恵
14	国内	病院	助教	加藤 裕美子

<平成26年度採択者(2回目)>

No	区分	部局	職名	氏名
1	国外	歯学研究科	研究助教	福島 梓
2	国外	文学研究科	准教授	芳賀 京子
3	国外	経済学研究科	准教授	井深 陽子
4	国外	情報科学研究科	助教	西 羽美
5	国外	農学研究科	助教	星野 由美
6	国外	加齢医学研究所	助教	田口 恵子
7	国外	東北アジア化研究センター	特任助教	前田 しほ
8	国外	学際科学フロンティア研究所	助教	木罵 英恵
9	国外	災害科学国際研究所	助教	Carine J. Yi
10	国内	薬学研究科	助教	鈴木 登紀子
11	国内	多元物質科学研究所	助教	永村 直佳
12	国内	医学系研究科	助教	大寺 雅子
13	国内	農学研究科	助教	日出間 志寿
14	国内	農学研究科	助教	井上 奈穂
15	国内	多元物質科学研究所	助教	西本 一恵
16	国内	病院	助教	菊地 紗耶
17	国内	工学研究科	助教	ガヴァンスキ 江梨

6 サイエンス・エンジェル

次世代の女性研究者の育成補助、並びに自然科学研究に従事する使命・責任感を深めさせることを目的として、自然科学系部局に在籍する大学院女子学生をサイエンス・エンジェルとして任命し、中高生を対象とした次世代育成活動を行う。

<平成 26 年度採択者>

No	部局	学年	氏名
1	理学研究科	D1	小澤 友美
2	医学系研究科	D3	久保 有美子
3	医学系研究科	D3	櫻井 美奈子
4	医学系研究科	D1	小池 咲綾
5	医学系研究科	M2	井上 麻衣
6	医学系研究科	M2	菊地 まどか
7	医学系研究科	M2	高橋 遥茄
8	医学系研究科	M2	津幡 真理
9	医学系研究科	M2	森田 亜由美
10	薬学研究科	D1	藍川 志津
11	薬学研究科	D1	川又 綾乃
12	薬学研究科	D1	山田 香織
13	薬学研究科	M2	大槻 紗恵
14	薬学研究科	M2	倉田 未紗稀
15	薬学研究科	M2	駒場 加奈枝
16	薬学研究科	M2	堀 亜紀
17	工学研究科	M2	今野 倫子
18	工学研究科	M2	佐藤 希
19	工学研究科	M2	末永 美樹
20	工学研究科	M1	石川 玲美
21	工学研究科	M1	滝沢 翠里
22	工学研究科	M1	長谷川 美佳
23	農学研究科	D2	慧 慧
24	農学研究科	M2	植松 未知
25	農学研究科	M2	鈴木 はるか
26	農学研究科	M1	安西 沙織
27	農学研究科	M1	多田 明日翔
28	農学研究科	M1	成田 佳寿美
29	生命科学研究科	D2	阿部 彰子
30	生命科学研究科	D1	三浦 佳奈
31	生命科学研究科	M2	後藤 由貴
32	生命科学研究科	M2	鈴木 朋代
33	生命科学研究科	M2	滝浦 舞
34	生命科学研究科	M2	田口 翠
35	生命科学研究科	M2	山本 明音
36	環境科学研究科	M2	馬場 史織
37	環境科学研究科	M1	沼賀 菜々美

38	医工学研究科	M1	佐藤 舞子
39	理学研究科	D1	森岡 真代
40	理学研究科	M2	菅井 祥加
41	理学研究科	M2	千葉 理絵
42	理学研究科	M1	五十嵐 千裕
43	理学研究科	M1	古樫 加奈子
44	理学研究科	M1	所 悠香
45	理学研究科	M1	渡邊 あゆ美
46	医学系研究科	D4	菅井 千奈美
47	医学系研究科	D3	佐藤 悠子
48	医学系研究科	M1	松本 郁美
49	歯学研究科	D3	柴本 彩
50	歯学研究科	D2	龍 剣蘭
51	歯学研究科	D1	佐藤 愛美加
52	歯学研究科	D1	宮下 牧子
53	工学研究科	M2	石川 桃子
54	工学研究科	M2	住岡 沙羅
55	農学研究科	M2	板谷 奈波
56	農学研究科	M2	岡部 恵美子
57	農学研究科	M2	鈴木 優里
58	農学研究科	M1	金 ななせ
59	生命科学研究科	M2	坪野 真由美
60	生命科学研究科	M1	大山 結香
61	生命科学研究科	M1	佐藤 恵莉子
62	生命科学研究科	M1	中村 咲耶
63	生命科学研究科	M1	福井 友里子
64	生命科学研究科	M1	宮林 彩智子
65	環境科学研究科	M1	朝木 美帆
66	医工学研究科	M1	長谷川 蒔
67	医工学研究科	M1	藤林 里瑛
68	医工学研究科	M1	山田 あずさ
69	工学研究科	D1	石井 彩子
70	理学研究科	M2	平田 萌々子
71	医学系研究科	D4	高根 侑美

7 仙台 I ゾンタクラブ東北大学女子学生海外渡航支援

海外において開催される国際学会等で研究発表を行う大学院女子学生を対象として、その渡航に係る費用を支援する。(上限 15 万円)

<平成 26 年度採択者>

No	部局	学年	氏名
1	医工学研究科	M1	塩谷 真帆
2	医学系研究科	D3	久保 有美子

6. 平成26年度男女共同参画委員会委員名簿

平成 26 年 4 月

◎ 理事（総務・国際展開・事務統括担当）		植 木 俊 哉
総長特別補佐（男女共同参画担当）		大 隅 典 子
文 学 研 究 科 教 授		沼 崎 一 郎
教 育 学 研 究 科 教 授		有 本 昌 弘
法 学 研 究 科 准教授		石 綿 は る 美
経 済 学 研 究 科 准教授		千 木 良 弘 明
理 学 研 究 科 教 授		寺 田 眞 浩
医 学 系 研 究 科 教 授		朝 倉 京 子
歯 学 研 究 科 教 授		山 本 照 子
薬 学 研 究 科 准教授		高 橋 信 行
工 学 研 究 科 教 授		斎 藤 浩 海
農 学 研 究 科 教 授		磯 貝 恵 美 子
国 際 文 化 研 究 科 教 授		佐 藤 透
情 報 科 学 研 究 科 准教授		全 眞 嬉
生 命 科 学 研 究 科 教 授		山 口 信 次 郎
環 境 科 学 研 究 科 教 授		壹 岐 伸 彦
○ 医 工 学 研 究 科 教 授		田 中 真 美
教 育 情 報 学 研 究 部 教 授		村 木 英 治
○ 金 属 材 料 研 究 所 教 授		米 永 一 郎
加 齢 医 学 研 究 所 准教授		井 川 俊 太 郎
流 体 科 学 研 究 所 准教授		小 宮 敦 樹
電 気 通 信 研 究 所 准教授		坂 本 修 一
多 元 物 質 科 学 研 究 所 教 授		永 次 史
災 害 科 学 国 際 研 究 所 准教授		有 働 恵 子
東 北 ア ジ ア 研 究 セ ン タ ー 教 授		寺 山 恭 輔
病 院 准教授		宮 崎 真 理 子
高度教養教育・学生支援機構 （学生相談・特別支援センター）	助 手	佐 藤 静 香
総 務 企 画 部 部 長		齋 藤 仁
◎ は委員長		
○ は副委員長		

平成 26 年度東北大学男女共同参画委員会 委員会開催等記録 －委員会日程、主要議題及び具体的活動について－

平成 26 年 5 月 19 日 第 90 回男女共同参画委員会 開催

- (1) 各ワーキンググループの座長及び構成員について
各ワーキンググループ座長及び構成員について了承された。
- (2) 澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞について
標記事業の実施について了承された。
- (3) 仙台 I ゾンタクラブ東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業の公募について
標記事業の実施について了承された。
- (4) サイエンス・エンジェルの応募状況、年間活動計画について
標記事業の実施について報告があった。
- (5) 男女共同参画・女性研究者支援事業の採択状況について
標記事業の採択状況について報告があった。
- (6) 平成 25 年度男女共同参画委員会活動報告書の作成について
同報告書の作成状況について報告及び御礼があった。
- (7) その他
 - ・男女共同参画推進センターについて
4 月に同センターが設置されたことについて報告があった。
 - ・杜の都ジャンプアップ事業 for2013 総括シンポジウムの開催報告
3 月 6 日に開催された標記シンポジウムの報告があった。
 - ・全学教育科目 基幹科目・社会論「ジェンダーと人間社会」について
標記について説明があり、次年度の開講に向けて検討することとした。
 - ・女子学生入学 100 周年記念碑の作成について
4 月 17 日に行われた標記記念碑の検討会について報告があった。

平成 26 年 5 月 28 日 仙台 I ゾンタクラブ東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業の公募開始
・応募締切 平成 26 年 6 月 16 日

平成 26 年 6 月 11 日 第 1 回澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（澤柳記念賞）の公募開始
・応募締切 平成 26 年 7 月 31 日

平成 26 年 7 月 22 日 第 91 回男女共同参画委員会 開催

- (1) 第 11 回男女共同参画シンポジウムの開催について
標記シンポジウムの日程及び趣旨等について説明があり、引き続き検討することとした。
- (2) 仙台 I ゾンタクラブ東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業の審査結果について
標記事業の審査結果について了承された。
- (3) 澤柳記念賞について
標記事業の応募状況について報告があり、部局内での周知及び推薦の依頼があった。
- (4) 平成 26 年度各 WG における取組について
各 WG 座長から、平成 26 年度の取組について説明があった。
- (5) 男女共同参画推進センター規程の一部改正について
同センター規程の一部改正について承認された。
- (6) その他
 - ・東北大学男女共同参画推進センター愛称・ロゴマークの公募について

標記公募について説明があった。

- ・APRU 男女共同参画 Workshop について
標記 Workshop について参加報告があった。

平成 26 年 9 月 5 日 第 1 回東北大学澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（澤柳記念賞）再公募開始

- ・応募締切 平成 26 年 9 月 12 日

平成 26 年 10 月 16 日 第 92 回男女共同参画委員会開催

- (1) 第 11 回男女共同参画シンポジウムについて

標記シンポジウムについて説明があり、各部局内での周知及び当日の運営協力について依頼があった。

- (2) 第三保育施設設置について

10 月 1 日に行われた両立支援WGについて報告があり、引き続き検討することとした。

- (3) 澤柳記念賞について

選考結果について報告があった。また次年度に向け、募集内容を検討することとした。

- (4) 男女共同参画推進センター愛称・ロゴマーク及びニュースレターの発行について

同センターから愛称・ロゴマークの選考及びニュースレターの発行について報告があった。

- (5) 杜の都ジャンプアップ事業 for 2013 事後評価ヒアリングについて

10 月 7 日に行われた事後評価ヒアリングについて報告があった。

平成 26 年 11 月 29 日 第 11 回男女共同参画シンポジウム開催

「未来の男女共同参画社会への新たな発信～女子学生入学 101 年目を迎えた東北大学から」

平成 27 年 1 月 22 日 第 93 回男女共同参画委員会 開催

- (1) 平成 27 年度の男女共同参画・女性研究者支援事業について

標記事業について説明があり、これを了承した。

- (2) 男女共同参画推進センター規程の一部改正について

同センター規程の一部改正について承認された。

- (3) その他

- ・平成 26 年度男女共同参画委員会活動報告書の作成について

標記報告書について説明があり、各委員に執筆の依頼があった。

- ・第 11 回男女共同参画シンポジウム開催報告

昨年 11 月 29 日に行われた標記シンポジウムの開催状況等について報告があった。

- ・大学入試センター試験時の川内けやき保育園での一時保育について

試行実績について報告があった。

- ・医学系研究科・歯学研究科における SA 活動の紹介について

1 月 13 日に開催した標記セミナーについて報告があった。

- ・全学教育科目 基幹科目・社会論「ジェンダーと人間社会」について

次年度からの開講内容について報告があり、種々意見交換が行われた。

- ・女子学生入学百周年記念事業報告書の配布について

標記報告書が配布され、作成協力に対する御礼が述べられた。

平成 13 年度東北大学男女共同参画委員会報告(H14.4.16 評議会報告)に対する対応状況(抜粋)

報告書の概要		対応策	備考
1. 全学的アピールの採択と部局WG等の設置			
(1)	東北大学男女共同参画推進宣言	・第1回男女共同参画シンポジウムにおいて宣言(14.9.28)。	
(2)	各部局ごとに男女共同参画WGを設置	・設置について、委員会へ報告済(14.7.22)。	
2. ジェンダー学講座・科目の設置と広報活動の拡充			
(1)	- ジェンダー学等の男女共同参画関連分野の科目を複数開講 - ジェンダー学専任教員の配置 - ジェンダー研究関連講座担当候補者リストの作成	全学教育科目 基幹科目として、平成 17 年度から継続して「ジェンダーと人間社会」を開講。また、平成 21 年度からは「体と健康」を開講。平成 27 年 4 月より一時中断していた「ジェンダーと人間社会」を開講予定。	学務審議会との連携
(2)	- 男女共同参画委員会主催の講演会・シンポジウムの開催 - 全学教育審議会主催の講演会・シンポジウムの開催 - 各部局主催の講演会・勉強会の開催	- 平成 14 年度から継続して、男女共同参画シンポジウムを開催し、計 11 回実施。 - 今後検討。 - 本報告書「各部局の取組み」参照。	広報WG
(3)	- 研究補助・懸賞論文制度の導入 - 研究調査のための海外視察・調査研究プロジェクトの設立等 - 学外の研究者等との学際的な共同研究を奨励・促進	- 平成 15 年度から継続して、男女共同参画奨励賞(沢柳賞)を実施し、計 10 回表彰。 21 世紀COEプログラム「男女共同参画社会の法と政策」拠点と連携。 - 平成 26 年度から澤柳政太郎記念男女共同参画賞(澤柳記念賞)を実施。	奨励制度WG
(4)	研究成果の公表と広報・啓発活動	- 男女共同参画委員会HPにおいて、活動内容等を掲載。 - 男女共同参画シンポジウムにおいて、沢柳賞受賞者による受賞講演及び成果報告講演を実施。	広報WG

報 告 書 の 概 要		対 応 策	備 考
3. 方針決定機関等への女性教官の参画			
(1)	東北大学の方針決定機関におけるジェンダー・バランスの確保	- 平成18年度から総長特別補佐(男女共同参画担当)を設置し、同職へ女性教員が就任。 - 法学研究科とWPIで女性の部局長が誕生。 - 評議会に報告・了承済(14.4.16)。	
(2)	・本学の各審議機関や計画分析評価等を行う「室」等に女性教官枠登用		
5. とくに女性教官が少ない分野での男女共同参画の推進			
(1)	・ジェンダー・バランスの現状と分析結果の取りまとめ	- 評議会に報告・了承済(14.4.16)。 - 本報告書「中期目標・中期計画達成のための各部署の取り組み」参照。 - 平成18年度から平成20年度まで文部科学省 科学技術振興調整費『杜の都女性科学者ハードリング支援事業』を実施。平成21年度以降も事業継続。 - 平成21年度から文部科学省 科学技術振興調整費『杜の都ジャンプアップ事業 for 2013』を実施。	
(2)	・採用における性差別・性差に基づく不公正な取扱いの有無及び検証結果の取りまとめ		
6. 研究・教育における男女共同参画実現のための環境整備			
(3)	・研究費の配分、留学機会と費用配分での配慮	平成19年度から大学院女子学生海外渡航支援事業(通称:ローズ支援事業)を実施。	奨励制度WG
(5)	・設備の改善(女性用トイレの増設、更衣室の整備等)	- 現状について、委員会へ報告済(14.7.22)。 『杜の都女性科学者ハードリング支援事業』において、「環境整備プログラム」を実施し、自然科学系全部局に女性用休憩室を設置。	
(6)	- 子育て支援体制の確立 - 男性の育児休業制度の活用促進 - 産休・育休中の研究補助体制 - 介護休業制度等の確立	「東北大学川内けやき保育園」を開園(17.9.1)。 - 育児休業、育児部分休業とも子が3歳に達するまで取得することができ、育休代替職員も雇用可能とした。 - 介護休業、介護部分休業とも約6月の範囲内で取得すること	両立支援WG

報告書の概要		対 応 策	備 考
		とができることとした。 ・『杜の都女性科学者ハードリング支援事業』において、「育児・介護支援プログラム」を実施。	
7. 職員等の雇用・昇進面での平等実現と労働環境の整備			
(5)	・労働時間の短縮 ・ワーク・シェアリング ・在宅勤務制度などの導入	・育児のための短時間勤務制度の新設(20.4.1)。 ・就業規則(育児休業等規程)により、職員から請求があった場合は、子(未就学児)を養育するため、労使協定にかかわらず超過勤務時間を1月24時間、1年150時間以内とすることとしている。 ・時間外労働時間の縮減等に努めるよう周知。	
8. 育児および介護における性別役割分業の改善と両立支援策			
(1)	学内保育園の具体的な調査・検討	・「東北大学川内けやき保育園」を開園(17.9.1) ・「東北大学星の子保育園」を開園(22.3.1) ・青葉山キャンパスでの保育所設置を検討開始(21年度)	両立支援WG
(2)	・育児休業制度の運用システムの改善 ・産休・育休中の臨時雇用等の補助体制を確立	・平成16年4月以降、代替職員制度を一本化し、育児休業の請求期間を任期とする育休代替職員を雇用可能とした。 ・「教員の任期に関する規程」を改正し、育児休業等による任期の延長を認めることを可能とした。 ・『杜の都女性科学者ハードリング支援事業』において、「育児・介護支援プログラム」を実施。	両立支援 WG
(3)	介護サービスの態様を検討	・平成16年4月以降、介護休暇制度から介護休業制度とし、負傷、疾病、老齢又は身体上若しくは精神上の障害により2週間以上の期間にわたり日常生活を営むのに支障があり、常時介護を必要とする状態にある者の介護をするため、休業することができるとした。	

報 告 書 の 概 要		対 応 策	備 考
(4)	・育児・介護、さらに病児看護のための休暇制度とともに、支援手当や支援金の一時貸与の制度	・平成 14 年 4 月以降、子(未就学児)の看護をするための特別休暇を年 5 日以内、取得できたこととした。	
9. 単身赴任者のための支援体制・環境整備の促進			
(2)	・単身赴任者手当の取得条件等を改善	・今後検討	
10. 男女共同参画推進のための不服申立制度・救済制度等の整備			
(1)	・不服を申立制度、及び問題解決にあたる恒常的な機関の設置	・男女共同参画委員会内に相談窓口設置(14.1.18)	ハラスメント相談窓口 との連携
(2)	・相談窓口や意見箱、日常的な調査・監督にあたるオンブズパーソン制 度の設置	・今後検討	
11. 教職員の旧姓使用の拡大			
	・旧姓使用者の便宜を検討	・適用済(H13.12.26)	
12. 大学院生・学部学生の研究・勉強環境の改善			
(1)	・教育・厚生施設等の設備状況の点検・改善	・総長裁量経費により、川内南地区・北青葉山地区の厚生施設の改修及び設備改善を行った。(平成 16 年～17 年度)	
(2)	・カリキュラムや演習教育場面等における性的差別取扱い等の調査 改善	・今後検討。	
13. 非常勤講師の処遇と研究環境の改善			
	・非常勤講師の教育環境・雇用環境について、性別に由来する差別的 取扱いや慣行がないかを調査・改善	・今後検討。	

東北大学における男女共同参画推進のための行動指針（H25. 8. 8 策定）に対する対応状況

	行動指針	対応内容
1	両立支援・環境整備	研究支援要員制度（通常型・シェア型）とベビーシッター利用料等補助制度を実施。第3保育所設置に向けて検討中
2	女性リーダー育成	スタートアップ研究費支援制度（2年間）と研究スキルアップ経費補助制度（国内外の学会参加等）を実施中
3	次世代育成	サイエンス・エンジェル制度を実施中
4	顕彰制度	澤柳記念賞政太郎記念東北大学男女共同参画賞（及び同奨励賞）を創設し、第一回として2名を顕彰
5	地域連携	東北地区大学への助言とともに、今後の連携体制を検討中
6	国際化対応	Association of Pacific Rim University: Asia-Pacific Women in Leadership (Auckland, New Zealand, 2015. 3. 8-10)に参加。各種資料等の英語版の発行
7	支援推進体制	男女共同参画推進センター設置、専任助教を採用し、恒常的支援体制を確立

第11回 東北大学
男女共同参画シンポジウム



未来の 男女共同参画 社会への 新たな発信

女子学生入学
101年目を迎えた
東北大学から

平成26年

11.29 土

13:00~17:10

開催場所 東北大学片平キャンパス
片平さくらホール

主催 東北大学男女共同参画委員会

連絡先

東北大学男女共同参画推進センター
(東北大学総務企画部総務課)

TEL022-217-4811 FAX022-217-5906

ごあいさつ

第11回東北大学男女共同参画シンポジウムを開催するにあたり、ご挨拶させていただきます。

東北大学は「研究第一主義」「門戸開放」「実学尊重」を大学理念としております。この大学理念の一つである「門戸開放」において、大正2(1913)年に本学は当時の国立大学として初めて3人の女子学生に対し、理学部への入学を許可しました。このような輝かしい伝統と実績のもと、本学では平成13年に全学的組織として男女共同参画委員会を発足させ、平成14年9月に公表した「男女共同参画推進のための東北大学宣言」を指針として、全学をあげて男女共同参画社会の実現に向け鋭意取り組んでまいりました。そして昨年、初の女子学生の入学から100年という一つの節目を迎えることができました。

今回のシンポジウムは101年目の新たなスタートとして、さらに一步前に踏み出し、未来を見据えた男女共同参画社会の実現に向けて、「未来の男女共同参画社会への新たな発信」というテーマで開催します。

本シンポジウムでは、ご来賓として、本学出身である奥山恵美子仙台市長、そして文部科学省から河村潤子生涯学習政策局長をお招きし、ご挨拶を頂戴することにしております。また同じく本学出身である森まさこ参議院議員に特別講演をお願いしております。日本における男女共同参画社会推進の第一線に立っておられる皆様に、大変お忙しい中お集まりいただくことができ、光栄に存じます。

また、今年度より設立した「澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞(澤柳記念賞)」の記念すべき第一回目の授賞式・受賞講演、将来を担う若手を中心としたパネルディスカッションなど、様々な観点から男女共同参画について考える機会を設けます。本シンポジウム全体を通じて、未来の男女共同参画社会に向けて学内外の皆様とともに考え、意見を交換する貴重な機会となれば幸いです。

今回のシンポジウムの成果が本学及び全国の大学のみならず、日本全体の男女共同参画社会の実現に大きく寄与できますことを祈念いたしまして挨拶とさせていただきます。



東北大学 総長
里見 進

平成26年11月29日

プログラム

総合司会

東北大学男女共同参画委員会 広報・シンポジウム WG 座長 (多元物質科学研究所 教授) 永次 史

開会挨拶

東北大学 総長 里見 進 13:00-13:10

来賓挨拶

仙台市長 奥山 恵美子 氏 13:10-13:20

文部科学省生涯学習政策局長 河村 潤子 氏 13:20-13:30

第1部

司会 男女共同参画委員会 奨励制度 WG 座長 (医工学研究科 教授) 田中 真美 13:30-14:45

第1回 澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞(澤柳記念賞) 授賞式及び講演会

A 賞 (本賞)

明治大学法科大学院 教授 辻村 みよ子 氏

B 賞 (奨励賞)

SA 輝友会 代表 八木橋 奈央 氏

東北大学男女共同参画推進センター愛称・ロゴマーク発表

男女共同参画推進センター長 植木 俊哉

東北大学における男女共同参画の取り組みについて

男女共同参画推進センター 副センター長 米永 一郎

休憩 (10分)

第2部

14:55-15:55

特別講演

女性が輝く社会を目指して

前国務大臣 女性活力・子育て支援担当 参議院議員 森 まさこ 氏

休憩 (5分)

第3部

16:00-17:00

パネルディスカッション

未来の豊かな社会の実現に向けた男女共同参画社会の在り方

パネリスト

株式会社日本総合研究所 創発戦略センター 劉 磊 氏

東京医科歯科大学 メディカルフェロー 塩飽 由香利 氏

東北大学大学院生命科学研究科 博士課程後期2年 阿部 彰子

東北大学大学院法学研究科 博士課程後期3年 樋口 恵佳

コーディネーター

総長特別補佐 男女共同参画担当 (医学系研究科 教授) 大隅 典子

講評・閉会挨拶

東北大学男女共同参画委員会 委員長 植木 俊哉

第1回澤柳政太郎記念 東北大学男女共同参画賞審査結果および講評



男女共同参画委員会
委員長
植木 俊哉

本学では、平成15年度より10年間にわたり、東北大学における男女共同参画を推進するため、「東北大学男女共同参画奨励賞（通称：沢柳賞）」として、教職員及び学生の皆さんの男女共同参画に関連する研究や活動を奨励してきました。

今年は、さらなる男女共同参画社会を目指し、沢柳賞を改め、「澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（通称：澤柳記念賞）」を創設しました。この賞は、アカデミアにおける男女共同参画の先駆として、各分野で活躍し多大な貢献をなした方々を選考し顕彰する目的で設置しました。これまでの沢柳賞と異なり、学内だけでなく学外からも広く公募することで、より多くの方へ男女共同参画推進の理念を広げたいと考えています。

名称は、東北大学の理念である「門戸開放」の方針を打ち出し、全国に先駆けて女子学生に帝国大学の門戸を開く素地をつくった初代総長澤柳政太郎の功績にちなんでいます。澤柳記念賞は、本賞のほか、38歳以下の若手を奨励する目的で設置された奨励賞の2部門からなります。審査においては男女共同参画に関連する研究や活動の奨励、男女共同参画社会実現へ向けての積極的な提言や企画を重視しています。

厳正な審査により、以下のように受賞者が決まりましたので、審査の講評とあわせてご報告いたします。

第1回澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞

日本の男女共同参画社会の推進を牽引する 先導的活動について

明治大学法科大学院 教授 辻村 みよ子

〔講 評〕

同氏は憲法学・ジェンダー法学を代表する学者の一人として、東北大学における男女共同参画実現に向けての礎を築いた。さらには、21世紀COEプログラム、グローバルCOEプログラムの拠点リーダーや、内閣府男女共同参画会議・専門調査会委員等を歴任し、学内外に研究成果や政策提言を発信しながら日本の男女共同参画社会推進を牽引してきた。この功績は特に顕著なものであり、ここに顕彰する。

第1回澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画奨励賞

サイエンス・エンジェル修了生を中心とした 有志団体による男女共同参画への取り組み

エスエー きゆうかい
S A 輝友会

〔講 評〕

同団体は東北大学サイエンス・エンジェル（※）であった大学院修了生を中心とする自主的な活動団体として、修了後も研究分野や職種を超えて交流を続けている。自ら科学イベント等の企画を行うほか、現役学生のSA活動や進路に関するアドバイスを行うなど、ロールモデルとしても貴重な役割を果たしている。このような異なる分野を横断した理系の女子大学院生修了生による活動の今後の一層の活躍を期待し、奨励賞として顕彰する。

※サイエンス・エンジェル(SA)・・・東北大学の自然科学系女子大学院生が、女性研究者のロールモデルとしてセミナーやイベントに参加し、科学の魅力・研究のおもしろさを伝えている。

第1回「澤柳記念賞」受賞者

日本の男女共同参画社会の推進を牽引する 先導的活動について

明治大学法科大学院 教授 辻村 みよ子

講演要旨

法学部への女子学生の入学自体が珍しかった時代に憲法学研究者を志し、オランプ・ドゥ・グージュなどフランス革命期の人権・主権論研究を経て、1999年に国公立大学法学部初の女性憲法学教授として東北大学に赴任。男女共同参画委員会副委員長、ジェンダー法学会設立、21世紀COE／グローバルCOE拠点リーダーなどの経験をもとに日本学術会議科学者委員会男女共同参画分科会委員長やジェンダー法学会理事長、内閣府男女共同参画会議員等を歴任。こうした研究経歴や男女共同参画推進の取組みを踏まえて、ジェンダー法学の意義、日本の現状と課題、ポジティブ・アクション（積極的改善措置）の可能性などについて考える。とくに、フランスのパリティや韓国の50%クォータ制、女性国会議員比率が63.8%のルワンダ等との比較研究を通じて、政治分野における男女共同参画の意義と課題を明らかにし、学術分野のポジティブ・アクションの難しさや今後の課題について、理論的・比較政策的な分析が必要である。

実際、1999年の男女共同参画社会基本法や各大学等での男女共同参画の取組みにも拘らず、日本の女性研究者比率は14.4%(2013年度)で10年間の増加率はわずかに2.8%。このままでは30%に達するまでにさらに50年もかかってしまう。このためポジティブ・アクションが必要となるが、多様な手段の中で適切な措置を選択し、逆差別やスティグマ（劣性の烙印）を避けつつ社会全体のコンセンサスを得ながら進めることが不可欠となる。果たして、日本でポジティブ・アクションが有効な手段になりうるのか、社会全体の性別役割分業構造の改革なくして「女性の活躍」だけで十分なのか・・・など、論ずべき課題は多い。

主要著書

- 『フランス革命の憲法原理—近代憲法とジャコバン主義』 日本評論社、1989年（第7回渋沢＝クロード賞受賞）
- 『人権の普遍性と歴史性』 創文社、1992年（1999年重版）
- 『ジェンダーと人権』 日本評論社、2008年
- 『憲法とジェンダー』 有斐閣、2009年（第2回昭和女子大学女性文化研究賞受賞）
- 『フランス憲法と現代立憲主義の挑戦』 有信堂、2010年
- 『比較憲法（新版）』 岩波書店、2011年
- 『ポジティブ・アクション—「法による平等」の技法』 岩波書店、2011年
- 『ジェンダー社会学の可能性（全4巻）』 辻村・大沢編集、岩波書店、2011年
- 『憲法から世界を診る—人権・平和・ジェンダー—[講演録]』 法律文化社、2011年
- 『憲法（第4版）』 日本評論社、2012年
- 『概説 ジェンダーと法』 信山社、2013年
- 『人権をめぐる十五講—現代の難問に挑む』 岩波書店、2013年

他多数

本賞



略歴

- 1972年3月 一橋大学法学部法律学科卒業
- 1975年3月 一橋大学大学院法学研究科修士課程修了
- 1978年3月 一橋大学大学院法学研究科博士課程単位取得満期退学（法学博士）
- 1978年4月 一橋大学法学部助手（特別研究員）（～1980年3月）
- 1982年4月 成城大学法学部専任講師
- 1985年4月 成城大学法学部助教授
- 1990年8月 バリ第2大学在外研究（～1991年9月）
- 1992年4月 成城大学法学部教授
- 1999年2月 バリ第2大学比較法研究所招聘教授（日本法集中講義～2003年）
- 1999年4月 東北大学法学部教授
- 2000年4月 東北大学大学院法学研究科教授
- 2003年～
- 2013年3月 21世紀COE「男女共同参画社会の法と政策」・グローバルCOEプログラム「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」拠点リーダー
- 2008年～
- 2013年3月 東北大学ディステイングイッシュト・プロフェッサー
- 2013年4月 明治大学法務研究科（法科大学院）教授・ジェンダー法センター長（～現在に至る）

第1回「澤柳記念賞」受賞者

奨励賞

サイエンス・エンジェル修了生を中心とした 有志団体による男女共同参画への取組み

SA 輝友会 代表 八木橋 奈央

講演要旨

東北大学の自然科学系女子大学院生によって構成され、次世代を担う子どもたちに、科学の魅力を伝える活動を展開している「東北大学サイエンス・エンジェル (SA)」。

SA 輝友会はその OG が中心となって活動している団体です。「SA 活動で得たつながりを卒業後も大切にしていきたい」という思いから2009年に発足し、現在100名ほどが在籍しています。SAの研究分野は多岐にわたり、卒業生の多くが仙台を離れて就職します。そこで、OGだけではなく現役 SA や教職員スタッフも会員対象とすることで、住んでいる場所や在学時期、研究分野や職業を問わず、世代を超えた交流ができ、OGから現役生への理系女子のロールモデル提供の場としても機能しています。

SA 輝友会では情報共有のためメーリングリストを活用しています。このメーリングリストは会員であればだれでも配信・受信できます。交流会などのお知らせのほか、OGの仕事やプライベートをまとめたインタビューマガジンの配信、研究者採用情報、また、関東で行われる SA の科学イベント出展でのボランティア募集などに活用されています。

交流会では、キャリアや研究に関するトピックで、異なる研究分野について学び、卒業後のキャリアパスについて情報交換をしています。企画コアメンバーを OG と現役 SA が一緒に企画をすることで、縦のつながりを深めています。関東では支部会が

発足し、就職してからもお互いに声を掛け合える環境の整備に努めています。

今後さらに、世代、分野の異なる理系大学院を修了した理系女子による SA 輝友会の活動を通じて、大学を離れてからの理系女子の可能性を全国の人々に示すことのできる団体となれたら、と願っています。



略歴

- 2010年3月 東北大学理学部生物学科卒業
- 2010年3月 東北大学大学院生命科学研究科生体システム生命科学専攻入学
- 2010年5月～
- 2012年3月 東北大学サイエンス・エンジェルに任命
- 2012年3月 東北大学大学院生命科学研究科生体システム生命科学専攻修了(修士)
- 2012年4月 青森県の県立高校教諭として勤務



SA輝友会が企画した情報交流会の様子 平成26年8月3日 貴方の未来を描こう～多様なキャリア・ライフパスと制度～

東北大学男女共同参画推進センター 愛称・ロゴマーク採用作品

男女共同参画推進センター

東北大学男女共同参画推進センターは、本学全体の男女共同参画活動を円滑に推進することを目的として平成26年4月に設置されました。本センターに愛着を持って頂き、男女共同参画へのより深い理解を促すために、センターについて分かりやすく表現した愛称・ロゴマークを募集したところ、全国各地から愛称126点、ロゴマーク30点の応募がありました。厳正なる審査の結果、下記のとおり最優秀賞、優秀賞を選定し表彰します。なお、今回選ばれた最優秀賞を元に、今後本センターのシンボルを作成し、看板、ポスターや各種製作物、ホームページ等に広く活用する予定です。

愛 称

最優秀賞

「TUMUG(ツムグ)」

静岡県
島田 宏哉 様(37歳)

●制作者のコメント

「Tohoku University(東北大学)」
「Movement(運動、活動)」「United(団結、協力)」「Gender(ジェンダー、男女)」からなるアクロニウム語で、「紡ぐ」の音を表しています。東北大学から日本らしい男女共同参画社会を「紡ぐ」ムーブメントを起こすことを表現しました。

優秀賞

「ゆいこ〜と」

北海道
朝倉 修 様(45歳)

●制作者のコメント

「結ぶ」の「ゆい(結)」に、「つきそう」の「エスコート(escort)」や「中庭」の「コート(court)」をつなぎ、男女が共に平等な立場で結ばれるための支援の場、開放的な庭という思いを込めました。

優秀賞

「UniTI(ユニティ)」

宮城県
熊谷 明哉 様(33歳)

●制作者のコメント

男女共同参画という意味で Universal(例外なく、万人の)という言葉を入れ、このセンターから東北にイノベーションを起こしてもらいたいと思い、この名称を考えました。また、UniTIというのは、Unite や Uni(Universalを含む)に音も近く、男女共に世界で活躍することも期待して、英語になっております。

ロゴマーク

最優秀賞



群馬県
小池 友基 様(29歳)

●制作者のコメント

杜の都仙台をイメージし、定禅寺通りのケヤキ並木の木をモチーフに男女共同参画社会をイメージしたロゴマーク。(杜の都仙台がイメージできる)男女共同が輪をつくり、躍動するイメージが男女共同参画推進をする取り組みを行う東北大学男女共同参画推進センターの目的が一目でイメージできます。)また4枚の葉が男女共同参画が推進され、幸せな社会が実現することを表現した四つ葉のクローバーもイメージでき、パステルカラーが優しく、親しみやすいデザインです。

優秀賞



千葉県
神保 米雄 様(65歳)

●制作者のコメント

東北大学男女共同参画推進センターの「T」と無限にふくらむ未来の輪を両手いっぱい広げ、積極的に男女共同参画する人々が結び合う力強さと互いを尊重し、年齢、性別等を問わず連携を進めていく輪でつながり継続・両立する様子を表現しました。

優秀賞



青森県
工藤 和久 様(49歳)

●制作者のコメント

東北大学の「T」の文字を基調に共に手をたずさえ未来へ歩みだす男女の姿で東北大学男女共同参画推進センターを象徴的に表現しました。赤は太陽、青は大空で青葉区にある推進センターを爽やかにイメージしました。現代的で、シンプルで、親しみやすく、多くの人々に長く愛されるシンボルデザインです。また、縮小、単色、白黒にも耐えられ、いろいろと多用途な使い方が出来ます。

東北大学における 男女共同参画の取り組みについて

東北大学における男女共同参画の取り組みについて

東北大学では、男女共同参画の実現に向けた委員会活動とともに、女性研究者がキャリアパスの障害を乗り越えるための支援として、平成18-20年度に「杜の都女性科学者ハードリング支援事業」（文部科学省科学技術振興調整費：女性研究者支援モデル育成）、平成21-25年度に「杜の都ジャンプアップ事業 for 2013」（文部科学省科学技術振興調整費：女性研究者養成システム改革加速事業、現科学技術人材育成費補助金）を実施してきた。平成26年度からはこの成果を踏まえ、男女共同参画推進センターを中心に、大学独自予算でこれらの支援事業を継承し、発展させている。

昨年（平成25年）は、当時の国立大学として初めて女子学生を受け入れてから100年という記念すべき年として、記念シンポジウム等の多岐にわたる事業を展開した。特に新たな一歩のための「男女共同参画推進のための行動指針」（本パンフレット裏表紙に掲載）が策定された。男女共同参画推進センターは、「行動指針」に基づき、1) 両立支援・環境整備、2) 女性リーダー育成、3) 次世代育成、4) 顕彰制度、5) 地域連携、6) 国際化対応、7) 支援推進体制、の7プログラムを実施し、今後一層の男女共同参画の推進を図る予定である。

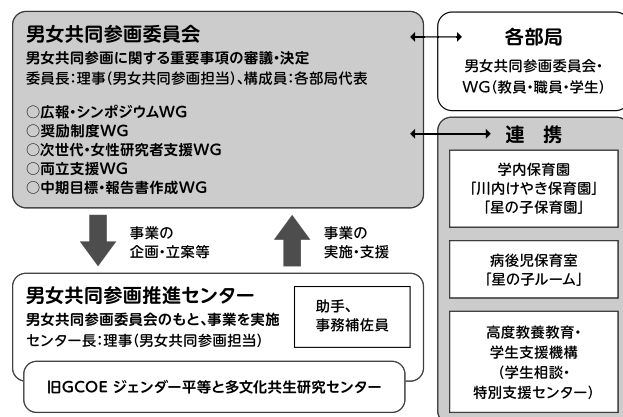


男女共同参画委員会 副委員長
男女共同参画推進センター
副センター長

金属材料研究所 教授

米永 一郎

男女共同参画・女性研究者支援の体制



平成26年度男女共同参画・女性研究者支援事業

プログラム名	内 容	対象部局	対象者
1 研究支援要員	研究支援要員雇用のために必要な人件費の補助(上限200万円)	自然科学系部局	自然科学系の女性教員
2 研究支援要員(シェア型)	採択者同士で事務補佐員1名(総務企画部総務課より派遣)をシェア		
3 ベビーシッター利用料等補助	研究、講義、出張時のベビーシッター利用料等の補助(上限10万円)	全部局	教員、技術職員、PD、博士学生
4 スタートアップ研究費	一年目100万円、二年目50万円の研究費を支援	全部局	新規採用の女性教員(助教以上)
5 研究スキルアップ経費	会議・シンポジウム等の旅費支援 開催地が海外:上限40万円、国内:上限15万円	全部局	女性教員(准教授、講師、助教)
6 サイエンス・エンジェル	高校出張セミナー、オープンキャンパス、科学イベント企画・実施	自然科学系研究科	自然科学系の大学院女子学生
7 女子学生海外渡航支援	海外で開催される会議・シンポジウム等の旅費支援(上限15万円)	全研究科	大学院女子学生

※平成26年度の募集は締め切りました。

特別講演



略 歴

生年月日 昭和39年8月22日
出身地 福島県
参議院議員 福島選挙区 当選2回
昭和63年 東北大学法学部卒業
平成6年 結婚
平成7年 弁護士登録
平成10年 森まさこ法律事務所
設立
第一子出産
平成11年
～12年 米国ニューヨーク大
学法科大学院客員
研究員
平成12年 国連CSW(女性の地
位委員会)日弁連代表
第二子出産
平成14年
平成14年 米国ワシントンDC
～16年 在住
平成17年 金融庁総務企画局課
長補佐(貸金業法)
平成18年 金融庁検査局金融証
券検査官(証券・金融)
平成19年 第21回参議院議員
選挙当選
平成21年 自民党 法務部会長
平成22年 自民党 副幹事長
平成23年 参議院 法務委員会理
事、東日本大震災復興
特別委員会理事
平成24年 参議院 行政監視委
員長
平成24年 第二次安倍内閣で女
性活力・子育て支援担
当大臣、内閣府特命担
当大臣(消費者及び食
品安全、少子化対策、
男女共同参画)
※平成26年9月まで
平成25年 第23回参議院議員
選挙当選
平成26年 自民党女性活躍推進
本部 副本部長

女性が輝く社会を目指して

前国務大臣 女性活力・子育て支援担当 参議院議員 森 まさこ 氏

講演要旨

1 安倍内閣における取り組み

女性の活躍は、アベノミクス「3本の矢」の3番目の成長戦略の中核と位置づけられ、日本では、女性の労働力が最大の潜在力となっている。しかし、現在の日本社会には、女性の昇進や出産後の就業継続を阻む巨大な岩盤が存在する。女性が輝く社会の実現に向けて、この岩盤に穴をあけていかなければならない。

女性の活躍の機会を広げるために、政府は、2020年までに指導的地位における女性の割合を30%にするという数値目標を掲げている。これは、政府や民間企業において管理職の30%が女性でなければならないことを意味している。

安倍内閣では、このような数値目標の下、様々な政策に取り組んできた。具体的な取り組みについては、講演で詳しく紹介の予定である。

(例)

- ① 企業における女性役員・管理職数の増加
- ② 子育て期(25～44歳)の女性の就業率の上昇
- ③ 待機児童の減少
- ④ 育児休業給付の充実
- ⑤ 女性の活躍「見える化」サイトの開設 等

上記の他、育児・家事支援環境の拡充、企業等における女性の登用を促進するための環境整備、働き方に中立的な税制・社会保障制度等への見直しなど様々な取り組みを進めている。

2 体験談

二人目の子どもが生まれた後、私は、専業主婦としてワシントンDCに住んでいた。アメリカは、女性の子育てをするうえで、本当に素晴らしい環境だった。ベビーカーの行く先に階段があれば皆が手伝ってくれたし、地下鉄では進んで席を譲ってくれた。ところが、日本では、「じゃまだ。」と言われ、満員電車のせいで子どもを勤務先の事業所内保育所に連れて行くこともできなかった。人々の意識も変える必要がある。私は、必要な施策を実行することで、人々の意識を変え、女性が十分に活躍できる環境を作っていきたい。

近年の主な活動

<講演実績>

- 2014年9月11日 エルサルバドルのビニャット大臣とのディスカッション／外国人記者クラブ
2014年9月25日 「子育てと男女共同参画」／福島工業高等専門学校
2014年10月3日 「女性が輝く社会と復興」／福島県立医科大学
2014年10月4日 「私の子育て奮闘 ワークライフバランス」／ふくしま震災孤児・遺児をみまもる会
2014年10月8日 「選択する未来」シンポジウム・パネリスト／内閣府
2014年10月20日 「女性の活躍促進の加速化のために～大阪に期待すること～」
／大阪市男女共同参画のまち創生協会 他
2014年10月24日 IBA（国際法曹協会）の年次総会にてキーノートスピーチ
「Creating “A Society in which Women Shine”」／東京国際フォーラム
2014年10月25日 「少子高齢化社会のこれからの展望」／国際ソロプチミスト福島

他多数

<インタビュー>

- 2013年9月5日 フィガロ（フランス）「Le Japon recrute des Françaises pour ses conseils d'administration」
2014年3月1日 Japan News 「Unseen 'glass stones' litter women's path」
2014年4月号 日経 WOMAN 「家族が私に元気をくれる」森まさこ × 中山秀征（タレント）× 東尾理子（プロゴルファー）
2014年4月15日 Bloomberg.co.jp 「霞ヶ関のウーマノミクス加速へ」
2014年8月16日 毎日新聞 女子大生誕生の日「これからの日本をリードする女性の力」座談会

他多数

<その他の活動>

- 2013年1月 女性の活躍見える化サイトを発足
2013年2月
～6月 「若者・女性活躍推進フォーラム」を政府主催で全国にて開催
2013年4月 経済3団体に働きかけ
2013年5月 男女共同参画の観点からの防災・復興活動
2013年6月 2014年の安倍内閣の成長戦略の中核に「女性活躍」を据える
2013年11月 配偶者同行休業法を成立
2014年2月 内閣官房に「女性が輝く社会づくりチーム」を発足
2014年3月
～9月 「輝く女性応援会議」を政府主催で全国各地にて開催
2014年5月 女性の活躍を加速する男性リーダーの会を発足
2014年8月 奥山仙台市長と会談（「女性活躍政策について」）
2014年12月3日（予定）の国連世界防災会議に向けた女性会議（福島）の開催を決定
2014年9月 WAW（World Assembly for Women in Tokyo）を企画、前大臣として出席

他多数

パネルディスカッション パネリスト紹介



劉 磊 氏

株式会社日本総合研究所 創発戦略センター

所 属 株式会社日本総合研究所 創発戦略センター

経 歴

- 2004年3月 東北大学 工学部 機械知能工学科卒業
- 2004年4月 東北大学大学院工学研究科 博士課程に進学
次世代血流力学解析システムの研究開発に従事
- 2009年3月 東北大学大学院工学研究科 バイオロボティクス専攻 博士後期課程修了
博士(工学)
- 2009年4月 GEヘルスケア・ジャパン株式会社に入社 外資系医療機器メーカーの開発
エンジニアとして画像診断装置の研究開発、次世代医療検査技術に関する
共同研究案件の立案・展開に従事 在職中に二児の父となり、「イクメン」
の道をはじめる
- 2014年6月 株式会社日本総合研究に転職 創発戦略センター所属 次世代社会インフ
ラ案件(高齢化社会、地域交通、ビッグデータ活用)、次世代高度人材育成プ
ログラムなどのプロジェクトに参加 週末は家族とイン＆アウトドアのア
クティビティを楽しむ 趣味はキッチンに立ち、妻、子供と一緒に「食育」
を楽しむこと



塩飽 由香利 氏

東京医科歯科大学 メディカルフェロー

所 属 東京医科歯科大学 メディカルフェロー

経 歴

- 2007年3月 東北大学歯学部歯学科 卒業
- 2007年4月 東北大学病院附属歯科医療センター 研修医
- 2008年4月 東北大学大学院歯学研究科 入学
- 2008年5月 東北大学サイエンス・エンジェルに任命 小中高校生の身近なロールモデ
ルとなり、セミナー等を通じて科学の魅力を伝える活動を開始
- 2011年4月 日本学術振興会 特別研究員(DC2) 採用
- 2012年3月 東北大学大学院歯学研究科 修了
- 2012年4月 Harvard School of Dental Medicine 博士研究員
- 2014年4月 東京医科歯科大学 メディカルフェロー 現在に至る



阿部 彰子

東北大学大学院 生命科学研究科 博士課程後期2年

所 属 東北大学大学院生命科学研究科 博士課程後期2年
経 歴

2011年3月 宇都宮大学農学部生物生産科学科卒業
2011年4月 東北大学大学院生命科学研究科分子生命科学専攻 博士前期2年の課程入学
2011年5月 東北大学サイエンス・エンジェルに任命 小中高校生の身近なロールモデルとなり、セミナー等を通じて科学の魅力を伝える活動を開始
2013年3月 東北大学大学院生命科学研究科分子生命科学専攻博士前期2年の課程修了
2013年4月 東北大学大学院生命科学研究科分子生命科学専攻博士後期3年の課程入学
2013年5月 世界トップクラス研究リーダー養成セミナー「未来をつくる学生たちへ～ノルウェーからのメッセージ～」におけるトークイベントに出席
2014年3月 内閣府男女共同参画局による「輝く女性応援会議」に出席



樋口 恵佳

東北大学大学院 法学研究科 博士課程後期3年

所 属 東北大学大学院法学研究科 博士課程後期3年

法政理論研究専攻（研究専門分野：国際法）、日本学術振興会特別研究員（DC）

経 歴

2010年3月 東北大学法学部 法学科卒業
2010年4月 東北大学大学院 法学研究科（法政理論研究専攻）博士課程前期二年の課程入学
2010年4月 （修士課程在学中）グローバル COE プログラム リサーチ・アシスタント
2012年3月 東北大学大学院 法学研究科（法政理論研究専攻）博士課程前期二年の課程卒業
2012年4月 東北大学大学院 法学研究科（法政理論研究専攻）博士課程後期三年の課程入学 また、2014年4月～ 日本学術振興会特別研究員（DC）

コーディネーター紹介



大隅 典子

総長特別補佐 男女共同参画担当（医学系研究科 教授）

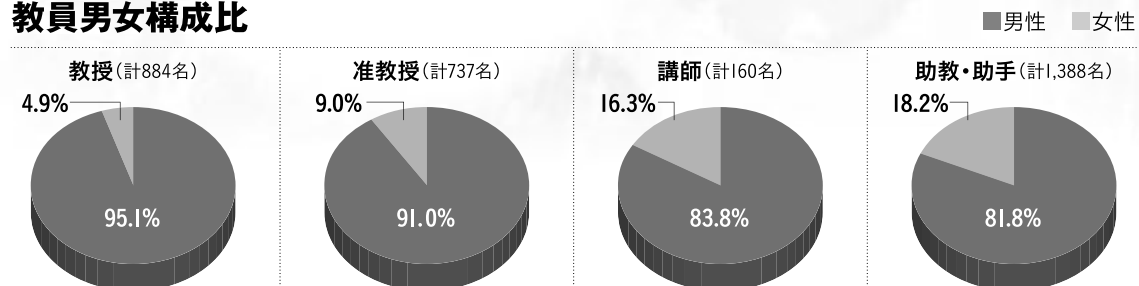
所 属 東北大学総長特別補佐（男女共同参画担当）
東北大学大学院医学系研究科 附属創生応用医学研究センター
発生発達神経科学分野 教授

専門領域 発生生物学、分子神経科学

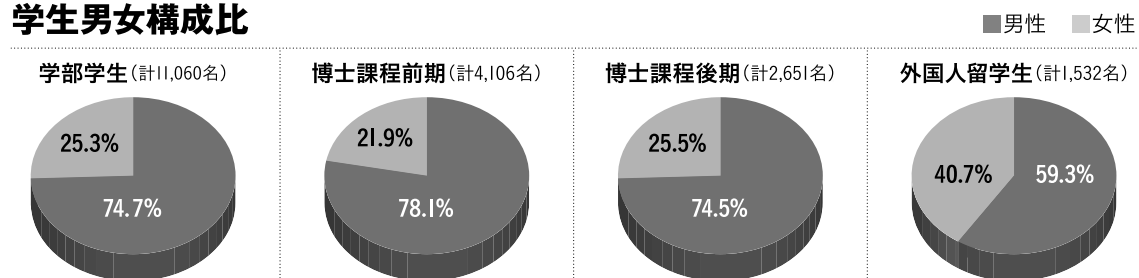
著 書 『神経堤細胞』（共著、東京大学出版会、1997年）
『エッセンシャル発生生物学 改訂第2版』（訳書、羊土社、2007年）
『心を生みだす遺伝子』（訳書、岩波現代文庫、2010年）
『脳科学ライブラリー2 脳の発生・発達 神経発生学入門』（朝倉書店、2010年）
『なぜ理系に進む女性は少ないのか？ トップ研究者による15の論争』（訳書、西村書店、2013年） 他

東北大学における男女構成比と推移 平成26年5月1日現在

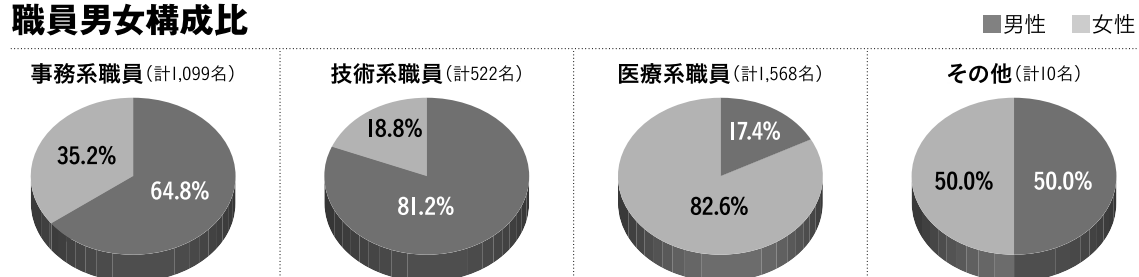
教員男女構成比



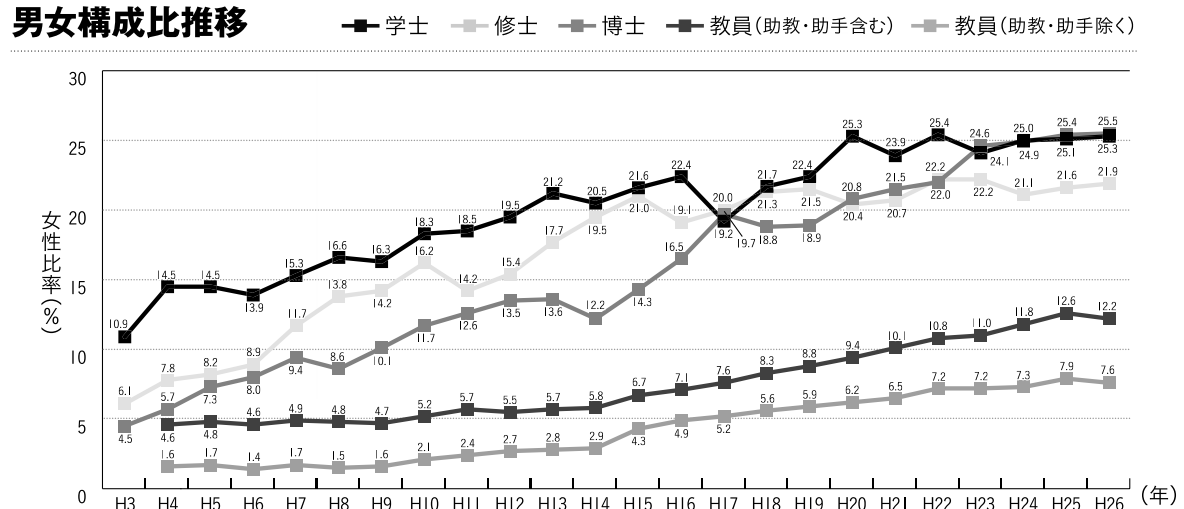
学生男女構成比



職員男女構成比



男女構成比推移



東北大学における 男女共同参画推進のための行動指針

東北大学は、1913年に日本で初めて女子学生3名の入学を許可した。その3名はやがて女性初の学士になるなど、本学は女性研究者育成の歴史に大きな足跡を残している。そのような歴史の中、戦前にあつては学問を志す全国の女性が「学都仙台」に集い、本学は帝国大学の中で最も多くの女子学生を輩出した。

そして、2001年に全国に先駆けて東北大学男女共同参画委員会を発足させ、「男女共同参画のための東北大学宣言」（2002年）のもと、全学的な男女共同参画の推進に向けた活動として、学内の環境整備や意識改革、学内外広報等に努めてきた。

また、2003年度に21世紀COE「男女共同参画社会の法と政策」が、2008年度にはその成果を発展させたグローバルCOE「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」が採択された。これらは、男女共同参画とダイバーシティ研究・教育のためのプログラムであり、研究・教育における男女共同参画の取り組みも全国に先駆けて進めている。

自然科学系分野では、2006年度から「杜の都女性科学者ハードリング支援事業」を展開し、環境整備や次世代育成等に取り組むとともに、2009年度からは「杜の都ジャンプアップ事業 for 2013」により、理工農学分野の女性研究者の採用を促進し、そのリーダー育成を推進している。

このように、男女共同参画の包括的推進（理論整備・活動支援）において、我が国をリードする活動を展開している本学は、女子学生入学100年の歴史と背景のもとに、建学以来の理念の一つである「門戸開放」を継承する男女共同参画について、今後10年間の行動指針として以下の7項目を策定する。

■両立支援・環境整備

本学構成員が、年齢性別等を問わず、仕事や学業と生活との両立を図ることができるように、意識の醸成に努め、子育て支援のための学内施設の充実や介護支援を含めた制度等の環境整備と周知を進める。

■女性リーダー育成

アカデミアにおける男女共同参画の推進に向けて、女性研究者を積極的に採用・養成し、さらに学内および学会・社会のリーダーとして飛躍させるための支援・登用制度を整備する。

■次世代育成

将来性豊かな次世代女性研究者を輩出するために、サイエンス・エンジェル（SA）活動を継続・発展することなどにより、学部生・大学院生を対象とした研究者使命の意識啓発と醸成に努め、さらに実体験を通して育成する施策を推進する。

■顕彰制度

アカデミアにおける男女共同参画の先駆として、各分野で活躍し多大な貢献をなした方々を選考し顕彰するため、新たな「東北大学男女共同参画賞」を創設する。

■地域連携

東北地方の中心に位置する大学として、東北地方の多くの大学、行政機関等との連携を進め、地域発展や震災復興事業等における男女共同参画を推進する。

■国際化対応

ワールドクラスへの飛躍に向けて、グローバルな研究・教育体制に相応しい、外国人研究者・留学生を対象とした様々な両立支援策を講じ、国際的観点に基づいて学内の男女共同参画を推進する。

■支援推進体制

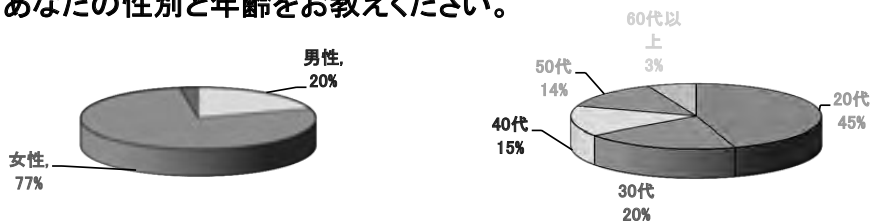
上記の男女共同参画活動を円滑に推進するために、男女共同参画担当理事（若しくは副学長）と総長特別補佐（男女共同参画担当）を置き、さらに「男女共同参画推進センター」などの恒常的支援体制を整備する。

平成25年8月8日

第11回東北大学男女共同参画シンポジウム アンケート集計結果

上記シンポジウムに参加された方々に、今後のシンポジウム開催の参考とするため、内容等に関してアンケートを行った。参加者136名のうち、80名の方から回答をいただいた。

Q1 あなたの性別と年齢をお教えてください。



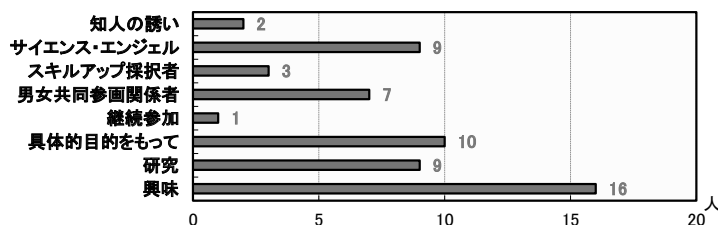
Q2 ご職業(もしよろしければ、会社名、職名も)をお教えてください



Q3 このシンポジウムのことをどこでお知りになりましたか。



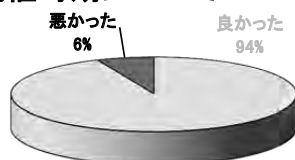
Q4 このシンポジウムに参加された動機は何ですか。



具体的目的の内訳:

研究、職場の活性化に必要と考えるから／講演を拝聴したかったから／理系女子としていかに社会貢献できるか考えるため／沢柳記念賞の講演会を聴講したかった／澤柳賞のお祝いを申し上げたくて／輝友会の受賞／SA輝友会が澤柳賞を受賞したこと、男女共同参画というテーマに興味があった／辻村先生の講演を伺いたかった／講演

Q5 開催時期について



「悪かった」とお答えの方、どのような時期がよいか:

学会の演題登録期限が近く、直前まで参加しようか迷った／3月／平日／忙しい時期なので学生は辛いです。

Q6 会場について

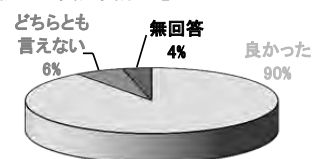


「悪かった」とお答えの方、どのような場所がよいか:

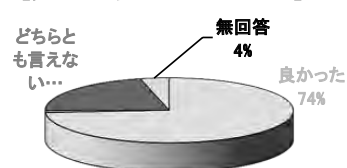
寒かったです／表示があったが入口が分かりにくかった／少し狭いか？ロケーションは良い

Q7 内容について

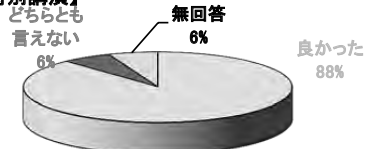
澤柳記念賞受賞講演】



【男女共同参画の取組について】



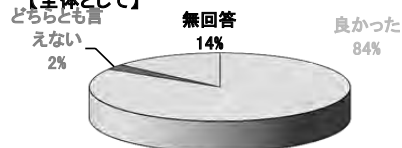
【特別講演】



【パネルディスカッション】



【全体として】



Q8東北大学における男女共同参画の取組についてご意見をお聞かせ下さい。

- ※ 保育所の増設、小学生児童のケア体制の整備が重要。
- ※ 活発に活動している印象。
- ※ 育児研究両立支援などありがたいと思っています。これからもよろしくお願い致します。
- ※ そろそろポジティブ・アクションを強く進めては。
- ※ 女性研究者支援事業には非常に助けられて感謝しております。継続的な支援をお願いしたいと思います。
- ※ ライフステージに対応した活躍支援を重視して欲しい。若い世代を支援することは重要であるが、男女共同参画の恩恵を受けてこなかった40代以降の世代(その中で必死に頑張ってきた)が面する問題(親の介護など)にも目を向けて欲しい。このことは女性だけでなく男性にも必要。介護休暇はあるが実際どれだけの人が取得しているのだろうか。子育て支援だけでなく介護支援も検討してもらえないだろうか。
- ※ 途上中。このまま頑張って継続していくこと。
- ※ 若手女性研究者の支援に一生懸命なイメージです。
- ※ いろいろ取り組んでいるのはすごいと思います。でも、東北大学の中の人でも知らない人は全然知らないし、興味も持たない人は持たない、といった印象です。
- ※ 女子学生に向けての情報発信はかなり充実している方だと思うが、男子学生に向けての情報発信をしていくことを考えた方がいいフェーズにきているのではないかと。意識を変えるのは難しく、時間がかかるので東北大でもたまにある研究費・旅費等の若手・女性研究者のサポート制度、応募制度募集を見かけたときに応募しようと考えてるが「条件付き(任期付き)不可」「PD不可」があることの制限を外してほしい。若手女性は現在任期付きが多いため制度があっても運用上限定された者へのサポートとなっており実効が低いと考える、という点を大学の執行部の人々に質問したかった。
- ※ 現在行われている取組については今後も継続して欲しい。自分もそのうちいくつかの取組を利用、助けたいと思っているので大変感謝している。
- ※ 奨励賞の年齢制限に関しては議論されることであるが、多少上限をあげるとしても、若い世代に限ること、次世代を見ずえた男女共同参画推進につながるという認識をもちました。実際に何歳が良いのかは、悩ましい部分ではありますが何らかの年齢制限はあった方がよいと思われます。
- ※ 私自身は様々なサポートを受けさせて頂き感謝しておりますが、必ずしも取組が十分に周知、浸透出来てはいないように感じます。もっともっと広くPRしてはいかがでしょうか？
- ※ サイエンス・エンジェル活動によって、自身の成長を実感しています。
- ※ 様々な取組があるので、周知を徹底できればより様々な制度が生きてくると思う。
- ※ SAのような大学公認の取組、保育施設の設置など進んできていると思う。
- ※ 今後は男子学生も巻き込んだ活動をしてみてはどうか。
- ※ 国内の他大学と比較して、取組の内容が多岐に渡り、一つ一つに女性の観点が取り入れられていると思う。一方で教員、職員、学生含めて男性の男女共同参画に対する意識が低い、というか当事者意識が薄いと思う。
- ※ 未だに課題はたくさん残されているが、前向きに取り組んでいると感じた。
- ※ 女性からの視点だけに偏っていないところが良いと思います。
- ※ ベビーシッター助成など利用させてもらっている。他大学に比べ充実しているのではないかとと思う。
- ※ ブラック企業として名高い東北大学として、どこまで働きやすい環境をいかに作りつつ、成果を効率良く上げる取組を中途半端で終わらずに続けて欲しい。
- ※ 自分が知る以上に東北大学が色々なことを行っていることが分かり、ためになった。
- ※ 良い取組だと思うので、もっと広めていきましょう！
- ※ 例えば女性休憩室などとても助かっています。ありがとうございます。
- ※ SAや研究職、職員への支援等、大学内での取組が知れて良かった。
- ※ とても進んでいると感じています。
- ※ 女子学生の利益にはなっているのではないのでしょうか。
- ※ 様々な取組をされていて、実際に女性研究者が少なながらも増えていることを知った。今後、さらに増えるように続けて欲しい。
- ※ 日本で初めて女子学生を受け入れたこともあり、男女共同参画の取組に積極的であるように思う。SAの活動を始めてからは、東北大の男女共同参画の取組について話を聞くことも多く、今後も積極的な取組を願う。
- ※ 私はSAに所属しているため、大学企画のジェンダー関係のシンポジウムがよく開催されていることを知っています。学生目線から言うと、東北大は共同参画の面でとても優れているし、力も入れていると思います。
- ※ 子育てしながら勤務していますが、周りの年配の方の意識とご理解を得られるように個人的に努力するのはかなり大変です。草の根の意識改革やFDなど、年代によっては必要であると思います。
- ※ 様々な支援事業が存在していて、とても良い。このような取組が広く認知されているのか、利用率のようなものが高いのか知りたい。
- ※ 大変意義のある活動だと思います。

- ※ 様々な取組が行われていることが分かりました。今後とも継続して行ってほしいです。
- ※ 東北大学では特に女性研究者のサポートが厚く、子供を持っても働ける環境を維持できるように支援していただいている制度があり大変有難いです。
- ※ 本日初めて知る取組もありましたが、充実していると感じます。もっと周知していけばより良いと思います。
- ※ 技術支援員の制度がよいと思います。
- ※ 旧GCOEジェンダー平等と多文化共生研究センターの蓄積がどのように活かされているか、情報がもう少し欲しかったと思っています。
- ※ 「東北大学」男女共同参画とその他の所の男女共同参画は区別されていますか？（区別するつもりですか？それとも日本社会全体の男女共同参画推進の一環として？）
- ※ 女性教員や学生のための支援を行うとともに、今回のようなシンポジウムを積極的に開催する点が良いと思います。ただこうした支援やイベントがあることを知らない人も多くいると思うので、もう少し広報を行うと良いと感じました。
- ※ 順調に取り組んでいると思われます。青葉山保育所の新設を至急実行すべきだと思います。
- ※ 辻村先生、大隅先生、田中真美先生ならびにご担当者の理事の先生方など、本当に多くの先生方のご尽力により、この十数年間に本学の状況は大きく変わり、大変に感謝しております。今の学生さん達がうらやましいです。
- ※ 理解しているつもり。

Q9男女共同参画推進に関連したシンポジウムで、何かご希望の企画がありましたらお書き下さい。

- ※ 保育所、小学生児童のケア体制関連。
- ※ 男性がもっと参加する企画があればよい。
- ※ 文系に関連した企画、学部生を対象にした企画。
- ※ 妊娠中や子育て中の教職員や学生が、子連れで遊ぶようなイベントなど、或いは託児付きで親同士がおしゃべりできるようなイベント。
- ※ 大学の職員、研究者のみならず、広い対象においてM字を乗り越えた経験を話してもらう。(ex.働き続けた、復帰してキャリアをアップできた。)
- ※ 学部生向けに理解を深める講演もして欲しい。パネルディスカッションはお子様のいる方をパネラーとしてお招きしてほしい。現実的な話を聞きたいです。
- ※ キャリア支援センターと合同の就職に関しての企画があればうれしいです。
- ※ 実際に企業などで活躍されている女性の方のお話なども聞きたいです。
- ※ 東北大学全体はもちろんだが、各部局ごとで、今回のようなシンポジウムを開き、教授クラスの先生方に参加を義務付け意識を変えるようなことが出来たらよいのではないかな。
- ※ SA、SAOGの声をもっと聞きたい。(特に学術界における)男性の意識改革についても議論すべきだ。
- ※ 企業の女性管理職に方の話が聞きたいです。
- ※ 企業各界からみた男女共同参画についてもっと知りたい。
- ※ 具体的な企画ではないが、ジェンダーに対する意識が高い人だけでなく、低い人に対する啓発も行っ
- ※ て欲しい。もうトップのリーダーシップは十分に発揮されていると思う。もっと草の根の意識の変革が必要では。
- ※ ワークショップ形式で、男性が男女共同参画にどのような考えを持っているのか知りたい。
- ※ 一般の人に参加してもらえる様になればと思います。
- ※ 大学と関連のない、中小企業や農業など他の職種、分野での取組を聞ける機会もあれば良いと思
- ※ 男女の意識の違いを埋める具体的な方法を考えたい。
- ※ 一般企業の方(研究者、技術者、もしくは企業の中で女性の働きやすい環境づくりに携わっている方)の講演が聴いてみたいです。
- ※ 女性だけではなく、男性の立場からの講演。
- ※ もっと多様性のある「報告者(講演)」による報告はもう少しあったらと(少し)思いました。
- ※ ロールモデルとして、子育てと仕事を両立されている様な女性の話を書く機会があると嬉しく思う。
- ※ 仕事と家庭を両立しているロールモデルによる講演会、相談会。ダイバーシティに傾いていると言うけれど、女性の側からの話が多いので、男性側の意見も聞ける講演。
- ※ 男性から見る男女共同参画の目線について、知りたい。パネルディスカッションで聞いた言葉「パパ友」という課題は新鮮感があって良いですね。
- ※ 昨年のように海外からの講演者を招いた企画があると良いと思います。
- ※ 本日の森大臣の講演のように、本学の出身者からのお話を聴かせていただけると有難いです。

Q10 今回のシンポジウムについて、ご感想をお聞かせ下さい。

- ※ 3時間くらいまでの長さが相応しいと思いました。
- ※ 全体的に良かった。男性職員、学生にも聞いて欲しい内容が多かった。
- ※ 参加者多数で、講演も刺激になりました。
- ※ 他の企画と掛け持ちで、部分的にしか参加できず申し訳ありませんでした。
- ※ 参加者が多くて少し狭かった。特に講演者の方のお席をゆったり確保できれば良かったのではないかと思います。スライドの縦横比が正しくなくて横長になっていました。ロゴマークなどの発表もありましたし、正しい比率で写していただきたかったです。
- ※ ジャンプアップ事業が終了した後、センターを立ち上げ持続的活動を行っていることは大変素晴らしいと思います。様々な活動を行う中でこのようなシンポジウムを今後も定期的に持つことは大事なことでと思う。
- ※ 男女参画の意識の低い人(活性化阻害因子)に聞かせたい。
- ※ ありがとうございます。大変勉強になりました。
- ※ ありがとうございます。
- ※ 森まさこ先生のお話がとても興味深く、さらに男女共同参画への関心がわきました。
- ※ 大変貴重なお話を聞くことが出来ました。
- ※ 実際に男女共同参画の第一線で活躍されている方のお話が聞けて良かったです。
- ※ サイエンス・エンジェル的女子学生の参加が促されたということだが、彼女たちと一緒に次世代をつくっていく男子学生の参加がほとんどない。男子学生の参加が重要ではないかと思うのでそのような働き掛けがあって欲しかった。
- ※ ここ数年参加しているが、今年は全体的な参加者数および男性の参加者が増加した印象を受け、嬉しく思った。しかし、会の中でも話に出たが、意識を変えたいと思う対象の人にこそ、こういったシンポジウムに出席してほしいと考えるため、何か良い方法はないか…と思う。
- ※ 選挙が近すぎましたね・・・
- ※ 男女共同参画がなぜ必要なのか、改めて考える機会になりました。多様な考え方、意見を聞く事が出来、良かったです。
- ※ 様々な方々の方々の話を聞くことができ、刺激になるとともに、現在自分は恵まれた中で仕事に取り組んでいることも感じる事が出来ました。また、女性が活躍するための方策だけでなく、もう少し「女性が活躍するメリット」についても焦点を当ててもいいような気が致しました。「女性＝結婚、出産、育児」ではないと思います。女性に関するディスカッションではいつもその点が気になります…。また、周囲の意識改革することは大切ですが、サポートする周囲への配慮へも目を向けて欲しいです。
- ※ 森まさこ氏のプレゼン力に感動しました。母子留学のバイタリティも素晴らしいです。
- ※ 森先生のご講演が興味深かったです。
- ※ 普段聞くことの少ない社会、経済面からの女性雇用環境をめぐる取り組みが勉強になりました。
- ※ 今後のキャリアを考える上で大変有意義な時間となった。
- ※ 全体的によく練られている印象を受けた。力強く、また実際の統計に基づいた論理的話をいくつも聴けて、とても嬉しい。
- ※ ジェンダーについての認識が変わった。
- ※ 私は政策にはあまり興味を持っていなかったのですが、国としても男女共同参画に積極的に取り組んでいることを知ることができ、良かったです。社会進出への不安が少し軽くなりました。
- ※ 興味深い話をたくさん聞けて参加してよかった。
- ※ 活用できていない資源。
- ※ 大隅先生の司会がお見事でした。
- ※ 大変良い機会を頂き、ありがとうございます。社会に出ても今までの経験を活かせたらと感ずることが
- ※ 男女共同参画について様々な話が聞けて有意義でした。
- ※ 自分の今後の振る舞いについて参考となる内容が聞けて良かった。
- ※ 一連のイベントなので仕方がないが全体通すと長い！
- ※ 森まさこ先生のお話がとても面白かったです。貴重な機会をいただき、ありがとうございました。
- ※ 初めてこのような会に参加しましたが、とても考えさせられました。
- ※ 男女共同参画について考える機会がなかったので、自分の意識を変えるのにいい機会となった。
- ※ 著名な方もいらして、非常に有意義であった。

- ※ 来年から企業で働くことになっている自分にとって、今日はとても勉強になりました。辻村さんや森さんをはじめ、行動力のある女性がここまで取り組まないと「男女共同参画」は日本で成り立たないのかと思うと、やはり昔からある人の意識を変えるという事は難しいのだなと感じました。
- ※ 辻村先生や森先生の貴重なお話をきけて良かったです。
- ※ 森議員の講演には勇気をいただきました。
- ※ 素晴らしい女性リーダーや女性研究者の話を聞くことができ、非常に「模範」になる方だと思いました。
- ※ 男女共同参画について様々な意見を聞くことができ、興味深かったです。
- ※ 森前大臣のご自身のお話も含めての力強いご講演を聴くことができ、大きなエネルギーを得られました。
- ※ とても有意義なシンポジウムでした。今後も男女共同参画社会に関して考えていきたいと思います。
- ※ 森まさこ議員のお話がよかったです。
- ※ 東北大学としての「男女共同参画」の「これまで」と「今」と「これから」を知る良い機会になりました。
- ※ 普段は自分一人で育児と仕事を両立しようと頑張っていますが、今のシンポジウムから社会から男女共同参画への取組を認識できて、良かったと思います。ありがとうございました。最後のポスドクの質問で周囲の育児サポート意識を高めるについてですが、自分の意識(育児期間は仕事効率低下するのは当たり前)と思えるようにするのも必要かも、と改めて思った。気づかせてくれてありがとう。
- ※ 森議員のお話がとても印象的でした。大臣として女性のため、最終的には社会のための取組を行い、結果を出しているところが本当に素晴らしいと感じました。
- ※ 森大臣の講演は良かったです。次回も政府関係者のお話が聞けると良いと思います。
- ※ 今の大学院生の世代が、差別を感じたことがない、という話が印象的でした。「周りの意識を変える」という取組が実現することを期待しています。
- ※ パネルディスカッションではいい話が聞けた。もう少しフロアからの意見もあってもよいか。

第3回 仙台Iゾンタクラブ

東北大学大学院 女子学生海外渡航 支援事業



世界で活躍できる女性の人材
育成のため、渡航費用を
支援します。

応募資格

本学に在籍する大学院女子学生(渡航時にも本学大学院女子学生の身分を有する者。研究分野、国籍は問わない。なお、これまで海外において開催される国際学会等で研究発表を行う機会が少なかった者を優先する。)

応募要件 ※下記(1)～(4)を全て満たすものであること。

- 1 平成26年7月～平成27年3月の間に海外で開催される国際学会、シンポジウム、セミナー及び研究会等であること。(学会運営のための委員会等は対象としない。)
- 2 特定の主題について、当該大学院生が研究発表を行うことを目的として、参加するもの。(資料収集のための参加等は対象としない。)
- 3 本事業に応募するものと同一内容で他からの助成を受けていないもの。
- 4 本学の最寄りの国際空港から開催地の最寄りの空港までの、最も経済的な経路による、低廉な航空運賃(空港使用料・航空保険料等を含む。)が原則15万円以内であるもの。

採択件数

2件(予定)

※採択者はその氏名、学年、参加した国際学会等の名称及び報告内容について、仙台Iゾンタクラブホームページ上で紹介されることがあるので、あらかじめ承知すること。
※採択後、学外へ転出、またはやむを得ない事情により、申請内容について変更が生じた場合又は参加を取り止めた場合は、速やかに下記問い合わせ先へ連絡すること。

【応募書類提出先・問い合わせ先】 応募書類は郵送のみにて受け付けます。

東北大学男女共同参画推進センター(総務企画部総務課総務係)

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1

TEL:022-217-4811

E-mail: danjyo@bureau.tohoku.ac.jp

HP: http://www.bureau.tohoku.ac.jp/danjyo/

支援内容

申請に基づき、渡航に係る費用を15万円を上限として、事後に支給(精算払)する。

応募方法

下記書類を郵送にて、応募書類提出先まで送付すること。

- (1) 応募申請書(下記ホームページよりダウンロードすること。)
- (2) 発表演題(予定)の英文アブストラクト(様式任意)
※発表演題と発表者名(共同発表者があれば、その氏名)も記入すること。
- (3) 航空運賃見積書
※エコノミークラスで、開催地と本邦間の最も経済的な経路による航空運賃(空港使用料・航空保険料等を含む。)
- (4) 参加する国際学会等の概要が分かる書類(開催通知又はプログラム等)
※申請時点で取り寄せることができる。当該国際学会等の概要(開催期間、全体会、分科会等の構成が記載されたもの)がわかるもの、もしくは会議主催者からの採録通知等。

応募締切

平成26年6月16日(月) 当日消印有効

※審査結果は、応募者へ6月下旬ごろ本人宛てに通知予定。

採択者の義務

- 1 帰国後30日以内に別に定める様式により、報告書を提出すること。
※この報告書は仙台Iゾンタクラブへ送付するほか、本学男女共同参画推進センターホームページに掲載する。
- 2 事後に本事業出資者である仙台Iゾンタクラブの例会において、国際学会等での発表や体験などについて報告すること。

第3回 仙台Iソントクラブ 東北大学大学院 女子学生海外渡航支援事業 公募要項

【主旨および目的】

2007（平成19）年に本学創立100周年を記念して、国際理解と社会奉仕、女性の社会的地位向上を目指す団体「仙台Iソントクラブ」から、これからの社会を担う前途有為な人材への支援として、本学に在籍する大学院女子学生を対象とした支援金（名称：仙台Iソントクラブローズ支援金）が本学へ贈呈されました。

2012（平成24）年度からは、仙台Iソントクラブ 東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業として継続されており、海外において開催される国際学会等で研究発表を行う大学院女子学生を対象として、その渡航に係る費用を支援することにより、世界で活躍できる女性の人材育成並びに本学における男女共同参画を推進することを目的として実施されるものです。

【応募資格】

本学に在籍する大学院女子学生（渡航時にも本学大学院女子学生の身分を有する者。研究分野、国籍は問わない。なお、これまで海外において開催される国際学会等で研究発表を行う機会が少なかった者を優先する。）

【応募要件】 ※下記（1）～（4）を全て満たすものであること。

- （1）平成26年7月～平成27年3月の間に海外で開催される国際学会、シンポジウム、セミナー及び研究集会等であること。（学会運営のための委員会等は対象としない。）
- （2）特定の主題について、当該大学院生が研究発表を行うことを目的として参加するもの。（資料収集のための参加等は対象としない。）
- （3）本事業に応募するものと同一内容で他からの助成を受けていないもの。
- （4）本学の最寄りの国際空港から開催地の最寄りの空港までの、最も経済的な経路による、低廉な航空運賃（空港使用料・航空保険料等を含む。）が原則15万円以内であるもの。

【採択件数】

2件（予定）

【支援内容】

申請に基づき、渡航に係る費用を、15万円を上限として、事後に支給（精算払）する。

【応募方法】

下記書類を郵送にて、応募書類提出先まで送付すること。

(1) 応募申請書（下記ホームページよりダウンロードすること。）

(2) 発表演題（予定）の英文アブストラクト（様式任意）※

※発表演題と発表者名（共同発表者があれば、その氏名）も記入すること。

(3) 航空運賃見積書※

※エコノミークラスで、開催地と本邦間の最も経済的な経路による航空運賃（空港使用料・航空保険料等を含む。）

(4) 参加する国際学会等の概要が分かる書類（開催通知又はプログラム等）※

※申請時点で取り寄せることができる、当該国際学会等の概要－開催期間、全体会、分科会等の構成が記載されたもの－がわかるもの、もしくは会議主催者からの採録通知等。

【注意事項】

(1) 応募にあたっては、指導教員の承認を受けること。

(2) 同一研究室内で同一国際学会等への渡航支援を希望する女子学生が複数いる場合、当該研究室教授等は申請書の推薦欄に推薦順位も記載すること。

(3) 提出された申請書等は原則として返却しない。

(4) 審査の過程において又は採択された場合、さらに必要な資料の別途作成、提出を求める場合がある。

(5) 申請内容について、採用後に大幅な変更が生じた場合は採用を取り消す場合がある。

(6) 申請は1名1件限りとする。

【応募締切】

平成26年6月16日（月）当日消印有効

【結果通知】

6月下旬ごろ本人宛てに通知予定

【採択者の義務】

(1) 帰国後30日以内に別に定める様式により、報告書を提出すること※。

※この報告書は仙台Iゾンタクラブへ送付するほか、本学男女共同参画委員会ホームページへ掲載する。

(2) 事後に仙台Iゾンタクラブの例会において、国際学会等での発表や体験などについて報告すること。

【その他】

- (1) 採択者はその氏名、学年、参加した国際学会等の名称及び報告内容について、仙台 I ソンタクラブホームページ上で紹介されることがあるので、あらかじめ承知すること。
- (2) 採択後、学外へ転出、またはやむを得ない事情により、申請内容について変更が生じた場合又は参加を取り止めた場合は、速やかに下記問い合わせ先へ連絡すること。

【応募書類提出先及び問い合わせ先】

応募書類は郵送のみにて受け付けます。

〒980-8577 仙台市青葉区片平 2-1-1

東北大学男女共同参画推進センター（総務企画部総務課総務係）

電話番号：022-217-4811

メールアドレス：danjyo@bureau.tohoku.ac.jp

ホームページ: <http://www.bureau.tohoku.ac.jp/danjyo/>

平成26年度 第1回東北大学

澤柳政太郎記念 東北大学男女共同参画賞 (澤柳記念賞) 公募

東北大学に脈々と受け継がれる
男女共同参画の精神を広げよう

東北大学は初代総長であった澤柳政太郎氏により打ち出された
「門戸開放」という理念のもとに、

1913年(大正2年)に全国に先駆けて帝国大学の門戸を女性に開きました。
それから100年の歴史を経て、本学ではさらなる男女共同参画社会を目指し
澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞(通称:澤柳記念賞)を創設しました。

この賞はアカデミアにおける男女共同参画の先駆として
各分野で活躍し多大な貢献をなした方々を選考し顕彰いたします。
今年度下記の要領で募集いたしますので、推薦をお願いいたします。

応募締切

平成26年 **7月31日(木)** 当日消印有効

受賞課題発表

平成26年 **9月22日(月)**

受賞内容

A 澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞
(東北大学内外に関わらず男女共同参画に関する研究や活動につ
いて顕著な成果を挙げている個人またはグループ)

B 澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画奨励賞
(東北大学内外に関わらず男女共同参画に関する研究や活動につ
いて顕著な成果を挙げている若手(38歳以下)の個人または若手
で構成されるグループ)

- ◎ 受賞は上記A、B各1件の合計2件です。
- ◎ 上記AとBへの重複推薦はできません。
- ◎ 選考委員会にて受賞者を決定いたします。
- ◎ 受賞者(受賞グループ)は、受賞年に開催される東北大学男女共同参画シンポジウム(秋に開催予定)で成果を発表していただきます。

対象資格

- ◎ 東北大学の内外に関わらず、個人、グループが対象です。
- ◎ 本賞に相応しい個人、グループを自薦・他薦できます。

推薦方法

以下の①～③を下記提出先まで郵便またはメールにて提出して下さい。

- ① 推薦書(下記ホームページよりダウンロードして下さい。)
- ② 成果資料等(成果が分かりやすい業績一覧表、代表的な論文、著書、報告書、活動内容などをまとめたものや成果資料等。)
- ③ 推薦理由書

注意事項

- ◎ 提出された書類等は原則として返却しません。
- ◎ 後日参考資料の追加提出をお願いすることがあります。

【提出先・お問合せ先】

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1

東北大学男女共同参画推進センター
(総務企画部総務課総務係)

Tel. 022-217-4811

メールアドレス: danjyo@bureau.tohoku.ac.jp

ホームページ: <http://www.bureau.tohoku.ac.jp/danjyo/>



平成 26 年度 第 1 回東北大学
澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞
(通称：澤柳記念賞) 公募要項

【主旨および目的】

東北大学は初代総長であった澤柳政太郎により打ち出された「門戸開放」という理念のもとに、1913 年（大正 2 年）に全国に先駆けて帝国大学の門戸を女性に開きました。それから 100 年の時を経て、本学ではさらなる男女共同参画社会を目指し澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（通称：澤柳記念賞）を創設しました。この賞はアカデミアにおける男女共同参画の先駆として各分野で活躍し多大な貢献をなした方々を選考し顕彰いたします。

今年度下記の要領で募集いたしますので、推薦をお願いいたします。

【種類】

- A：澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（東北大学内外に関わらず男女共同参画に関する研究や活動について顕著な成果を挙げている個人またはグループ）
- B：澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画奨励賞（東北大学内外に関わらず男女共同参画に関する研究や活動について顕著な成果を挙げている若手（38 歳以下）の個人または若手で構成されるグループ）

- ・受賞は上記 A、B 各 1 件の合計 2 件です。
- ・上記 A と B への重複推薦はできません。
- ・選考委員会にて受賞者を決定いたします。
- ・受賞者（受賞グループ）は、受賞年に開催される東北大学男女共同参画シンポジウム（秋に開催予定）で成果を発表していただきます。

【対象資格】

- ・東北大学の内外に関わらず、個人、グループが対象です。
- ・本賞に相応しい個人、グループを自薦・他薦できます。

【推薦方法】

以下の（１）～（３）を下記提出先まで郵便またはメールにて提出して下さい。

- （１）推薦書（下記ホームページよりダウンロードして下さい。）
- （２）成果資料等（成果が分かりやすい業績一覧表、代表的な論文、著書、報

告書、活動内容などをまとめたものや成果資料等。)

(3) 推薦理由書

【提出先・問合せ先】

〒980-8577 仙台市青葉区片平 2-1-1

東北大学男女共同参画推進センター（総務企画部総務課総務係）

電話番号：022-217-4811

メールアドレス：danjyo@bureau.tohoku.ac.jp

ホームページ：<http://www.bureau.tohoku.ac.jp/danjyo/>

【注意事項】

- ・提出された書類等は原則として返却しません。
- ・後日参考資料の追加提出をお願いすることがあります。

【応募締切】

平成 26 年 7 月 31 日（木）当日消印有効

【受賞課題発表】

平成 26 年 9 月 22 日

(事後評価)

都の都ジャンプアップ事業 for 2013

(実施期間：平成 21～25 年度)

実施機関：東北大学（総括責任者：里見 進）

プロジェクトの概要

(1) 新規養成女性研究者の採用計画

	H21 年度	H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度
理学系	2 名	2 名	1 名	3 名	1 名
工学系	4 名	2 名	6 名	1 名	1 名
農学系	2 名	2 名	1 名	1 名	1 名

(2) 女性研究者養成のための取組内容

沢柳フェローとして総長が任命した女性教授をメンターに充当する。各研究分野の動向を熟知している部局メンターも充当し、複数メンター制による助言・指導体制を確立する。

①世界トップクラス研究リーダー養成プログラム：異分野融合力アップ、組織・研究マネジメント力アップ、研究実務能力アップのセミナーを行い、各能力の向上を図る。

②新ネットワーク創生プログラム：女性研究者のための情報を共有・発信するとともに、積極的に研究を外部へ発信し、女性研究者が研究を先導できる研究体制の確立につなげる。

③ワークライフバランス支援プログラム：ワークライフバランスに関するセミナーやワークショップを行い、現在の制度等の周知や男性も含めた男女共同参画の意識啓発を行い女性研究者の研究スタイルの確立を支援する。

(3) 期待される効果

理・工・農学分野における女性研究者数の増加。女性研究者の能力及び職階のジャンプアップ。異分野融合による新たな学問の創出。男性も含めた全学の男女共同参画意識の醸成。

(1) 評価結果

総合評価	目標達成度	女性研究者 支援システム 改革	取組の内容	実施体制	今後の進め方
A	a	a	a	a	a

総合評価：A（所期の計画と同等の取組が行われている）

(2) 評価コメント

理・工・農学系分野の優れた女性教員の採用を、大学全体としてのみならず部局でも積極的に推進した。さらに、女性研究者のリーダーシップの育成を目指した質の高い養成システムを構築

し、管理職への女性教員の登用を進めたことは評価できる。

- ・ **目標達成度**：東日本大震災の影響により、外部機関へ異動する女性教員があったにもかかわらず、部局が女性教員を積極的に採用した。震災の影響を考慮すれば、概ね目標を達成したものとして評価できる。
- ・ **女性研究者支援システム改革**：部局予算を傾斜配分する際の評価基準として、女性教員数や女性教員採用比率を加えシステム改革を推進したこと、複数メンター制やセミナーの実施などにより質の高い養成システムを構築したことは評価できる。今後は、女性教員の上位職への登用を積極的に進めることを期待する。
- ・ **取組の内容**：スキルアップ支援、世界トップクラス研究リーダー養成、研究スタイル確立支援、沢柳フェローによる個別相談、男性教員に対するベビーシッター代の補助などの取組を実施するとともにセミナー等で行ったアンケート結果をフィードバックし、次回以降の開催へ反映させていることは評価できる。
- ・ **実施体制**：担当理事を室長とする女性研究者育成支援推進室を設置し、各事業担当の班員には対象部局の教員が必ず参加する体制を構築し、部局との連携を図ったことは評価できる。人事に関しては部局ごとの方針が基本となっていることから、今後は総長のリーダーシップのもと一層のシステム改革に取り組むことを期待する。
- ・ **今後の進め方**：平成 26 年度に男女共同参画推進センターを設置し、総長裁量経費によりこれまでの女性研究者支援・養成策を継続しており評価できる。今後は、教員公募に多くの優れた女性研究者が応募し、女性教員の採用が促進されるような仕組みを構築し、その仕組みを他機関へ波及させていくことを期待する。



東北大学 男女共同参画推進センター開設

平成26年4月、「東北大学における男女共同参画推進のための行動指針」にもとづき、本学全体の男女共同参画活動を円滑に推進するため、東北大学男女共同参画推進センターが設置されました。当センターでは、男女共同参画委員会を支援し、女性研究者等への支援事業、学内外への情報発信など、各種の男女共同参画に関する施策を実施してまいります。これからこのニュースレターで、さまざまな取り組みや公募情報などをお知らせしていきたいと思っております。このニュースレターが、みなさんとセンターを結ぶ懸け橋となることを祈っております。

センター愛称・ロゴマーク 募集のお知らせ

このたび、男女共同参画推進センターでは、愛称・ロゴマークを広く公募いたします。決定したデザインは、今後のセンターのシンボルとして、看板、ポスターや各種製作物、ホームページ等に広く活用いたします。皆さま奮ってご応募ください。

募集要項

- 応募資格** どなたでも応募できます。
- 応募方法** 所定の応募用紙で作成し、郵送もしくは電子メールにて応募してください。
- 「応募用紙」のダウンロード
<http://www.morihime.tohoku.ac.jp/>
- 応募期間** 平成26年8月15日（当日消印有効）
- 採用作品** ●最優秀賞（採用作品）…愛称 1点／ロゴ 1点
 ●優秀賞 …愛称 数点／ロゴ 数点
 賞状および副賞の授与

問合せ・応募先

〒980-8577 宮城県仙台市青葉区片平2-1-1
 東北大学男女共同参画推進センター
 「愛称・ロゴマーク募集係」宛

E-mail t_boshu@morihime.tohoku.ac.jp
 URL <http://www.morihime.tohoku.ac.jp>
 TEL 022-217-6092

たくさんのご応募
お待ちしております！

東北大学男女共同参画推進センター 職員の紹介



理事（総務・国際展開・事務統括担当）
 男女共同参画推進センター
 センター長
 植木 俊哉



総長特別補佐
 男女共同参画推進センター
 副センター長
 大隅 典子
 （医学系研究科 教授）



男女共同参画推進センター
 副センター長
 田中 真美
 （医工学研究科／
 工学研究科 教授）



男女共同参画推進センター
 副センター長
 米永 一郎
 （金属材料研究所 教授）

スタッフ／橋爪圭（助手）、小飯塚さやか、佐和由紀、野中久美

男女共同参画推進のための行動指針

- 両立支援・環境整備 女性リーダー育成 次世代育成
 顕彰制度 地域連携 国際化対応 支援推進体制



平成26年度 サイエンス・エンジェル

センターのイベント情報
 7月30日(水)、31日(木) オープンキャンパス for 女子高生
 8月9日(土)、10日(日) 2014 夏休みサイエンススクエア（国立科学博物館）
 8月21日(木) 楽しい理科のはなし ～不思議の箱を開けよう～ 他

センターでは女性研究者に役立つ情報をメールで配信しております。
 興味のある方は是非、女性研究者メーリングリストにご登録ください。

東北大学男女共同参画推進センター

Tohoku University Center for Gender Equality Promotion

TEL 022-217-6092

〒980-8577 宮城県仙台市青葉区片平2-1-1
 E-mail mh_office@morihime.tohoku.ac.jp
 HP www.morihime.tohoku.ac.jp



支援要員制度を利用して



金子 美華
東洋経済大学 経済学部 経済学系 准教授

「支援要員制度」には、東北大学に在籍した2013年度からお世話になっていました。当時、6歳、4歳の2人の子供で、第2子が特異性小児ネフローゼ症候群で11回以上の通院治療中でした。前住地で同様の制度を利用していたので、「東北大学にもあるに違いない」と探し、年度途中で「なが」が「なわ」にすがるくらいに「なわ」に合致したところ、採択して頂きました。

私の研究分野は、いわゆる「ウェット」な実験系、ある程度まではマンパワー（実験の量）が従事に比例します。準備など実験に必須の業務外、他、実験材料調達の様々な事務作業的な業務が支援要員によって安定的に行われると、実験結果の精度、考察、次の実験計画などの知的活動にじっくり取り組むことができ、負担感が軽減されます。東北大学在任1年目にベースを築き、研究を遂行する上で、短時間でも毎日安定してラボワークに従事してくれる支援要員の存在が非常に助けになりました。ただ、ラボワーク系支援要員の方は、ご自身の研究者としてのキャリアを最優先に考えていない方が雇用されることかあるうかとも思います。本制度が、利用者にとってだけでなく、採用される人材にとっても、より安定的に運営されることを願っています。

Science Angel

平成26年度 サイエンス・エンジェル活動実績 (2015年2月1日現在)

6/7(土) SAオリエンテーション
6/26(木) 出張セミナー 秋田県立秋田南高等学校
7/20(日) 学部公開「宮城リウ・エンジェル」2014への出席
7/23(木) 日本科学未来館「サイエンス・エンジェル」ワークショップの実施
7/30(火) オークランド・31(木) オークランド・10(日) 東立科学博物館「サイエンス・エンジェル」2014への出席
8/21(木) 東立科学博物館「サイエンス・エンジェル」2014への出席
8/21(木) 東立科学博物館「サイエンス・エンジェル」2014への出席
9/5(金) 出張セミナー 茨城県立水戸第一高等学校
9/11(木) 出張セミナー 山形県立山形南高等学校
10/4(木) 第12回男女共同参画学術会議推進シンポジウムへの参加
10/16(木) 出張セミナー 宮城県宮城第一高等学校
10/18(土) 出張セミナー 山形県立山形南高等学校
11/15(土) サイエンス・エンジェル2014への出席
11/22(木) 出張セミナー 山形県立山形南高等学校
12/22(木) 出張セミナー 宮城県宮城第一高等学校
1月22日(月) 出張セミナー 青森県立三木高等学校
2月16日(月) 出張セミナー 仙台市立仙台南高等学校
3月17日(火) 出張セミナー 仙台市立仙台南高等学校 ※2月以降は予定
3月24(火) 出張セミナー 仙台市立仙台南高等学校

平成27年度サイエンス・エンジェル事業
1月30日～3月20日(二次募集)～5月8日(二次募集)
※応募要員は各所属の担当教員(事務職員)へ提出して下さい。*事務手続き上、各所属でSA活動費を各所属の担当教員(事務職員)へ提出して下さい。
SA活動費を各所属の担当教員(事務職員)へ提出して下さい。SA活動費を各所属の担当教員(事務職員)へ提出して下さい。

東北大学男女共同参画推進センター

Toboku University Center for Gender Equality Promotion

TEL 022-217-6092

FAX 022-217-6092

Email tumug@merhime.tohoku.ac.jp HP www.merhime.tohoku.ac.jp



(4)

Report of the Seminar



『女性研究者のためのメディア対応セミナー』の実施

女性リーダー育成の一環として、「女性研究者のためのメディア対応セミナー」を行いました。初めに、熊爪センター執事より、挨拶と会の趣旨説明がありました。本セミナーでは、メディア対応のノウハウがある大手広告代理店から講師をお招きし、主にテレビと取材の際の具体的なノウハウをお話しいただきました。参加者からは「聞き手が小さなポイントまでの説明でとても疲れた」とも発言がありました。「わかりやすく伝える」「テクニックを本場にすき」とも話されていて、とても面白かったです。今後の感想をいただきました。参加者は30名となり会場は満席となりました。最後に、次期セミナー長より閉会の挨拶が行われました。セミナー後、講師と沢井フェローである、本間副センター長、杉本美穂子氏、荒沢孝子氏を囲んで、女性研究者が集い、雑談を取りながら茶話会が行われました。メディア対応や写真の有効利用について本間副センター長より助言がありました。若手の先生方からは沢井フェローの先生方や講師にアドバイスを求める意見も見られました。

【開催日】 2014年12月16日(火)11:00-13:00

【会場】 片平北門会館2Fサロニール

【参加した沢井フェロー】山崎孝子先生、杉本美穂子先生、荒沢孝子先生

【参加者】 30名



セミナー後の茶話会の様子

Information

川内けやき保育園

小学校前卒の幼稚園に通うまでの子どもを育てる東北大学附属幼稚園が利用することができる託児施設です。

【定員】 30名

【保育日】 月曜日から土曜日まで(ただし、祝祭日及び年末年始の休日を除く。)

【保育時間】 常時保育 18:00～19:00 (延長保育 19:00～20:00(土曜日を除く。))

【入園資格】 東北大学の教職員や学生生活の指導を必要とする専攻のお子さんです。

※入園料 東北大学附属幼稚園に入園するまでの期間に必要です。

※入園料 東北大学附属幼稚園に入園するまでの期間に必要です。

※入園料 東北大学附属幼稚園に入園するまでの期間に必要です。

※入園料 東北大学附属幼稚園に入園するまでの期間に必要です。

※入園料 東北大学附属幼稚園に入園するまでの期間に必要です。

※入園料 東北大学附属幼稚園に入園するまでの期間に必要です。

※入園料 東北大学附属幼稚園に入園するまでの期間に必要です。

※入園料 東北大学附属幼稚園に入園するまでの期間に必要です。

※入園料 東北大学附属幼稚園に入園するまでの期間に必要です。

※入園料 東北大学附属幼稚園に入園するまでの期間に必要です。

※入園料 東北大学附属幼稚園に入園するまでの期間に必要です。

※入園料 東北大学附属幼稚園に入園するまでの期間に必要です。

※入園料 東北大学附属幼稚園に入園するまでの期間に必要です。

※入園料 東北大学附属幼稚園に入園するまでの期間に必要です。

※入園料 東北大学附属幼稚園に入園するまでの期間に必要です。

東北大学男女共同参画推進センター[TUMUG]ニュースレター

(1)



2015
VOL. 2

TUMUGとは「Tohoku University(東北大学)」「University of Medicine(東北大学医学部)」「Gender(ジェンダー、性別)」「Equal(平等)」「Promotion(促進)」の略称で、東北大学が「男女共同参画の推進」を「TUMUG」の活動として展開していくことを目指しています。



T O P I C S

オリヴァー・スミスフェロー教授、前田信代教授ご夫妻来訪

- 01 ▶ 当センターのロゴマーク決定
- ▶ 平成26年度女性研究者受賞者紹介
- 02 ▶ 募集実施プログラム
- ▶ 利用者の声
- 03 ▶ 森まさこ氏、河村潤子氏、辻村みよ子氏来訪
- ▶ オリヴァー・スミスフェロー教授、前田信代教授ご夫妻来訪
- 04 ▶ コラム、金子美華先生



当センターのロゴマークが決まりました。

制作者／群馬県在住 小池友基氏

社の影印台を鑑賞するキヤノンの水モーターに、人々が手を取り、まをイメージしています。また、葉の形は四重のクローバーにも見え、幸せな未来をも想像されます。東北大学男女共同参画推進センターは、年齢・性別を問わず、誰もが夢や希望を持って、あらゆる分野で活躍できる社会を目指して、男女共同参画の推進に取り組んでいます。

Winning Prize!

受賞・登用者紹介

女性リーダー育成の取り組みのひとつとして、本センターでは学内の女性研究者の受賞や登用を奨励しています。皆さんおめでとうございます！

▶ 小谷 元子 WPI-AMR組織系、理学研究科、教授
東北大学 副理事(研究担当) / 4月

▶ 本橋 ほづみ 東北大学加齢医学研究所、教授
東北大学 加齢医学研究所副研究科長 / 4月
東北大学 遺伝子実験センター長 / 4月

▶ 松入重一代 工学研究科 / 准教授
期インテリジェント・システム工学系副研究科長 / 9月

▶ 濱田川口 典子 生命科学研究科 / PD
社団法人日本核子物理学 第4期 OMI 委員 / 6月

▶ 梅津 理恵 金属材料研究科 / 准教授
第19回日本女性科学者の会奨励賞受賞
金属材料研究科副研究科長 / 4月
金属材料研究科副研究科長 / 4月
金属材料研究科副研究科長 / 4月

▶ 鬼野 由美 農学研究科 / 助教
東北大学先端医療研究センター / 7月

▶ 渡邊 伶子 加齢医学研究所 / 博士研究員
NIH-Japan-SPS Symposium 2014 Poster Award / 10月

▶ 長野 明子 情報科学研究科 / 准教授
日本英語学会2014年度学術大会(論文) / 10月

▶ 菅野 恵美 医学研究科 / 講師
第44回日本創成発育学会 ポスター発表賞(論文) / 12月

▶ 関口 仁子 理学研究科 / 准教授
お茶の水女子大学 第20回 漢字学賞 受賞 / 12月

▶ 田中 真美 医学研究科 / 教授
第11回(平成26年度)日本学術振興会賞 / 2月

▶ 出浦 桃子 金属材料研究科 / 助教
第18回日本女性科学者の会奨励賞(小論文) / 3月

Our Action Agenda

募集実施プログラム

平成27年度の募集実施プログラムをお知らせします。ベビーシッター・利用料等補助は男性の方も利用可能です。内容によって対象、締切日が異なりますのでご注意ください。申請書（応募申請書）は男女共同参画推進センターのホームページからダウンロードしてください。

プログラム名	内容	対象部局	対象者	応募締切（平成27年）
1 研究支援要員	研究支援要員雇用のために必要な人件費の補助（上限200万円）	自然科学系部局	育児を行う女性研究者	
2 研究支援要員（シェア型）	研究者同士で専任補佐員2名（男女共同参画推進センターより派遣）をシェア		専任や派遣、国の専任委員会等の社会貢献を行う女性研究者	2月16日
3 ベビーシッター・利用料等補助	研究、講義、出張時のベビーシッター・利用料等の補助（上限10万円）		子供を持つ教員、技術職員、PD、博士学生	
4 スタートアップ研究費	一年目100万円、二年目50万円の研究費を支援	全部局	新規採用の女性教員（助教以上）	7月10日
5 研究スキルアップ経費	会議・シンポジウム等の旅費支援 開催地が海外：上限40万円、国内：上限15万円		女性教員（准教授、講師、助教）	（第一回）4月15日 （第二回）10月中旬
6 サイエンス・エンジェル	高校出張セミナー、オープンキャンパス、科学イベント企画・実施	自然科学系研究科	自然科学系の大学院女子学生	（一次締切）3月20日 （二次締切）5月8日
7 仙台1バンタクラブ 東北大学大学院 女子学生海外渡航支援	海外で開催される会議、シンポジウム等の旅費支援（上限15万円）	全研究科	大学院女子学生	6月頃 ※5月に募集開始

平成26年度 各種制度実施状況	・支援要員制度 ・支援要員制度（シェア型） ・ベビーシッター・利用料補助制度	8件採択 2件採択 28件採択	・スタートアップ研究費 ・研究スキルアップ経費 ・サイエンス・エンジェル（SA）	6件採択 31件採択 71名採用	女子学生海外渡航支援事業 2件採択
--------------------	--	-----------------------	--	------------------------	----------------------

[利用者の声]



第2子出産関連という時期に、本制度に応募し採用していただきました。3月というぎりぎりの時期に決まったため、研究支援要員を募るのに苦労しましたが、何と見つかりました。仕事、育児ともに大変忙しいときに、研究支援要員の方がいないわけはいままで研究を続けることはできませんでした。研究を続けることができなくなってしまうと思います。大変感謝しております。また機会があればと思います。（研究支援要員を利用）

この制度を知った経緯は、研究室の同僚が申し込もうとしていて、私に紹介してくれました。男女共同参画の取り組みの一部については知っていたのですが、働く女性研究者を対象としているイメージがあり、非学制的の私でも利用できるということは、同僚が教えてくれたきっかけでした。子供が小さいというは、学会や会議の参加が難しくなっていたので、思っていたのなのですが、この支援制度を利用できることになりました。積極的に参加できるようになりました。（ベビーシッター・利用料等補助を利用）

EAST（東部地区の教職員・学生を対象としたグループウェア）にて本支援制度を知り、スタートアップ研究費と研究スキルアップ経費（国際派血圧学会2014（ギリシャ・アテネ）で発表）を利用していただきました。私は、昨年3月に大学院を卒業し4月に教員に採用されたばかりで、申請書等の研究費があまりありませんでしたので、研究や学会参加に対する経済的な支援は非常に有難く、大変感謝しております。このような支援は、研究そのものを円滑に進めていけるだけでなく、研究者としてのキャリア形成の上でも非常に有用だと思います。今後ぜひ、このような支援を継続して頂き、多くの女性、特に若手の女性研究者がその恩恵を受けられればいいと思います。（スタートアップ研究費、研究スキルアップ経費を利用）

9月までに女性研究者育成支援推進室からのメールにて本経費の募集を知りました。ちょうど1月の学会へ参加することを決めたときだったので、さっそく応募しました。選考結果の予定日を過ぎても通知が来なかった頃、11月上旬に採択のご連絡をいただきました。本経費の募集が2回しかなく、学会応募のタイミングに合わないかと申請しにくいのが少し難点かもしれませんが、ご支援の賜でケンブリッジ大学でやったカンファレンスに参加することができ、国際発表も行い、海外の研究者と大変有意義な時間を共有することができました。ありがとうございました。（研究スキルアップ経費を利用）

サイエンス・エンジェル

サイエンス・エンジェル（SA）活動は平成18年度に始まりました。平成27年度は10周年を迎えます。活動の詳細はセンターホームページでご覧いただけます。活動は、センターのページでサポートし、SAは研究・学業に支障のない範囲でイベントを担当します。次世代を担う小中高生とSAは共に成長し、また、国内外で活躍するSAOGの女性研究者のネットワークの一員となることで多様なキャリアの情報を得ることができま。



7月29日 材料フェスタ in 仙台



7月30、31日 オープンキャンパス for 女子高校生2014



9月8日、9日 サイエンスフェア



9月20日 楽しい理科のなし



9月25日、6日 出陣セミナー 宮城県立電気第一高等学校



11月7日 ノルウェー大使 東北大学訪

仙台1バンタクラブ 東北大学大学院
女子学生海外渡航支援

この制度は、国際理解と社会貢献、女性の社会的地位向上を目指す団体「仙台1バンタクラブ」から、これからの社会を担う前途有望な人材への支援として、本学に在籍する大学院女子学生を対象に開かれた支援金で運営しています。2007（平成19）年から始まり、今年で9年目の取組となります。

海外で開催される国際学会等で研究発表を行う大学院女子学生の選別に係る費用を支援することにより、世界で活躍できる女性の人材育成並びに本学における男女共同参画を推進することを目的としています。

[利用者の声]

今回、IEEE EMCという学会に海外渡航支援事業から援助をいただき、参加させていただきました。この学会は私の研究している電気工学分野では最大級の学会とされており、このような大規模な国際学会へと参加し、自分の研究を発表するという、研究者として大変有意義な時間を過ごすことができました。貴重な経験を得られたことに感謝しております。

Welcome!

森まさこ氏、河村潤子氏、
辻村みよ子氏が本センターを来訪

11月29日（土）に開催した第11回東北大学男女共同参画シンポジウムに来賓としてお越し頂いた森まさこ氏（前女性活力・子育て支援担当大臣）、河村潤子氏（文部科学省生涯学習政策局長）、そして前東北大学法学部研究科教授（理・明治大学法経科大等教授）であり、第1回選考記念賞を受賞された辻村みよ子氏が本センターを来訪されました。

ノーベル生理学・医学賞受賞
オリヴァー・スミティース教授、
前田信代教授ご夫妻 本センター来訪

ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授であり、2007年ノーベル生理学・医学賞受賞者であるDr. Oliver Smithies氏とノースカロライナ大学チャペルヒル校ロバート・H・ワグナー特別教授である前田信代氏（1977年東北大学理学博士取得）が12月10日（水）男女共同参画推進センターを来訪され、意見交換を行いました。本センターからは、大槻副センター長・横爪センター助手・SAや学内の女性研究者ら10名が参加しました。

動脈硬化のモデルマウス作製で有名な前田先生ですが、「研究との出会いは、思い返せば、アサカガオの開花について『自由研究』がはじまりだった。』という機要まいいエピソードを語りました。スミティース先生は、「研究のひらめきを得るには、よく眠り、たくさんディスカッションをすることが大事。後輩などに教えるということも自分の考えや研究内容についてより深める良い機会になる。」（将来のパートナー選びがとても大切、お互いを尊重し合える相手を選びましょう）」というアドバイスがありました。

日本では理系に進学する女子学生がまだまだ少ないのが現状ですが、前田先生はノースカロライナ大学では半数以上が女子学生であるとのこと、意見交換は時間隔たっても驚きことなく、次世代の女性研究者へ温かいエールをいただきました。

Science Angel

サイエンス・エンジェル(SA)について

自然科学研究に従事する
使命感・責任感の醸成・研究者の
卵としてのスキルアップ

サイエンスエンジェル(SA)は次世代の女性研究者の育成、また、次世代を担う小中高校生の身近なロールモデルとなり、科学の魅力を伝えることを目的として、平成18年度から平成20年度に実施された科学長統振興調整「科学長統振興調整」の女性科学者ハートリング支援事業にて誕生しました。事業終了後、平成21年度からは東北大学独自の活動として継続して、SAらは自然科学系の10部局に所属する博士課程前期後期(修士・博士)の女子大学研究生によって構成されています。年度毎に学内で公募され、採用者は能力によって任命を受けます。

【トピックス】

SA 師友会 第1回澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画奨励賞受賞
「東北大学サイエンス・エンジェル(SA)修了生による
男女共同参画推進の取組み」

SAOG・現役生有志らによって活動しているSA師友会(エスエーきゆうかい)が、自ら科学イベント等の企画を行うほか、現役学生のSA活動や進路に関するアドバイスをを行う等、ロールモデルとしても貴重な役割を果たしていることが認められ、第1回澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画奨励賞を受賞した期系の女子大学研究生修了生による活動の今後の活躍が期待されます。

ノルウェー大使 東北大学来訪

11月7日に駐日ノルウェー王国のアリソン・メスタ大使とマリット・フログネル大使夫人らが東北大学を表敬訪問しセンターにて、理事・副センター長、SAらと意見交換会を行いました。

ノースカロライナ大学 前田先生・スミティーズ先生、東北大学来訪

12月10日に東北大学出身でノースカロライナ大学チャペルヒル校ロバート・H・ワグナー特別教授の前田信代氏とノースカロライナ大学チャペルヒル校教授で2007年ノーベル生理学・医学賞受賞者のオリバー・スミティーズ氏とSAが意見交換をしました。

毎月SAは活動しております

- 6月 オリエンテーション、出張セミナー1件
- 7月 オープンキャンパスイベント、ワークショップ1件、体験型科学イベント1件
- 8月 体験型科学イベント2件
- 9月 出張セミナー2件
- 10月 出張セミナー2件シンポジウムへの参加1件

- 11月 出張セミナー1件、サイエンスアゴラへの出席、来訪対応
- 12月 来訪対応
- 1月 出張セミナー1件
- 2月 出張セミナー1件
- 3月 出張セミナー2件、SA活動報告会
- 4月 (新集SA募集)

SAの採用人数

部局名、年度	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26
理学部研究科	10	8	4	8	3	10	9	9	
医学部研究科	4	5	6	7	5	3	1	5	12
歯学部研究科	4	2	1	3	4	5	4	1	4
薬学部研究科	5	7	8	6	6	6	8	7	7
工学部研究科	3	8	9	4	6	8	8	11	9
農学部研究科	1	6	5	3	4	5	4	9	10
情報科学部研究科	1	1	2	1	1	1	3	1	0
生命科学部研究科	11	11	7	6	4	4	7	14	13
環境科学部研究科	0	4	2	4	4	3	8	3	3
医工学部研究科	—	2	1	2	3	4	3	4	
合計	39	52	50	39	44	41	57	63	71
修士課程	19	21	26	23	35	30	40	44	62
博士課程	20	31	24	16	9	11	17	19	9

SAOGは国内外の大学・研究所、公務員・民間企業など広範に就職しています

【学・研究所・公務員など】東北大・九大・阪大・佐賀大・国連大学・東京医科歯科大・旭化成・科捜研・シカゴ大・IGB(ドイツ)・KU Leuven(ベルギー)・文科省・国土地理院・医薬品医療機器総合機構・日本原子力研究開発機構・工業高等専門学校教員・高校教員など

【民間企業など】製薬・食品・自動車・化粧品・医療機器・化学・繊維メーカーなど多数

女性研究者支援・育成活動の伝播効果を期待

東北大学 サイエンス・エンジェル 活動報告書

Send a seed of the curiosity Tohoku University



東北大学は大正2年(1913年)、当時の国立大学として初めて女性に門戸を開き、3名の女子学生を理学部へ入学させました。その伝統のもと、本学では平成13年に全学的組織として男女共同参画委員会を発足させ、男女格差の是正、研究・労働環境の改善、学内保育園の設置・運営を含めた両立支援体制の充実などに努めてまいりました。

平成25年(2013年)には、日本初の女子学生が入学してから100年を迎えたことを記念して、「男女共同参画推進のための行動指針」の策定及び発信、並びに記念シンポジウムの開催などの行事を展開しました。これを受けて、本学全体の男女共同参画活動を円滑に推進することを目的として「男女共同参画推進センター」を設置することとなり、平成26年4月より発足いたしました。男女共同参画推進センターでは、「行動指針」に基づき、男女共同参画委員会を支援して、(1)面立支援・環境整備、(2)女性リーダー育成、(3)次世代育成、(4)顕彰制度、(5)地域連携、(6)国際化対応、(7)支援推進体制、の7プログラムを実施していく予定です。

今後も様々な取組を通じて男女共同参画の推進に励んでまいりたいと存じます。

どうぞ皆様の一層のご支援とご協力をよろしくお願い申し上げます。



東 北 大 学
男 女 共 同 参 画
推 進 セ ン タ ー

Tohoku University Center
for Gender Equality Promotion



東北大学男女共同参画推進センター

Tohoku University Center for Gender Equality Promotion

TEL 022-217-6092

F 980-8577 宮城県仙台市青葉区片平2-1-1

E-mail tumug@morhime.tohoku.ac.jp

HP www.morhime.tohoku.ac.jp



動 指 針

東北大学における 男女共同参画推進のための行動指針

1. 両立支援・環境整備

本学構成員が、年齢性別等を問わず、仕事や学業と生活との両立を図ることができるよう、意識の醸成に努め、子育て支援のための学内施設の充実や介護支援を含めた制度等の環境整備と周知を進める。

2. 女性リーダー育成

アカデミアにおける男女共同参画の推進に向けて、女性研究者を積極的に採用・養成し、さらに学内および学会・社会のリーダーとして飛躍させるための支援・雇用制度を整備する。

3. 次世代育成

将来性豊かな次世代女性研究者を輩出するために、サイエンス・エンジェル(SA)活動を積極・推進することなどにより、学部生・大学院生を対象とした研究者使命の意識啓発と養成に努め、さらに其体験を通して育成する施策を推進する。

4. 顕彰制度

アカデミアにおける男女共同参画の先駆者として、各分野で活躍し多大な貢献をなした方々を顕彰し顕彰として「東北大学男女共同参画賞」を創設する。

5. 地域連携

東北地方の中心に位置する大学として、東北地方の多くの大学・行政機関等との連携を進め、地域発展や震災復興事業等における男女共同参画を推進する。

6. 国際化対応

ワールドクラスへの展開に向けて、グローバルな研究・教育体制に相応しい、外国人研究者・留学生を対象とした様々な両立支援策を講じ、国際的観点に基づいて学内の男女共同参画を推進する。

7. 支援推進体制

上記の男女共同参画活動を円滑に推進するために、男女共同参画担当理事(若しくは副学長)と総長特別補佐(男女共同参画担当)を置き、さらに「男女共同参画推進センター」などの恒常的支援体制を整備する。

センターの活動

両立支援・環境整備

出産・育児期等の教職員・学生に両立支援を行います。
また子育てに関する環境整備を行います。

プログラム名	内 容	対象部局	対 象
研究支援要員	研究支援要員雇用のために必要な人件費の補助	自然科学系部局	育児を行う女性研究者
研究支援要員(シニア型)	専任者として事務補佐員(男女共同参画推進センターより派遣)をシニア	自然科学系部局	互いに提供する女性研究者の育児や介護を行う際の専任委員等に就任
ベビーシッター利用料等補助	研究・講義・出張時のベビーシッター利用料等の補助	全部局	教員・技術職員、PD、博士学生(男女を問わず)

学内保育園

●川内けやき保育園	病後児保育室
全部局の教職員(道職員等含む)、学生(大学院生、研究生等含む)を対象とした学内保育園です。	●星の子ルーム 全部局の教職員(道職員等含む)、学生(大学院生、研究生等含む)を対象とした学内病後児保育室です。
●星の子保育園 原則として星後地区職員の教職員(道職員等含む)、学生(大学院生、研究生等含む)を対象とした保育園です。	 新設児保育室「星の子ルーム」

女性リーダー育成

新規採用の女性研究者への研究費や、研究スキルアップ経費を支援します。
女性リーダー育成のためのセミナーやイベントを行います。
女性教授の方々に「沢柳フェロー」として協力をいただき女性教員への指導・助言を行っていただきます。

プログラム名	内 容	対象部局	対 象
スタートアップ研究費	1年目100万円 2年目50万円の研究費を支援	全部局	新規採用の女性教員(助教以上)
研究スキルアップ経費	会議・シンポジウム・研究会等の旅費支援	全部局	女性教員(准教授、講師、助教)

次世代育成



自然科学系部局に在籍する大学院女子学生を「サイエンス・エンジェル」として任命し、中高生等を対象とした次世代育成活動を行います。
また、海外において開催される国際学会等で研究発表を行う大学院女子学生を対象として、その渡航に係る費用を支援します。

プログラム名	内 容	対象部局	対 象
サイエンス・エンジェル	高校出張セミナー、オープンキャンパス、科学イベント企画・実施	自然科学系研究科	自然科学系の大学院女子学生
仙台インテラクラブ	海外で開催される会議・シンポジウム等の旅費支援	全研究科	大学院女子学生

●サイエンス・エンジェルへの依頼はこちらへ sa_office@morihime.tohoku.ac.jp

顕彰制度

アカデミアにおける男女共同参画の先駆者として各分野で活躍し多大な貢献をなした方々を顕彰し顕彰いたします。

澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画奨励賞

澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画奨励賞



「澤柳賞」という名称は、門戸開放の理念を打ち出した初代総長・澤柳政太郎に因みます。この理念に基づき大正2年(1913年)に3名の「女子学生」が日本で初めて誕生しました

男女共同参画推進センターでは、

- ・男女共同参画推進に関する情報収集・発信を行っています。
- ・メールマガジン「サテライト」の登録を希望の方は tumug@morihime.tohoku.ac.jp まで。
- ・各局の男女共同参画に関する取組との連携を図っています。

東北大学における在籍教員・学生の女性比率

①主要部局における在籍教員の女性比率（教授・准教授・講師・助教）

各年度5月1日現在

部 局 名	平成24年度				平成25年度				平成26年度			
	男性	女性	計	女性比率	男性	女性	計	女性比率	男性	女性	計	女性比率
文学研究科・文学部	81	16	97	16.49%	80	15	95	15.79%	80	15	95	15.79%
教育学研究科・教育学部	29	5	34	14.71%	30	6	36	16.67%	32	4	36	11.11%
法学研究科・法学部	47	14	61	22.95%	46	15	61	24.59%	46	14	60	23.33%
経済学研究科・経済学部	56	5	61	8.20%	54	7	61	11.48%	53	8	61	13.11%
国際文化研究科	39	8	47	17.02%	35	7	42	16.67%	33	5	38	13.16%
教育情報学研究部	9	0	9	0.00%	9	0	9	0.00%	9	0	9	0.00%
理学研究科・理学部	254	15	269	5.58%	242	10	276	3.62%	239	11	250	4.40%
薬学研究科・薬学部	60	9	69	13.04%	58	9	67	13.43%	55	9	64	14.06%
工学研究科・工学部	324	20	344	5.81%	334	15	349	4.30%	336	14	350	4.00%
農学研究科・農学部	102	14	116	12.07%	103	15	118	12.71%	104	16	120	13.33%
情報科学研究科	81	6	87	6.90%	78	7	85	8.24%	79	5	84	5.95%
生命科学研究科	75	8	83	9.64%	69	10	79	12.66%	66	8	74	10.81%
環境科学研究科	51	2	53	3.77%	50	3	53	5.66%	51	5	56	8.93%
医工学研究科	25	3	28	10.71%	25	3	28	10.71%	31	4	35	11.43%
金属材料研究所	113	6	119	5.04%	116	7	123	5.69%	121	5	126	3.97%
流体科学研究所	37	4	41	9.76%	39	2	41	4.88%	39	2	41	4.88%
電気通信研究所	65	2	67	2.99%	67	1	68	1.47%	66	1	67	1.49%
多元物質科学研究所	133	3	136	2.21%	128	4	132	3.03%	135	4	139	2.88%
災害科学国際研究所	—	—	—	—	50	8	58	13.79%	58	11	69	15.94%
医学系研究科・医学部	247	54	301	17.94%	250	54	304	17.76%	255	57	312	18.27%
歯学研究科・歯学部	77	15	92	16.30%	76	18	94	19.15%	79	19	98	19.39%
加齢医学研究所	56	5	61	8.20%	53	7	60	11.67%	56	5	61	8.20%
自然科学系＋文系	1961	214	2175	9.84%	1992	223	2215	10.07%	2023	222	2245	9.89%
文系	261	48	309	15.53%	254	50	304	16.45%	253	46	299	15.38%
自然科学系	1700	166	1866	8.90%	1738	173	1911	9.05%	1770	176	1946	9.04%

※ 毎年5/1に行われる学校基本調査より主要部局のみ抜粋（助手を除く）

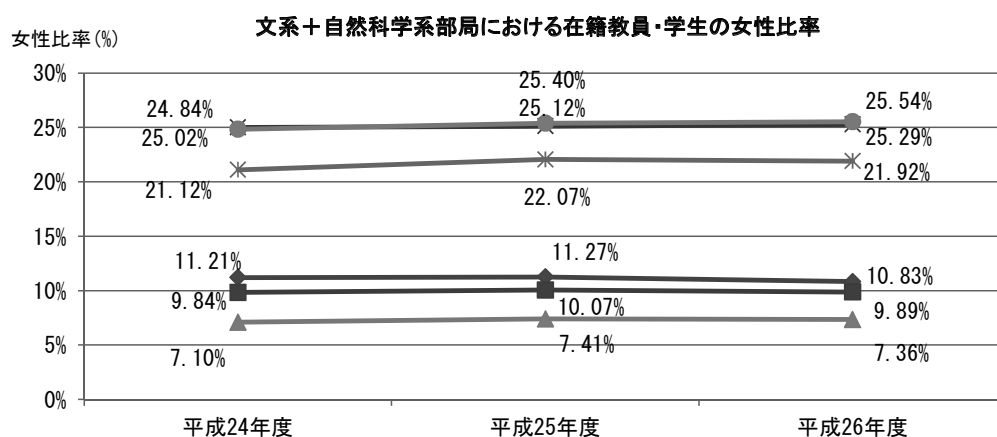
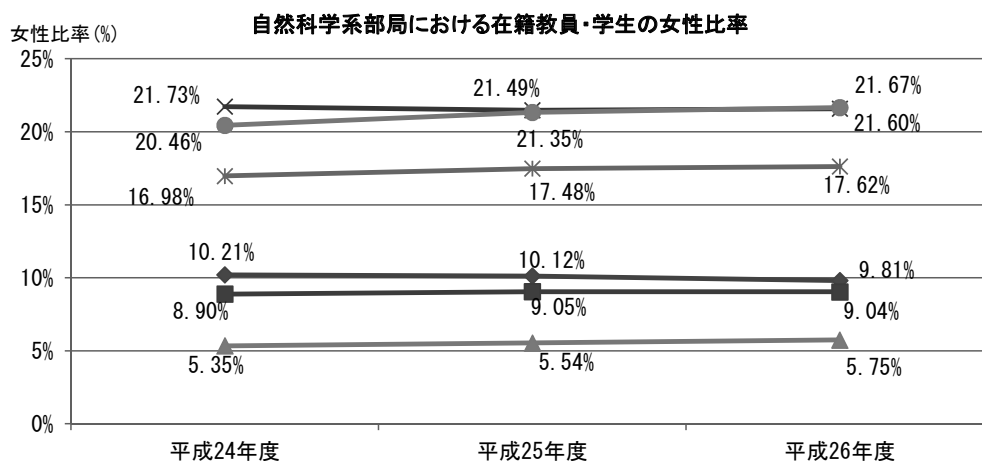
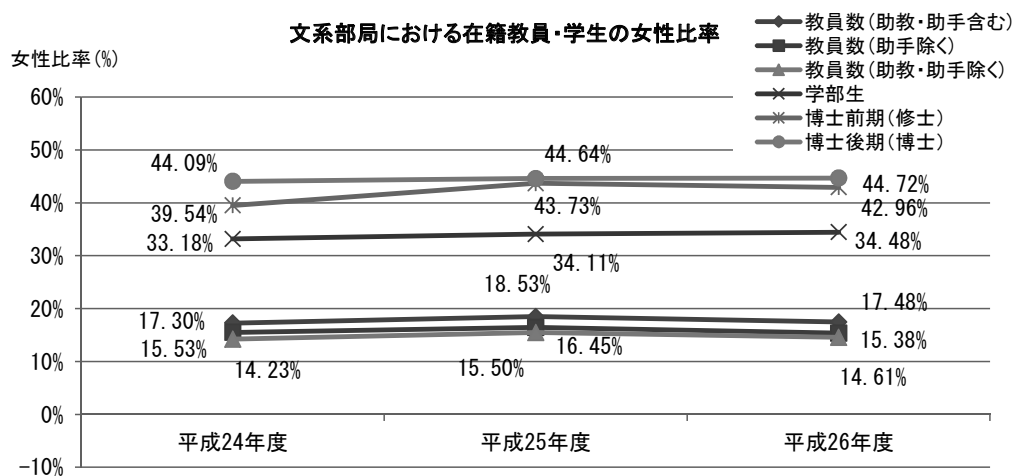
②主要部局における職種別在籍教員・学生の女性比率

各年度5月1日現在

部 局 名	職 名	平成24年度				平成25年度				平成26年度			
		男 性	女 性	計	女性比率	男 性	女 性	計	女性比率	男 性	女 性	計	女性比率
文学研究科	教授	37	3	40	7.50%	38	4	42	9.52%	41	4	45	8.89%
	准教授（助教授）	32	6	38	15.79%	29	6	35	17.14%	27	6	33	18.18%
	講師			0	-			0	-			0	-
	助教	12	7	19	36.84%	13	5	18	27.78%	12	5	17	29.41%
	助手	1		1	0.00%			0	-	1		1	0.00%
文学研究科 学生	教員数（総数）	82	16	98	16.33%	80	15	95	15.79%	81	15	96	15.63%
	学部	460	512	972	52.67%	463	534	997	53.56%	448	529	977	54.15%
	修士（博士前期）	95	86	181	47.51%	92	81	173	46.82%	96	77	173	44.51%
	博士（博士後期）	116	76	192	39.58%	99	76	175	43.43%	97	72	169	42.60%
	教授	16	2	18	11.11%	16	2	18	11.11%	16	1	17	5.88%
教育学研究科	准教授（助教授）	10	2	12	16.67%	11	2	13	15.38%	11	2	13	15.38%
	講師			0	-			0	-			0	-
	助教	3	1	4	25.00%	3	2	5	40.00%	5	1	6	16.67%
	助手			0	-			0	-			0	-
	教員数（総数）	29	5	34	14.71%	30	6	36	16.67%	32	4	36	11.11%
教育学研究科 学生	学部	156	153	309	49.51%	153	149	302	49.34%	150	158	308	51.30%
	修士（博士前期）	28	42	70	60.00%	28	45	73	61.64%	26	50	76	65.79%
	博士（博士後期）	48	44	92	47.83%	43	43	86	50.00%	38	42	80	52.50%
	教授	23	4	27	14.81%	24	5	29	17.24%	27	5	32	15.63%
	准教授（助教授）	16	9	25	36.00%	16	8	24	33.33%	14	7	21	33.33%
法学研究科	講師			0	-		1	1	100.00%		1	1	100.00%
	助教	8	1	9	11.11%	6	1	7	14.29%	5	1	6	16.67%
	助手	1	3	4	75.00%	1	3	4	75.00%	1	3	4	75.00%
	教員数（総数）	48	17	65	26.15%	47	18	65	27.69%	47	17	64	26.56%
	学部	522	184	706	26.06%	522	184	706	26.06%	530	189	719	26.29%
法学研究科 学生	修士（博士前期）	187	54	241	22.41%	156	69	225	30.67%	144	35	179	19.55%
	博士（博士後期）	33	22	55	40.00%	35	21	56	37.50%	31	15	46	32.61%
	教授	37	2	39	5.13%	34	2	36	5.56%	32	2	34	5.88%
	准教授（助教授）	15	3	18	16.67%	16	5	21	23.81%	18	6	24	25.00%
	講師	4	0	4	0.00%	4		4	0.00%	3		3	0.00%
経済学研究科	助教	0	0	0	-			0	-			0	-
	助手	0	4	4	100.00%		5	5	100.00%		5	5	100.00%
	教員数（総数）	56	9	65	13.85%	54	12	66	18.18%	53	13	66	19.70%
	学部	973	190	1172	16.98%	946	212	1158	18.31%	949	217	1166	18.61%
	修士（博士前期）	126	62	188	32.98%	106	56	162	34.57%	97	62	159	38.99%
経済学研究科 学生	博士（博士後期）	45	20	65	30.77%	43	22	65	33.85%	41	22	63	34.92%
	教授	22	5	27	18.52%	21	4	25	16.00%	22	4	26	15.38%
	准教授（助教授）	17	3	20	15.00%	14	3	17	17.65%	11	1	12	8.33%
	講師			0	-			0	-			0	-
	助教			0	-			0	-			0	-
国際文化研究科	助手			0	-			0	-			0	-
	教員数（総数）	39	8	47	17.02%	35	7	42	16.67%	33	5	38	13.16%
	学部	25	54	79	68.35%	20	54	74	72.97%	26	59	85	69.41%
	修士（博士前期）	28	54	82	65.85%	21	40	61	65.57%	24	40	64	62.50%
	教授	4	0	4	0.00%	4		4	0.00%	4		4	0.00%
教育情報学研究所・教育部	准教授（助教授）	1	0	1	0.00%	2		2	0.00%	2		2	0.00%
	講師	1	0	1	0.00%			0	-			0	-
	助教	3	0	3	0.00%	3		3	0.00%	3		3	0.00%
	助手			0	-			0	-			0	-
	教員数（総数）	9	0	9	0.00%	9	0	9	-	9	0	9	0
教育情報学研究所・教育部 学生	修士（博士前期）	16	14	30	46.67%	11	16	27	59.26%	8	16	24	66.67%
	博士（博士後期）	14	8	22	36.36%	17	6	23	26.09%	15	8	23	34.78%
理学部・理学研究科	教授	73	1	74	1.35%	73	1	74	1.35%	75	1	76	1.32%
	准教授（助教授）	75	3	78	3.85%	75	2	77	2.60%	75	3	78	3.85%
	講師	6	1	7	14.29%	7		7	0.00%	4		4	0.00%
	助教	100	10	110	9.09%	87	7	94	7.45%	85	7	92	7.61%
	助手	3	1	4	25.00%	3	1	4	25.00%	3	1	4	25.00%
理学部・理学研究科 学生	教員数（総数）	257	16	273	5.86%	245	11	256	4.30%	242	12	254	4.72%
	学部	1188	223	1411	15.80%	1184	227	1411	16.09%	1192	220	1412	15.58%
	修士（博士前期）	505	79	584	13.53%	493	85	578	14.71%	501	85	586	14.51%
	博士（博士後期）	247	34	281	12.10%	255	29	284	10.21%	254	43	297	14.48%
	教授	78	13	91	14.29%	78	11	89	12.36%	76	12	88	13.64%
医学部医学科・医学系研究科	准教授（助教授）	59	7	66	10.61%	62	7	69	10.14%	64	7	71	9.86%
	講師	22	7	29	24.14%	28	8	36	22.22%	27	7	34	20.59%
	助教	88	27	115	23.48%	82	28	110	25.45%	88	31	119	26.05%
	助手	14	16	30	53.33%	12	13	25	52.00%	14	11	25	44.00%
	教員数（総数）	261	70	331	21.15%	262	67	329	20.36%	269	68	337	20.18%
医学部医学科・医学系研究科 学生	学部	614	103	717	14.37%	643	106	749	14.15%	667	106	773	13.71%
	修士（博士前期）	87	90	177	50.85%	85	84	169	49.70%	80	87	167	52.10%
	博士（博士後期・博士）	478	187	665	28.12%	498	206	704	29.26%	491	197	688	28.63%
	教授			0	-			0	-			0	-
	准教授（助教授）			0	-			0	-			0	-
医学部保健学科	講師			0	-			0	-			0	-
	助教			0	-			0	-			0	-
	助手			0	-			0	-			0	-
	教員数（総数）	0	0	0	-			0	-			0	-
	学部	176	424	600	70.67%	173	424	597	71.02%	179	413	592	69.76%
歯学部・歯学研究科	教授	18	1	19	5.26%	19	1	20	5.00%	21	1	22	4.55%
	准教授（助教授）	10	0	10	0.00%	9	1	10	10.00%	13	1	14	7.14%
	講師	5	1	6	16.67%	9	1	10	10.00%	6	1	7	14.29%
	助教	44	13	57	22.81%	39	15	54	27.78%	39	16	55	29.09%
	助手			0	-			0	-			0	-
歯学部・歯学研究科 学生	教員数（総数）	77	15	92	16.30%	76	18	94	19.15%	79	19	98	19.39%
	学部	208	125	333	37.54%	201	129	330	39.09%	205	129	334	38.62%
	修士（博士前期）	6	6	12	50.00%	6	6	12	50.00%	5	12	17	70.59%
	博士（博士後期）	108	52	160	32.50%	108	58	166	34.94%	115	51	166	30.72%
	教授	20	0	20	0.00%	18		18	0.00%	20		20	0.00%
薬学部・薬学研究科	准教授（助教授）	13	2	15	13.33%	12	3	15	20.00%	10	3	13	23.08%
	講師	3	2	5	40.00%	3	1	4	25.00%	3	1	4	25.00%
	助教	24	5	29	17.24%	25	5	30	16.67%	22	5	27	18.52%
	助手	4	5	9	55.56%	3	3	6	50.00%	3	2	5	40.00%
	教員数（総数）	64	14	78	17.95%	61	12	73	16.44%	58	11	69	15.94%
薬学部・薬学研究科 学生	学部（4年制＋6年制）	262	116	378	30.69%	280	103	383	26.89%	277	103	380	27.11%
	修士（博士前期）	110	29	139	20.86%	97	29	126	23.02%	87	33	120	27.50%
	博士（博士後期）	71	11	82	13.41%	69	14	83	16.87%	64	16	80	20.00%
	教授	106	2	108	1.85%	111	1	112	0.89%	115	1	116	0.86%
	准教授（助教授）	95	2	97	2.06%	96	2	98	2.04%	100	4	104	3.85%
工学部・工学研究科	講師	1	0	1	0.00%	1		1	0.00%	2		2	0.00%
	助教	122	16	138	11.59%	126	12	138	8.70%	119	9	128	7.03%
	助手	3	5	8	62.50%	4	4	8	50.00%	4	3	7	42.86%
	教員数（総数）	327	25	352	7.10%	338	19	357	5.32%	340	17	357	4.76%
	学部	3286	412	3698	11.14%	3278	415	3693	11.24%	3282	444	3726	11.92%
工学部・工学研究科学生	修士（博士前期）	1357	161	1518	10.61%	1351	156	1507	10.35%	1338	141	1479	9.53%
	博士（博士後期）	502	51	553	9.22%	469	51	520	9.81%	474	54	528	10.23%

部 局 名	職 名	平成24年度				平成25年度				平成26年度			
		男 性	女 性	計	女性比率	男 性	女 性	計	女性比率	男 性	女 性	計	女性比率
農学部・農学研究科	教授	39	2	41	4.88%	39	2	41	4.88%	40	2	42	4.76%
	准教授（助教授）	35	4	39	10.26%	39	4	43	9.30%	38	4	42	9.52%
	講師			0	—			0	—			0	—
	助教	28	8	36	22.22%	25	9	34	26.47%	26	10	36	27.78%
	助手	5	1	6	16.67%	5	1	6	16.67%	4	0	4	0.00%
	教員数（総数）	107	15	122	12.30%	108	16	124	12.90%	108	16	124	12.90%
農学部・農学研究科 学生	学部	380	294	674	43.62%	396	281	677	41.51%	381	288	669	43.05%
	修士（博士前期）	192	94	286	32.87%	193	109	302	36.09%	161	106	267	39.70%
	博士（博士後期）	80	35	115	30.43%	85	37	122	30.33%	80	36	116	31.03%
		30	0	30	0.00%	27		27	0.00%	32		32	0.00%
情報科学研究科	教授	26	4	30	13.33%	28	5	33	15.15%	27	4	31	12.90%
	准教授（助教授）	1	1	2	50.00%	1	1	2	50.00%	1	1	2	50.00%
	講師	24	1	25	4.00%	22	1	23	4.35%	20	0	20	0.00%
	助教	0	0	0	—			0	—			0	—
	助手	81	6	87	6.90%	78	7	85	8.24%	79	5	84	5.95%
	教員数（総数）	269	31	300	10.33%	259	29	288	10.07%	262	29	291	9.97%
情報科学研究科 学生	修士（博士前期）	94	22	116	18.97%	88	22	110	20.00%	85	23	108	21.30%
	博士（博士後期）	26	1	27	3.70%	25	1	26	3.85%	25	1	26	3.85%
	准教授（助教授）	17	0	17	0.00%	16		16	0.00%	16		16	0.00%
	講師	2	0	2	0.00%	2		2	0.00%	2		2	0.00%
生命科学研究所	助教	30	7	37	18.92%	26	9	35	25.71%	23	7	30	23.33%
	助手	1	0	1	0.00%	1		1	0.00%	1		1	0.00%
	教員数（総数）	76	8	84	9.52%	70	10	80	12.50%	67	8	75	10.67%
	修士（博士前期）	138	43	181	23.76%	140	48	188	25.53%	142	50	192	29.35%
	博士（博士後期）	71	28	99	28.28%	57	26	83	31.33%	56	27	83	32.53%
		19	0	19	0.00%	19		19	0.00%	19		19	0.00%
環境科学研究科	准教授（助教授）	18	0	18	0.00%	17		17	0.00%	20		20	0.00%
	講師			0	—			0	—		1	1	—
	助教	14	2	16	12.50%	14	3	17	17.65%	12	4	16	25.00%
	助手	2	2	4	50.00%	3	2	5	40.00%	3	2	5	40.00%
	教員数（総数）	53	4	57	7.02%	53	5	58	8.62%	54	7	61	11.48%
	修士（博士前期）	176	51	227	22.47%	166	42	208	20.19%	166	33	199	16.58%
環境科学研究科 学生	博士（博士後期）	88	28	116	24.14%	76	24	100	24.00%	65	25	90	27.78%
	教授	17	1	18	5.56%	17	1	18	5.56%	20	1	21	4.76%
	准教授（助教授）	5	1	6	16.67%	5	2	7	28.57%	5	2	7	28.57%
	講師			0	—			0	—			0	—
医工学研究所	助教	3	1	4	25.00%	3		3	0.00%	6	1	7	14.29%
	助手	0	1	1	100.00%		1	1	100.00%		0	0	#DIV/0!
	教員数（総数）	25	4	29	13.79%	25	4	29	13.79%	31	4	35	11.43%
	修士（博士前期）	74	12	86	13.95%	67	17	84	20.24%	67	16	83	19.28%
	博士（博士後期）	34	8	42	19.05%	34	5	39	12.82%	44	6	50	12.00%
		24	0	24	0.00%	26		26	0.00%	28		28	0.00%
金属材料研究所	准教授（助教授）	37	0	37	0.00%	36	2	38	5.26%	34	2	36	5.56%
	講師	2	0	2	0.00%	1		1	0.00%	2		2	0.00%
	助教	50	6	56	10.71%	53	5	58	8.62%	57	3	60	5.00%
	助手	1	0	1	0.00%	4	1	5	20.00%	6	1	7	14.29%
	教員数（総数）	114	6	120	5.00%	120	8	128	6.25%	127	6	133	4.51%
	教授	15	0	15	0.00%	15		15	0.00%	15		15	0.00%
流体科学研究所	准教授（助教授）	10	1	11	9.09%	9	1	10	10.00%	10	1	11	9.09%
	講師	1	1	2	50.00%	1	1	2	50.00%	1	1	2	50.00%
	助教	11	2	13	15.38%	14		14	0.00%	13		13	0.00%
	助手			0	—			0	—			0	—
	教員数（総数）	37	4	41	9.76%	39	2	41	4.88%	39	2	41	4.88%
	教授	25	0	25	0.00%	24		24	0.00%	24		24	0.00%
電気通信研究所	准教授（助教授）	18	0	18	0.00%	20		20	0.00%	18		18	0.00%
	講師			0	—			0	—			0	—
	助教	22	2	24	8.33%	23	1	24	4.17%	24	1	25	4.00%
	助手			0	—			0	—			0	—
	教員数（総数）	65	2	67	2.99%	67	1	68	1.47%	66	1	67	1.49%
	教授	20	0	20	0.00%	18	1	19	5.26%	19	2	21	9.52%
加齢医学研究所	准教授（助教授）	10	1	11	9.09%	10	1	11	9.09%	11	0	11	0.00%
	講師	4	0	4	0.00%	4		4	0.00%	3	0	3	0.00%
	助教	22	4	26	15.38%	21	5	26	19.23%	23	3	26	11.54%
	助手			0	—			0	—			0	—
	教員数（総数）	56	5	61	8.20%	53	7	60	11.67%	56	5	61	8.20%
	教授	39	1	40	2.50%	42	1	43	2.33%	43	1	44	2.27%
多元物質科学研究所	准教授（助教授）	32	0	32	0.00%	29		29	0.00%	32		32	0.00%
	講師	5	0	5	0.00%	4		4	0.00%	2		2	0.00%
	助教	57	2	59	3.39%	53	3	56	5.36%	58	3	61	4.92%
	助手			0	—			0	—			0	—
	教員数（総数）	133	3	136	2.21%	128	4	132	3.03%	135	4	139	2.88%
	教授				—	22	0	22	0.00%	23	0	23	0.00%
災害科学国際研究所	准教授（助教授）				—	10	2	12	16.67%	11	3	14	21.43%
	講師				—	1	1	2	50.00%	1	1	2	50.00%
	助教				—	17	5	22	22.73%	23	7	30	23.33%
	助手				—	3	1	4	—	3	1	4	—
	教員数（総数）				—	53	9	62	14.52%	61	12	73	16.44%
	教授	139	16	155	10.32%	137	17	154	11.04%	142	16	158	10.13%
文系	准教授（助教授）	91	23	114	20.18%	88	24	112	21.43%	83	22	105	20.95%
	講師	5	0	5	0.00%	4	1	5	20.00%	3	1	4	25.00%
	助教	26	9	35	25.71%	25	8	33	24.24%	25	7	32	21.88%
	助手	2	7	9	77.78%	1	8	9	88.89%	2	8	10	80.00%
	教員数（助教・助手含む）	263	55	318	17.30%	255	58	313	18.53%	255	54	309	17.48%
	教員数（助手除く）	261	48	309	15.53%	254	50	304	16.45%	253	46	299	15.38%
	教員数（助教・助手除く）	235	39	274	14.23%	229	42	271	15.50%	228	39	267	14.61%
	学部生	2111	1048	3159	33.18%	2084	1079	3163	34.11%	2077	1093	3170	34.48%
	修士（博士前期）	477	312	789	39.54%	413	321	734	43.73%	397	299	696	42.96%
	博士（博士後期）	284	224	508	44.09%	258	208	466	44.64%	246	199	445	44.72%
	教授	549	22	571	3.85%	573	20	593	3.37%	595	22	617	3.57%
	准教授（助教授）	460	25	485	5.15%	473	32	505	6.34%	484	34	518	6.56%
自然科学系	講師	52	13	65	20.00%	62	13	75	17.33%	53	13	66	19.70%
	助教	639	106	745	14.23%	630	108	738	14.63%	638	107	745	14.36%
	助手	33	31	64	48.44%	38	27	65	41.54%	41	21	62	33.87%
	教員数（助教・助手含む）	1733	197	1930	10.21%	1776	200	1976	10.12%	1811	197	2008	9.81%
	教員数（助手除く）	1700	166	1866	8.90%	1738	173	1911	9.05%	1770	176	1946	9.04%
	教員数（助教・助手除く）	1061	60	1121	5.35%	1108	65	1173	5.54%	1132	69	1201	5.75%
	学部生	6114	1697	7811	21.73%	6155	1685	7840	21.49%	6183	1703	7886	21.60%
	修士（博士前期）	2914	596	3510	16.98%	2857	605	3462	17.48%	2809	601	3410	17.62%
	博士（博士後期）	1773	456	2229	20.46%	1739	472	2211	21.35%	1728	478	2206	21.67%
	教授	688	38	726	5.23%	710	37	747	4.95%	737	38	775	4.90%
	准教授（助教授）	551	48	599	8.01%	561	56	617	9.08%	567	56	623	8.99%
	講師	57	13	70	18.57%	66	14	80	17.50%	56	14	70	20.00%
自然科学系+文系	助教	665	115	7									

③主要部局における職種別在籍教員・学生の女性比率(グラフ)



※毎年5月1日行われる学校基本調査より、主要部局のみを抜粋

④主要部局における新規採用教員の女性比率(教授・准教授・講師・助教・助手)

※平成24年度、平成25年度は3月末の数、平成26年度は1月1日の数

部 局 名	平成24年度				平成25年度				平成26年度			
	男性	女性	計	女性比率	男性	女性	計	女性比率	男性	女性	計	女性比率
文学研究科・文学部	10	4	14	28.57%	9	3	12	25.00%	3	1	4	25.00%
教育学研究科・教育学部	2	0	2	0.00%	2	1	3	33.33%	2	0	2	0.00%
法学研究科・法学部	8	2	10	20.00%	7	3	10	30.00%	5	1	6	16.67%
経済学研究科・経済学部	2	0	2	0.00%	5	4	9	44.44%	2	1	3	33.33%
国際文化研究科	1	0	1	0.00%	0	0	0	—	0	0	0	—
教育情報学研究部	0	0	0	—	1	0	1	0.00%	0	0	0	—
理学研究科・理学部	31	4	35	11.43%	37	1	38	2.63%	17	0	17	0.00%
薬学研究科・薬学部	4	2	6	33.33%	6	1	7	14.29%	7	2	9	22.22%
工学研究科・工学部	43	7	50	14.00%	35	2	37	5.41%	28	3	31	9.68%
農学研究科・農学部	2	0	2	0.00%	3	1	4	25.00%	3	0	3	0.00%
情報科学研究科	3	1	4	25.00%	6	0	6	0.00%	8	2	10	20.00%
生命科学研究科	9	4	13	30.77%	9	2	11	18.18%	7	1	8	12.50%
環境科学研究科	0	1	1	100.00%	2	0	2	0.00%	6	0	6	0.00%
医工学研究科	3	0	3	0.00%	4	0	4	0.00%	3	1	4	25.00%
金属材料研究所	23	2	25	8.00%	17	1	18	5.56%	13	0	13	0.00%
流体科学研究所	2	0	2	0.00%	4	0	4	0.00%	3	0	3	0.00%
電気通信研究所	5	0	5	0.00%	3	1	4	25.00%	0	0	0	—
多元物質科学研究所	9	0	9	0.00%	12	2	14	14.29%	6	0	6	0.00%
災害科学国際研究所	46	6	52	11.54%	11	2	13	15.38%	2	2	4	50.00%
医学系研究科・医学部	33	14	47	29.79%	46	14	60	23.33%	44	8	52	15.38%
歯学研究科・歯学部	15	4	19	21.05%	11	3	14	21.43%	5	4	9	44.44%
加齢医学研究所	4	2	6	33.33%	8	2	10	20.00%	4	0	4	0.00%
自然科学系＋文系	255	53	308	17.21%	238	43	281	15.30%	168	26	194	13.40%
文系	23	6	29	20.69%	24	11	35	31.43%	12	3	15	20.00%
自然科学系	232	47	279	16.85%	214	32	246	13.01%	156	23	179	12.85%

※ 主要部局のみ抜粋

東北大学男女共同参画委員会報告書（平成 26 年度）

[編集・発行]

東北大学男女共同参画委員会 中期目標・報告書作成 WG

[問い合わせ先]

東北大学総務企画部総務課総務係

〒980-8577 仙台市青葉区片平 2-1-1

TEL : 022-217-4811